

洲本市域学連携事業 10 周年記念シンポジウム記録集

スモトノイキガワ！

洲本市域学連携事業10周年記念シンポジウム記録集



ストリートファイト!

スモトノイキザワ!

洲本市域学連携事業 10 周年記念シンポジウム記録集

2023/11/19

洲本市域学連携事業 10 周年記念シンポジウム クエスト 冒険し続ける地域と人のつくりかた

基調講演① Keynote Speech 1

わたしたちはローカルで幸せ
を見つける～関係人口と
ウェルビーイング～

指出一正

08

パネルディスカッション第一部 Panel Discussion 1

域学連携 10 年の批評と、
今後 10 年を
見据えた提言

白石克孝 野田満 小林力
指出一正 石山恒貴 中川悠

18

オープニング Opening / Mayor's Speech

洲本市の紹介

上崎勝規

06

基調講演② Keynote Speech 2

“冒険人材”の
受け入れ方、
活かし方

石山恒貴

12

パネルディスカッション第二部 Panel Discussion 2

“淡路島クエストカレッジ”
による冒険し続ける
人と地域のつくりかた

富田祐介 柴橋静華 指出一正
石山恒貴 上崎勝規 中川悠

30

功労者表彰 Surprise / Ceremony

40

2023/10/18・23・31

洲本市域学連携事業 10 周年記念シンポジウム WG2 公開ミーティング 関係人口としての大学・企業の座談会 地域づくりに関わる ヨソモノたち

第二夜 Round Table 2

レガサルト株式会社

株式会社大同印刷所

コニカミノルタ株式会社

AKKODiS コンサルティング株式会社

58

第一夜 Round Table 1

近畿大学

大阪工業大学

大和大学

株式会社 E-konzal

44

第三夜 Round Table 3

京都大学 S³

株式会社ワークアカデミー

流通科学大学《しずく》

株式会社 ODK ソリューションズ

74

編集後記 Editor's Note

90

当該シンポジウムに関する資料等は以下より閲覧・ダウンロードできます。



シンポジウム
登壇者発表資料▶



ポスターセッション資料
及び座談会発表資料▶



シンポジウム登壇者
プロフィール▶



シンポジウム広報
チラシ及びポスター▶

事業連携学域市本洲 10周年記念シンポジウム

クエスト
冒険し続ける地域と人のつくりかた

令和5年

11月19日 | 日曜日

13時 - 17時

洲本市文化体育館文化ホール

入場無料



詳細は



主催：洲本市 一般財団法人自治総合センター 後援：総務省

お申し込みは



Opening 洲本市の紹介

Speaker

上崎勝規

洲本市長

Moderator

中川悠

NPO 法人チュラキューブ代表理事

Opening

中川 | 司会進行役とコーディネーターを務めさせていただきます、NPO 法人チュラキューブの中川と申します。改めてよろしくお願い致します。

私は 2018 年にご縁を頂き、洲本市の商店街での取り組みに関わらせて頂いてもう 6 年目になります。今も月に何回か来させて頂いております。一方で大学で授業もしております、ソーシャルデザインや社会課題解決の授業を通して先生や学生を淡路島に送り込んだこともございます。域学連携は地域と大学の連携ということで、先生側の立場と、洲本市の受け入れる立場両方の関わりを持っていて、よく喋る男ということで今回の司会兼コーディネーターを仰せ付けられました（笑）。

今回の為に色々な方が集まれて、この日に向けて話が進められて…今日はポスターセッションなんか色々ありますが、今までの 10 年間で分析して、褒め称えつつ、反省もしつつ、これからの 10 年に向けて何ができるかということなどを皆で考えていきたいというところです。長丁場ですがよろしくお願い致します。

まずは上崎市長にご登壇頂いて、洲本市をご紹介頂きたいと思います。それではよろしくお願い致します。

Mayor's Speech

上崎 | 皆様こんにちは。洲本市長の上崎です。今日は洲本市域学連携事業 10 周年記念シンポジウムにご参加頂きましてありがとうございます。ご登壇頂く講師の皆様にも感謝申し上げます。私から本市の紹介とシンポジウムのポイントについて簡単に説明をさせていただきます。

洲本市は淡路島の中央に位置し、面積は約 182km²、人口は約 42,000 人です。中央部の先山を中心とした山地が続き、東側の洲本川沿いの平野部には市街地が形成されています。西側の五色地域にはなだらかな丘陵地帯が広がり、農業用のため池が多いです。ため池の数は洲本市内で約 3,000 と言われています。温暖で恵まれた自然環境を生かした農水産業が特徴で、かつては大和朝廷に山海の幸を献上していたことから「御食国（みけつくに）」と呼ばれる地域でもあります。食、歴史、文化、自然風景、洲本温泉等楽しめるのが沢山ありますので、是非またお越しを頂きたいと思います。

そんな洲本市ですが人口減少が進み、過疎地域に指定されています。特に進学や就職を機に市外、島外に出て行って帰ってこない若者が多く、若年層人口の減少が活気や賑わいの減少を招いています。そこで都市部から大学の先生や学生を呼び込み、一緒にまちづくりを進めようとする



上崎勝規 洲本市長

でいるのが、この度 10 周年を迎えたこの域学連携事業でございます。

この事業は地域と大学の連携によるまちづくりを指しているのですが、地域にとっては大学の知見や若い人材を活用でき、大学にとっては実践型学習を通して学生を育成できる、双方 win-win の関係で成立する事業だと考えています。学生さんは京阪神からお越し頂くことが多く、大学の強みや特徴を活かしながら活動して頂いています。活動フィールドは町内会や企業、農村、市街地等様々で、学生を受け入れ、共に活動できるリーダーが存在しています。そして大学と地域の間に立つ、大学がやりたいことと地域がやってほしいことをマッチングさせるのが我々行政の役割です。学生の移動手段や宿泊所の確保等のサポートも行います。このように域学連携を推進してきた結果、10 年間で 33 大学、約 860 人もの学生が本市に訪れ、地域の方々と一緒になって様々なチャレンジを行ってきました。その成果については本日のホール外でのポスターセッションの他、バンカランカというホームページでご確認を頂きたいと思ひます。

数ある連携大学の中でも、域学連携に取り組むきっかけを与えて頂き、また事業に推進力を与えて頂いた龍谷大学さんの事例については触れておく必要があると思ひます。再生可能エネルギーを活用した地域活性化をテーマの 1 つに掲げて 10 年間で活躍頂いておりますが、その最大の成果は市内での農業ため池に浮かぶ地域貢献型太陽光発電の設置です。本日で登壇頂く龍谷大学の白石先生が設立された PS 洲本株式会社が事業主体となり、約 8 億円の事業費を地元金融機関と龍谷大学から調達され平成 29 年に竣工しました。

事業に必要な人材や資金をできるだけ市内から調達することで経済を循環させ、発電した電力を売ることのできた利益を全額洲本市の活性化の為に還元するという、大変素晴らしい事業の仕組みとなっております。また市内には龍谷大

学さんの分室を設置して頂き、コワーキングスペースとして開放して頂いています。域学連携の活動の成果をビジネスに繋げたり、若者の様々な新しいチャレンジを後押しする為に補助金を助成する等のご支援を頂いています。

このように、域学連携事業の取り組みによって育まれた外部人材との協働の土壌を活かし、大学に限らず様々な方との連携によってまちづくりをしていくという、次のステージに洲本市は既に移行しており、その為の体制作りも進んでいると考えています。ワーケーションをきっかけに洲本市を訪れる事業者と共にローカルビジネスを創出する為のプラットフォームとして設立された淡路島ゼロイチコンソーシアム、そこから生まれた「淡路島クエストカレッジ」…これは幅広いターゲットに洲本市の資源を題材とする人材育成プログラムを提供し、その成果の実装によって地域活性化に繋げようとするものです。また総務省の制度を活用して更に学びの場を増やし、若者を積極的に誘致する為のスペシャリスト人材として「地域活性化起業人」を 2 名配属するに至っています。

それでは最後に、このシンポジウムでは是非注目頂きたいポイントをお伝え致します。まず 1 点目は域学連携の成果に関する資料や本日の発表資料をホール外のポスターセッションや配布資料の QR コードで全てご確認頂けるという点です。私が発表しているこの資料についても同様です。後日になりますが、本日の様子のアーカイブにつきましても同じく QR コードから確認できるようにします。2 点目は域学連携が継続した背景等に関する事務局側の考えをプログラム前文にお示ししている点です。お時間がある限り是非ご一読頂ければと思ひます。3 点目は域学連携に深く関わる関係人口、越境学習、冒険人材につきまして、それぞれの第一人者に基調講演として語って頂けるという点です。4 点目は域学連携を批評し、提言する為に特色あるワーキンググループを 3 つ立ち上げ、合計 10 数回の検討会を事前に開催した上でディスカッションの一部が開催されるという点です。そして 5 点目はシンポジウムのまとめとして、今後 10 年の域学連携が淡路島クエストカレッジを中心として更に発展する為に、また地域と人が冒険し続ける為に必要なことを議論するという点です。

以上で私からのプレゼンテーションは終わります。本日の議論が域学連携の発展だけでなく、お集まりの皆様の今後のまちづくり活動の一助となりますよう、また私の公約でもあります「ずっと住みたい洲本」の実現に繋がるよう登壇者全員でシンポジウムを作り上げたいと思ひますので、どうぞ「楽しみに」ご拝聴頂きたいと思ひます。約 4 時間の長丁場になりますが最後までどうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。

基調講演① わたしたちはローカルで幸せを見つける～関係人口とウェルビーイング～

Speaker

指出一正

『ソトコト』編集長

指出 | よろしくおあい致します。『ソトコト』というメディアの編集長の指出です。皆さんにお会いできるのを楽しみにしてました。洲本はすごく開かれた華やかなまちだなと常々思っています。今日は関係人口の話をしたいと思いますが、もうひとつ、ウェルビーイングの話もしましょう。域学連携が目指すゴールのひとつは誰もが幸せになることだと思うんですよね。地域の人もそこに関わる学生の皆さんや先生なんかも…そういった意味でこれから関係人口とウェルビーイングという言葉を紐解いていきましょう。

まず自己紹介ですが、僕は元々アウトドア雑誌と釣り雑誌の編集者でした。日本の中山間地域の川を探しに行って、何て豊かなんだろうなって思って今に至っています。本業は狭義広義両方の編集者なんですが、まずは雑誌、それからオンラインメディアの編集長もやってまして、道の駅の特集を作ったり SDGs の特集を作ったり…関係人口は台湾の若い人たちからも注目頂いていて、日本の地方を編集する人ということで紹介してもらったりもしています。

広義の編集者としては「場所」を沢山作っています。今年の夏に群馬県庁の31階にあるGINGHAM（ギンガム）という場所をプロデュースさせて頂きました。オープンしてから5万人ぐらい来てくれてるんですが、マネージャーは地元の20代の女性の皆さんにお願いしています。それぞれ夢を持っていて、ゲストハウスを開きたいとかパートナーと一緒に農場を作りたいとか、そういうワクワクするプロジェクトを持ってる皆に任せています。こういった場所を「関係案内所」と呼んでるんですけど、関係人口は観光以上移住未満、第3のふるさとと呼ばれていますが、そういう人たちが現れる度に思うのが関係案内所の重要性です。洲本の「S BRICK」とかはまさにそうですね。

僕自身は関係人口の講座を多く受け持たせて頂いてます。一番古いものでは2012年から島根県の「しまコトアカデミー」の講師を務めています。もう10年経ちました。400人以上の関係人口の皆さんが現れて、島根におしゃれなナチュラルワインのお店を作ってくれたり、美味しいパン屋さんを開いてくれたり、お年寄りの皆さんの為の音楽療法の社団法人を作ってくれたりとか…地域に関わることから実際に仕事生まれているんですよね。こういったことも今日お話しできたらと思います。

社会の課題を僕は「お題」って呼んでいるんですが…座布団をもらえそうなので、課題をお題に変えるということをよくやっています。色んな地域の方々が相談を持ってきてくれます。これは去年から始めたんですが、福島の災害で被害を被った12市町村で関係人口を増やしていきたいということで依頼を受けています。講座を開くと地域に未来を作りたいっていう人が大勢来るんですね。復興ボラン

ティアの文脈とはまた違う人たちです。若い皆がドキドキすることをお伝えしながら、関係人口を増やすという取り組みのお手伝いをしています。

尊敬してやまない田中輝美さんと山崎亮さんと洲本でお話をされたことがあったと思うんですが、福島県の郡山市でワクワクする人材を増やしたいということで「こおりやま街の学校」という学校の校長をやっています。これは4年目なんですが、スペシャルゲストに来てもらって「まちのあれこれ談話室」というのをやったりしました。町が楽しければ地域に関わりたい人は外からやってきます。きっと洲本の域学連携はその種を沢山育ててきたんじゃないですかね。改めて10周年おめでとうございます。

引き続き関係人口の講座の話ですが、高知では「流域の編集学校」というのをやってます。あとはJALさんから沖縄の那覇便、スペシャルチャーターフライトのナビゲーターとして呼んで頂いて、40分ぐらいですかね、旅のその先を考えるとということで関係人口の話をしました。地域の人に会って、その地域に思いを寄せることで、ふるさと納税でも良いし、まちづくりに直接関わっても良いと思うんですけど、そういうことをやれるような気持ちを醸成してほしいということですね。もうひとつ、良品計画・無印良品の金井会長からお話があって…もう6年ですかね、「暮らしの編集学校」の編集長をやっています。良品計画の若い皆さんに、地域の要は企業型の関係人口になるということで講師をやってるんですが、その成果の一つとして無印の若い皆が新潟で中古のバスをリノベーションして行商バスを作ってくれました。こうした仕事もやっています。

最近多い仕事は地方創生の文脈で…一番多い依頼は何だと思いますか。勿論こういう講演も沢山頂いているんですけど、最も多いのはスナックのマスターをやってほしいというものです。いつでも呼んでください（笑）。町の中にあるものを素材として、町の皆が喜んでくれる場所を作って、若い世代と先輩との間に斜めの関係を作るっていうことをキュレーターとしてやっています。斜めの関係性ってとても大事で、区長さんや、それこそ大阪とか奈良から来た人たちがどう出会うかっていうと、スナックっていう場が非常に合うんですね。来週も神戸で酒場を開きます。株式会社グランドレベルの田中元子さんにもお願いして、私がマスター、それから奈良県の元公務員の福野博昭さんという大好きな2人とやるのでよければ是非来て下さい。

地域に関わりたい若い人を連れてくるっていう仕事を各地でしてますが、若い人が何でこんなにローカルに惹かれるのかっていうのを色々紐解いていきたいと思います。ひとつはサステナビリティですね。地域の中で人と人、自然と自然がいかに循環していくか、地域内の経済を回そうとし



指出一正 『ソトコト』編集長

ている人々がいるか、ワクワクするプロジェクトが世代を超えて紡がれていくか、そういったことがリアルに見える場所に、若い人は惹かれるんですね。山形県小国町では、高校生の皆さんと一緒に関係人口を育てていくようなことをやっています。

もうひとつ分かりやすい例を持ってきました。奈良県の下北山村からご依頼を頂いて6年続けていたむらコトアカデミーなんですが、10人くらいの日本橋に勤めているような若い女性に関係人口になってくれた例です。皆さんが何を求めて下北山村にやって来るのかと言うとですね、何かまだ形になってないもの、ワクワクしたものを探しに来ています。ここには池そのものがご神体の神社があります。それから鬼が今も住んでいるといわれる集落があります。ここにお住まいの鬼の子孫の方にお話を聞いていると家系図を持ってきてくれてですね、66代続く歴史を話してくれました。初代は鬼の夫婦で、その初代から66代まで続き人間に近づいていったそうです。こうしたことを東京生まれ東京育ちの20代の皆が見つけて…この「私が見つけた」という感覚を築いてもらうことがとても大事です。洲本市を自分で見つける、そんな思いを持って行くことで地域に対しての自分の愛情が変わってくるんですね。そして関係人口の皆が地域に現れて、どんなプロセスを踏襲していくかということを少しお話しさせて下さい。地域のことが自分ごとになった皆は、それこそ今回のワーキンググループの皆さんのように、地域の方とそこに来る若い人たちとの間で協働が始まると思います。この時に大事なのが若い人たちだけでなく地域の皆が面白がってくれることですね。下北山村の場合は若い人たちが2人3人、10人と、2日3日、1ヶ月と滞在することによって地域の雰囲気が変わってきました。元々皆優しくてとても素敵な地域で、僕も30年間通ってる場所なんですが、関係人口の皆が多くなってきて、若い人たちがもっと泊まる場所があった方が良くないかなということ、地元の人

3件のゲストハウスを作ってくれました。こういった動きを地域に現れる人と迎え入れられる人の「鏡効果」と呼んでいます。どちらかが幸せになるんじゃないですよね。お互いが寄り合いながら心も強く優しくしなやかになっていく効果、僕は地域にとって大事なんじゃないかなって思っています。関わる階段を上っていくかもしれない地域の関係人口と、それを迎え入れる皆がお互いに心の成長をしていく、もしくは心の成熟を迎える、そういったことが人が地域に訪れる一番大事な要点なんじゃないかなっていう風に思います。下北山村は今、若い人たちが自発的に任意団体を立ち上げています。学生だけで使える空間が作られたり、講座を通じて関係人口になった若い方が移住してビジネスを生み出して、新たなサービスを作り始めています。これを作ってくれたのは先程の講座を卒業した東京生まれ東京育ちの方ですね。

関係人口のおおよそのところをお話ししましたので、次は関係人口を包み込むキーワードを幾つか話していきます。まずは関係案内所ですね。先程もお話ししましたが、これは観光案内とはちょっと異なるものです。観光以上移住未満という人が現れた時に、地域の人に出会うのは難しいことです。案内所があると出会いやすいですね。横浜のある事例では、古民家を改造して大学生や大学院生のチームが地域に関われるところを…まちづくりを勉強していても自分の住んでいる場所の大人との接点がないことに気付いた学生が作りました。そのうちに地元の先輩たちがここで少し学生たちの話を聞いたり、自分の喋りたいことを喋れるような素敵な場所になりました。開かれた場所を作ることの大事さというのは、相手がほんとにできる場所ができることに通じます。寛容な社会の空間が関係案内所です。

神戸では、140年続いた学校が廃校になってしまったのですが、そこを去年の7月に村上工務店の村上豪英さんが「NATURE STUDIO (ネイチャースタジオ)」としてリノベーションしました。行かれた方もいるんじゃないですかね。これも立派な関係案内所です。中には就労支援施設や学童施設があり、おしゃれな水族館も入っています。庭の樹木は全て食べられるものです。人が訪れる場所をうまく利用して、そこに来る人にコミュニティや環境の大事さを伝えています。洲本も含め、兵庫県は街があって川があって山があって…サステナビリティが凝縮された格好良くておしゃれな場所だと思っています。単純にアーバンなものだけではなくて自然あつてのものであるということを若い世代に伝えていく為の「ソーシャルビオトープ」として村上さんは提案しています。

もうひとつ関係案内所の話をします。去年の4月にオープンした山形県山形市のシェルターインクルーシブプレイ

ス「コパル」(山形市南部児童遊戯施設)です。障害のある子どもさんも、わんぱく盛りの子どもの皆さんも、どちらも楽しく遊べる室内遊技場を作ろうということで…重度障害児のケアをやっているNPOの女性たちと、それぞれモンベルクラブみたいな日焼けした男の子や女の子がどんどん元気になっていくようなそんなNPOの女性が膝を突き合わせて、どちらかに振るとどちらかにとってつまらなくなるということで両方が楽しくなる平等な場所として作られました。車椅子に乗っている子をわんぱく盛りの皆が手伝って、自分で滑り台を滑った時の笑顔を見て、こんな良い笑顔を見たことはなかったとお母さんが泣いたそうです。なかなか子どもを連れて行くのが難しかった若いファミリー層が集まるという意味で画期的な場所です。遠くからやってくる関係人口も大事なのですが、洲本にも大勢の人がいます。立ち現れる人をどう作っていくか、関係案内所はその為の機能に満ち溢れた場所です。

次に地域内関係人口の話をしていきます。これは遠くから来る人というよりは、例えば近畿から洲本にやって来るような近い関係性のことを指します。埼玉県草加市にある「シェアアトリエつなぐば」という素敵な場所があるのですが、ここには草加市内外の人たちが集まるんですが、昼の日中、女性の方が多いですね。なぜ女性の方が多いかというところですが、実はここには草加市の「3ビズ」という政策があります。自分の好きなことや得意なことを活かして月3万円を稼ぐビジネスを推奨するというものですが、その為の講座がもう5期6期続いているんですね。卒業生の皆もここをアトリエにして使っています。曲げわっぱのプロジェクトを作った人、焼き菓子のお店で独立した人、託児所を自分で開業した人、続々と現れています。こうやって自分の夢を叶えられる場所もとても大事なんですが、そうしたことが地域の内外を通して起きる、これを地域内関係人口と言います。この草加市の話は、地域の外と中の人が繋がっていくことで、草加が盛り上がり、同時にそれに関与する関係人口の皆も仲良くなっていき、新しいプロジェクトが生まれるという非常に分かりやすい例だなと思っています。

関係人口の色々な話があったと思いますけれども、ここからは関係人口とウェルビーイングという関連性について着目してみました。地域に関係人口が増えるとウェルビーイング度が高まると僕は思っています。そしてそれを立証してくれたのが福井県立大学の高野翔先生です。もう長い付き合いで、僕の大好きな先生なんですが、高野さんは元々JICAに勤めていて、ブータンで幸せの研究をしていたんですね。関係人口、つまり地域に関わることでウェルビーイングが増えるのかっていう問いにイエスを頂きました。

それを2つで紹介しましょう。地域に関わることで何の幸せが高まるのかというと、まず自分の名前をフルネームで呼んでくれる、自分のやっていることを肯定してくれる、自分の役目を作ってくれるような場所が生まれることです。洲本の域学連携に関わることで学生の皆はきっと洲本の皆さんと自分とやれること、自分を肯定してくれる人の高揚感を感じているんじゃないかと思います。もうひとつ、関係人口が現れることでウェルビーイングが高まるのは大中小、短中長の移動があるからです。明石海峡大橋を渡って来るとか、もしかしたら四国から来てる方もいらっしゃるかもしれませんが、人間は暮らしの中で移動があることで幸せになることがあるそうです。これは訪れる側だけでなく迎え入れる側の鏡として、そうした人たちが現れることで同様の幸せ、ウェルビーイングを感じるというのが僕が教わったことでした。

そしてもうひとつお話をしておくと、ウェルビーイングというのは身体的、精神的、社会的に良い状態だと言われますが、もうちょっと日本語で優しく意識すると「ご機嫌な状態」です。皆がご機嫌な状態で暮らす地域づくりが良いんですよね。もう一度英語に戻すとハッピーかもしれないんですが、ウェルビーイングとハッピーという微妙にニュアンスが違います。ハッピーは短期的な幸せで、ウェルビーイングは中長期的な幸せを指します。速効型ではなくて遅効型、ゆっくりじっくり効いてくる。ああやっぱり自分の家が一番だというのはウェルビーイング、今日スーパーで50%割引の高級な肉を買えたのはハッピーですね。両方の幸せが求められているんですけども、中長期的な幸せが大事だという風に書かれています。

ウェルビーイングと関係人口をうまく掛け合わせた事例を紹介します。静岡の西伊豆に関わっている中川めぐみさんというチャーミングな方がいるのですが、彼女は西伊豆町の役場の方と一緒に釣りや地域活性化のプロジェクトを作りました。これは何かというと水産業、第一次産業としての漁業者がどんどん高齢化していて、西伊豆も漁業が盛んだったにも関わらず担い手が少なくなってきた。そんな中で水産業を保つ為にどうしたら良いかと考えた時にはと気付いたのが、ウェルビーイング度満点でやって来る遊漁者を仲間にしようということでした。遊漁者とは遊びで釣りに来る人たちですね。この人たちが釣った魚を西伊豆の中で循環させれば良いんじゃないかっていうことで「ツッテ西伊豆」というサービスが生まれました。これは遊漁船で釣った魚で一定の基準をクリアしたものを地域の市場で買い取ってもらえるというサービスです。買取は地域通貨で行われるので地域の外には出ません。地域内で宿泊したりお酒を飲んだり、友達にお土産を買ったりできます。よ

くできた仕組みですね。残念ながらあと5分ですので、また今度話しますね。

せっかくだから農業絡みの話もしようかな。しまコトアカデミーを受講した島根県出身の小田明さんという方が自分でビジネスを作りました。農林業の課題を解決しようと思って堂々巡りした彼が最後に辿り着いたのは好きなものを中心に置くことでした。それがワンちゃんたちです。ワンちゃんたちが自由に走り回れるフィールドを日本の森の中に作りたいということに賛同したトヨタが場所を貸してくれました。東京ドーム350個分です。都会から来たワンちゃんが自由に走り回ることができる。都会から来たワンちゃんが笑ってるんですよね。これもウェルビーイングです。これはクラウドファンディングで次のステージに挑戦してるところです。人の幸せを地域で作る、地域が幸せになる為に何かをやることも大事ですし、人が幸せになる要素が沢山ある場所だからこそ…洲本市だからこそ、その場所に人が現れてその人たちが幸せになるようなビジネスが生まれていってるのかなって勝手に想像していました。では最後にまとめます。私たちがローカルで幸せを見つけるサステナブルな視点です。今お話をさせて頂いた事例の中にキーワードが入っていました。きっと皆さんも心の中で感じてくれたのかなと思います。「関わりしろ」というのはザラっとした余白のことを言います。自分も何かできるかな、自分も何かやってみたい、地域おこし協力隊の制度を使って洲本市に行きたい、と思ってるということは洲本市に関わりしろがあるということなんですよ。それから「ご機嫌な状態」と「中長期的な幸せ」というのはまさにウェルビーイングという視点です、地域がご機嫌な状態であれば、中長期的な幸せを大事にして皆さんはゆっくりと心豊かに、幸せになっていく。洲本に関わる人たちが単発で終わらなかったということがこの10年を培ってきたんじゃないかなって思う風に思います。それから何よりも、洲本に来ることで皆が感じていることはこれなんじゃないかなと思うのが「ここにいる安心感」です。これは双方が作る空気です。迎え入れてくれる人もそうだし、やって来る人もそうですね。それぞれが自分が誰かに認めてもらっている、自分たちのことを好いてくれている、このまちのことを気に入ってくれている、自分がやってくれていることを概ね肯定してくれている…テニスのラリーじゃないけれども、肯定を打ち合っている感じが大事なかなって思います。

ここにいるということがどれくらい幸せかということは今日この後の皆さんのお話から紐解かれていくと思いますので、楽しみにしています。僕の話はこれで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

基調講演② “冒険人材”の 受け入れ方、 活かし方



石山恒貴 法政大学大学院政策創造研究科教授

石山 | 今日は域学連携の10周年という記念にお招き頂いてありがとうございます。後程にもちょっとお話するんですけど9月にゼミでS BRICKに来まして、その後洲本市内を楽しませて頂いたんですけど、またすぐ11月に来れて嬉しいなと思っています。私は政策創造研究科という法政大学の大学院にいまして、ちょっと珍しいんですけども学部のない独立大学院ってことでゼミ生は皆社会人で、20代から70代、皆さん働きながら大学に来ています。私は越境学習と冒険人材っていうところを研究してるんですけども、例えば外で学ぼうとする時に、全国のいわゆるサードプレイスと呼ばれる居心地が良い第三の場所が越境学習としてとっても良いよねということで全国を回っています。それですます越境学習っていうのが冒険に当てはまるなってことで、今回そういった話をさせて頂きたいと思います。よろしくお願いします。

最初に背景ということで…釈迦に説法というところなんですけれども、今までは都市に人が集中することが良いという、東京や大阪に集まれば効率化だねっていうことになっていた訳ですね。しかも日本って戦後はヨーロッパというよりアメリカを目指す社会になってしまったので、自動車が活躍するようになってしまったと。そうすると街の中を楽しく歩けないような社会になってしまったんですけども、これが人口減少の時代になると、先程ウェルビーイングという話もありましたけど、もう少し地域を緩やかに歩いたりして幸せに楽しもうっていう気持ちに変わってきているというのが大きな流れだと思うんですね。その中で特にコロナになって、あんまりこう集中しちゃうと本当に密でまずいよねっていうことも分かってきて、より分散が必要になってくると言われ始めたと思うんですけど、そういう中で、敷田麻実先生というずっと昔からヨソモノを研究している方がいらっしゃいまして、要はヨソモノって変な人なんですよ。例えばドン・キホーテとか、地域からすると珍しい変わった人だと思われるけど、何かちょっと

Speaker

石山恒貴

法政大学大学院政策創造研究科教授

よそ者効果

1. 「地域の再発見効果」→よそ者のまなざしによる地域資源の再発見や評価
2. 「誇りの涵養効果」→よそ者による評価や褒め
3. 「知識移転効果」
4. 「地域の変容を促進」→よそ者の異質性が「驚き」「気づき」をもたらす変容を促す
5. 「地域とのしがらみのない立場からの解決案」

出所) 数田麻実 (2009)、「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』Vol.9, pp.79-100.⁵

1

刺激になる人みたいな。

そんなヨソモノがいることで、色々な効果があると言われていています (Slide1)、地域の方がそれって当たり前だねって思うようなことが、ヨソモノからすると他にはないすごいことですよと、ああそうだったんだということで地域の資源を再発見されることとかですね。それが地域の誇りになったりとか、地域の新たな知識をもたらしたりとか、驚きや気付きをもたらしたりとか。後は地域ではあるあるなのかもしれないんですけど…ずっと同じ地域にいと、あの人は有力者だからということで付度が生まれがちなんですけど、ヨソモノってそれが分かんないんですよね。有力者の方に遠慮なく言ったりして、それが逆に良かったりするんですけど、そういった中で関係人口という…先程のお話の通り盛り上がってきているんですけども、人口減少でどの自治体も移住してほしいということになってる中で、日本全体で人口が減っていつてる中で結局奪い合いのようになってっちゃうんですが、関係人口だと奪い合いってことにならなくて、ふわっと関わる地域が2倍、3倍、4倍になってくるので良いと言われていています。

とはいえやっぱり地域で色々やってもですね、例えば数ヶ月いてまた帰っていくと、あの人ここには住まないんだね、住みもしない人にとにかく言われたくないよねっていうことが起こったりとか、緩く繋がるのが何の役に立つのだろうということが言われちゃったりとか、逆にヨソモノってスーパースターみたいに何でもやってくれるんじゃないか、みたいな捉えられ方がされちゃったりするんですけども、洲本みたいに10年も掛けて色々続けていらっしゃると、そういうことじゃなくてヨソモノを自然体で迎えることが持続性に繋がっていると分かってくるんじゃないかなという風に思います。

色々な地域にお邪魔してお話ししていると、だんだんこう大きな物語から小さな物語に変わってきてる時代なのかなという気がしています。昔だったら大きな物語…地域の為に何かあるんだったら自分を犠牲にして何とかする、尽くす

のが大事だよねっていうように言われてきましたが、今地域で活躍してる人たちとお話ししていると、どちらかというとまず自分が楽しいからやってるんですっていう人が多くて、しかもこう、半径5m以内で楽しくやってますっていう人が結果的に影響力を持って、地域に住むようにもなっていることがよく見受けられるので、やっぱり肩肘張らずに緩く自分が楽しむところから始めても良いんじゃないかなっていうところが、越境学習のこれからお話しするポイントでもあります。

そもそも越境学習って何なんですかというところなんですけど、簡単に言うといつもとは違うところに行ってみよう、そこから学ぼうっていうことになります。ただ企業の人材育成の場なんかでは、学習って名前が付くと硬いから嫌だよねっていう人が多くてですね、越境学習は良いかもしれないけど、何かそれってものすごく一部の意識高い系の人のお話ですよ、みたいなことを結構よく言われます。

私は一部の意識高い系の話じゃなくて皆が越境学習なんですって言うんですけども、なぜ皆かって言うと、どんな優秀な人でも同じ部署に長くいると固定観念に囚われてしまうということがあって、でも実は固定観念って誰でも取り払うことができるんですね。結構もやもやと葛藤するんですけど、それを乗り越えると目から鱗で、すっきりして楽しいということを誰でも味わえるから越境学習が良いんですよ、楽しんでですよという話をしています。

そういうことで「越境学習入門」っていう本を出させて頂いたんですが、その時出版社の方にですね、越境学習って普段行かないところに行く冒険みたいなものだから、ONE PIECEとかドラクエみたいな…洲本はまさにドラクエの地みたいなところだと思うんですけど、そんな世界観でお願いしますみたいな話をしたんですね。それで編集者の方が分かりましたって言って最初に作ってきた資料が、羅針盤がバンとあるだけの絵だったんですね。羅針盤で冒険だし学習だからシャープな感じが出て良いですよと仰るんですけども、ちょっと私が思う感じではないので、もうちょっと世界観を出せないですかって言ったら、次に出てきた絵は船に7、8人乗ってて、皆楽しそうにパソコンやスマホで笑い合ってるような絵でした。楽しそうだから良いですよって。それでまた私が、前よりは良いんですけど、何て言うか、ちょっと違うんですよと。ONE PIECEだと最初ルフィは小舟で海に出るじゃないですか。ドラクエもいきなりパーティーを作って皆で冒険するって言うんじゃないくて、ルイーダの酒場で初めて仲間を作るんですよ。そういう話をしたら編集者の方が、あなたの世界観が分かんないから絵を描いて下さいってことで、私は美術で1しか取ったことがなくて、絵心がないので断ろうとお

もったんですけど、それしちゃうともうただのクレマーになってしまうということで、こんな絵を描きました(笑)。皆さっぱり分からないと思うんですけども、私的には小舟の上で地図を持ったり望遠鏡を持ったりみたいな絵です。そうしたら何と…やっぱりイラストレーターの方ってすごいと思ったんですけど、最終的に本の表紙になる、越境学習の世界観にぴったりの素晴らしい絵にして頂きました。

改めて越境学習って何ぞやっていう話なんですけど、きっかけは実は経済産業省なんですね。経産省の問題意識として、日本はいわゆる大企業が人材を抱え込んで全然外に出していかないんで、開業率も低いしイノベーションも起きないみたいなのがあって、結構越境学習推しなんですね。ところが実際に越境学習事業者みたいな組織が何社かいらっしゃって、例えばクロスフィールズっていうNPOは大企業の人を半年ぐらいインドネシアとかフィリピンみたいな新興国に送る、留学ならぬ留職みたいなことをやっていたり、ローンディールっていう会社は大企業の人を半年とか1年ぐらいベンチャー企業にレンタル移籍してもらうみたいなことをやっています。ただ経産省さんが懸念したのが、こうした事業者さんはこうした事業の効果をそれぞれ独自にまとめられているんですが、それだと越境学習の全体像が見え辛いと、ひとまとめにしたいという話があって、それで私がお話を受けまして、越境学習を経験した40名の方にインタビューをして、編集をして、先程の本を作ったということになります。越境学習を私の定義で言うと、自分が心の中でホームだと思う場所と、アウェイだと思う場所と、そこの境界を行ったり来たりすることで学びになるということになります。心の中のホームってどういう場所かというと、よく知った人がいて、言葉も通じて、安心できるけど刺激がない場所なんですよ。アウェイとは見知らぬ人がいて、居心地が悪くて、言葉も通じないけど刺激がある場所です。そこを一方通行じゃなくて行ったり来たりするのが良いんじゃないかっていうのが越境学習というものです。

具体的には個人主導のものと企業主導のものがあるんですが、企業主導っていうのはさっきのクロスフィールズさんとかローンディールさんみたいに越境学習事業者みたいなところが企業の人事部と組んで人材育成をするっていうことですね。このパターンは結構あるんですけども、個人主導となると企業とか組織とかは関係なく、自分で副業したりボランティアしたりするっていうのが学びになっていくということになりますが、マンションの自治会とかPTAも越境学習になってるってお話がありまして。例えばPTAに入って文化祭で子どもたちに焼き鳥を焼いてあげた

越境学習とはなにか

- ◆ 冒険(わくわく、どきどき)のメカニズム
- ◆ 企業主導(留職、レンタル移籍、ワーケーション、プロボノなど)と個人主導(副業、ボランティア、育児休職、マンションの理事会、ワーケーション、プロボノなど)
- ◆ 上下関係のなさ×異質性(葛藤)×抽象度(もやもや)→行為主体性、固定観念の打破
- ◆ 経験学習=専門の熟達、縦の糸
- ◆ 越境学習=熟達の意図的な停止、現状の前提と固定観念の打破、横の糸

14

2

りして、そうした時にいつも会わない業界の人とか商店街の人とかと話してみたらものすごく刺激を受けました、みたいな話です。育児休職も越境学習ですねって言われたことがあったんですけども、家事とか育児とか、時々会社への連絡とか、幾つものことをやるっていうのがすごい学びになるということで。そういう意味のアウェイって上下関係がないので、一人ひとりがリーダーシップを発揮しないといけないし、モヤモヤするんですけどそれが結構学びになると(Slide2)。

プロボノっていうビジネススキルを活かしたボランティアがあるんですけど、例えば普通のビジネスパーソンがNPOで3ヶ月ぐらいプロジェクトをやるっていうのが典型的なものです。会社の中だと、プロジェクトやって下さいと言われて、分かりましたって始めても、限度があってもあまり自由にできないというのがあるんですけど、プロボノだと何やって良いのか分からないからこれから一緒に何やるか3ヶ月で考えてくれませんか、みたいなところから始まるのですごく学びになるんですね。すごくモヤモヤして葛藤して、自分の資源を動員しまくって行動していくと自分の弱みや強みを俯瞰できるようになります。それでまた行動して格闘する、みたいなことが回っていくのが越境学習なんです。今の会社って分析して企画して導入して実行するのが大事って言われてきて、それも大事なんですけれど、これからの会社は違うことと違うことを関連させたり、現状に異議を唱えたり、新しいことを観察したり、色々な人と幅広くつながったり、色々新しいアイデアを実験して失敗することが大事だと言われていて、ただこれはちょっとホームではやりにくいよねっていう話で、アウェイで実践する越境学習っていうのが関心を持って頂いているという状況です。

越境学習には様々なあるんですけども、実は地域の越境学習も山程ありまして、例えば企業の方が色々な地域に行くと企業の課題とは全く違う形の社会課題が見えてきて、そこですごく学びがある一方で、地域としてみるとヨソモノ

として受け入れるということで、必ずしも上手くいった訳じゃないんですけど…現実離れたことを提案されて終わったみたいな話もないんですけども、こうした動きも広がっているという訳ですね。例えば静岡県の富士市では、子どもの育成をしたり富士山のゴミを拾ったりとかする色んなサードプレイス団体があって、そういう団体は孤立していると常連だけ来ていて活動が伴わなくなっちゃうみたいな問題がある訳なんですけれども、同じような悩みを共有して次にどうして行こうかみたいなことを話し合っていると、結論としては皆楽しんでやってるんだけど、その楽しさやハードルの低さが伝わらないんで、そこをどう発信していこうかっていうところが広がっていったりですか、或いは洲本市さんの域学連携だと学生さんが中心になってだと思えます。中高一貫校の教員の方がキャリアチェンジして弘前に移住した事例があります。その方がまちの学校をやろうみたいな話がありまして、ドラクエで仲間と出会うルイーダの酒場のようなものを作りたいと。この人の一番の武器は幾らでも飲めるってところなんで、とにかく飲みまくったと…僕もちょっと弘前に行って24時に帰ろうとするとこれから本番ですよって帰してくれないような方で（笑）、まあ肝臓を傷めながら…本人はただ飲むのが好きっていうのはあるかもしれないんですけど、それでまちの中高大生が集まるコラーニングスペースというのを作って、でも中高大生だけで学ぶ訳じゃなくて、皆がお酒やおつまみを一品ずつ持ち寄ってきて地域の有力者のような高齢の方もフラットに集まれるようなことを実現しているという取り組みもあります。これらは地域の為に、ではなく何か新しいことをやるっていう事でスタートしたものです。

ヨソモノの受け入れについてに着目すると、静岡県の三島市という、首都圏から近くて新幹線ですぐ行ける地域では、町の中にテレワークとかができるサードプレイスが沢山あるんですけれども、例えば地元の建設会社が作っているスタジオとか市役所とかコワーキングスペースのようなところとか、そういったサードプレイスの方が三島で全部繋がってるんで、どこかのサードプレイスにヨソモノの人が来ると、じゃあここに行きましょうって言って一通りを紹介してもらって、あっという間に三島のサードプレイスの関係者とつながれるってということで、ウェルカムコミュニティみたいなのが見える化されちゃってるような現象も起きています。続いて有名な話だと思うんですけど、熱海の奇跡っていうのがあって、バブル崩壊後に熱海は一度潰れちゃったんですけど、Uターンした若者たちが熱海銀座っていう非常に狭いエリアリノベーションをうまくやって、そこにこう色んな人が来て…今の熱海銀座は竹下通りぐら

いめちゃくちゃ混み合ってるんですけども、今ここに色んな企業に来てもらって、山程ある地域課題を越境学習で解決してもらおうということをやっています。これを実現した人は東京でコンサルティング会社みたいなことをしていたUターンの方なんですよね。Uターンした人と地域の人と、越境学習のヨソモノが上手く馴染んでいる例です。それでこの9月にですね、洲本市の高橋さんとシマトワークスの富田さんをお願いしまして、S BRICK うちのゼミ生とワールドカフェをしたんですけども、色んな方たちが集まって忌憚なく喋れる場所で色々喋ってみると、色んな人が混ざり合って意見を出すと結構良いよねっていうことも…これもある意味では一種の域学連携なのかなって思うんですけども、この域学連携をクエストカレッジ化されるということなんですけれども、それってというのはやっぱり学生の方が主体的に皆さんと取り組んでおやりになってること、自分が楽しいからやるってということで、それは学生の小さな物語の冒険なのかなと。それをもう既に10年間かけて蓄積されている。今度は企業の方も、あらゆる層が集まって冒険するということになってくると、これはもう非常に面白いことが起こるんじゃないかなということでも勝手に楽しんでいます。

そして今この越境学習に対して、被越境学習ってところに注目が起こってまして、冒険に行く人だけではなく冒険を受け入れる側も実は学びなんじゃないかっていうことが今言われてきていて、我々の研究室もそれを研究しているんです。そうなりますと、例えばクエストカレッジで全国から色んな企業や学生の方を受け入れる洲本市さん側の学びっていうのにひとつ焦点を取っても良いんじゃないかなという風に思うんですけども、それって結局ですね、受け入れた自分が変わるってということなんです。典型例としてひとつあるのが岐阜県のNPOがあるんですけど、岐阜県の中小企業に例えば名古屋の大企業の人を受け入れて越境学習プロジェクトをやっています。ある中小企業の社長は、うちの社員って全然意見を言わないし、新規事業の資料も自分で作るしかないって思ってたんですけど、ある企業から越境学習を受け入れて社員のプロジェクトとしてやってもらったら、いつも意見を言わない社員がめっちゃくちゃ大企業の人を相手に臆さずガンガン意見を言っていたそうで、それを見た社長は、社員が意見を言わなかったんじゃないかって自分が意見を言わせてなかったんだってことに気付いたんですね。その後は社長と社員の関係性が変わって、社員の方も自発的に取り組むようになって新規事業ができたみたいな話があるんですね。そうするとやっぱり、冒険人材を活かすっていうのは双方がお互いに学べたと思って取り組んでいくと起こります。

越境学習＝冒険人材をいかす

- ◆ 越境学習で固定観念の打破＝個人の価値観を振り返り、それを「小さな物語」として地域活性化にいかす
- ◆ 柔軟な発想で、様々な関係人口（よそ者）と地域側の冒険人材を組み合わせる
- ◆ ゆるいコミュニティだから、多様な人が参画できる
- ◆ 「よそ者」として地域側の視点だけでみるのではなく、越境者と地域の冒険人材がともに学ぶ、越境学習の視点

26

3

小さな物語で自分が楽しいからやる、でもそこはゆるいコミュニティだから色々な人が組み合わせあって新しいことが生まれる、そこで共に学んでいく、ということが上手くできると非常に良いことが起こるんじゃないかなと思いました（Slide3）。クエストカレッジさんの今後の発展をお祈りしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。



パネルディスカッション第一部

域学連携 10 年間の批評と、今後 10 年を見据えた提言

Panelist

白石克孝

龍谷大学政策学部教授

野田満

さんそデザイン共同代表／近畿大学総合社会学部講師

小林力

洲本市地域おこし協力隊

Commentator

指出一正 前掲

石山恒貴 前掲

Coordinator

中川悠 前掲

Introduction

中川 | これからのお時間は二部構成のパネルディスカッションになります。第一部は域学連携 10 年間の中で大学が地域とどう関わってきたか…実際に見てこられたお三方に、ワーキンググループを通して分析頂くというところから入って参ります。10 年を振り返って、褒めるだけでなく反省点も踏まえて進めていこうというところです。まずは 3 つのワーキンググループでどんなことがあったのか、最初に 10 分ずつでお話頂きます。10 年間でこういうことがあった、こういう風に分析をした、こういう改善が必要だということを聞いて頂ければと思います。それでは白石先生、野田先生、小林さんの順番をお願いします。

WG1 Presentation

龍谷大学の域学連携 10 年をふりかえって

白石 | 龍谷大学の域学連携を振り返ってということで、学内でワーキンググループを進めてきました。龍谷大学が一番多くの学生を大学の仕組みとして送り出してきたので、大学という教育機関の側に立って果たしてどんな意味があったのかということを総括しています。私どもの大学ではゼミの先生が研究テーマとして地域に入るのではなく、教員が交代する探究演習という演習科目として実施しています。まず、なぜ域学連携という言葉が生まれたのかというと、元々は総務省の使っていた単語でした。総務省が域学連携事業で何年か続けたうちにですね、最後の 1 年で大型の補正予算が組まれるにあたって、大学の教育にも跳ね返るような内容で応募したらどうかということで、私と洲本市の間でお話をしたというのがきっかけです。当時は対馬市や京丹後市等、複数の自治体が採択されたのですが、そのうちの 1 つとして洲本市が今も頑張っているということをご理解下さい。

私どもの学部は 2011 年に設立した時から…いわゆる 3.11



白石克孝 龍谷大学政策学部教授

の年でしたが、尚更強い思いで、課題に立ち向かったり課題を考えたりするような能動的な学習を学部生、院生問わず展開したいと考えていたんですね。ゼミとして先生の専門で取り組むやり方ではなくて、担当者も交代する科目として提供するという考えを進めてきました。なぜ洲本市と一緒にやることになったのかというと、龍谷大学が政府の科学技術系の予算で、再生可能エネルギーの人材育成とその実装化みたいなプロジェクトとして、再エネの育成塾をやっていた時に、高橋さんがたまたま受講に来られました。それが数回した後で、どこかで実験できる場所がありますかという時に、洲本でやってみたいという風に高橋さんが発言された、それが1つのきっかけでありました。つまり域学連携以前に再エネの社会実験を洲本で進めていくという試みが先行して始まっていました。そこに域学連携の事業に取り組んでみないかということでスタートした訳です。科目としての関わり方や、プロジェクトの事例はフロアに掲示していますのでロビーでご覧になって下さい。私たちは大学としての関与という形で域学連携をやっていきたくて思いました。自発的なゼミ教育の延長ではなく、大学教育の展開としてやっていきたくったところがある大きな特色だったと思います。

当初の予定通り、担当者は私から始まり順々に変わっていきましたが、域学連携に関わり、洲本という自治体と連携するにあたって一番重要だったのは、やはりそこに先端的な取り組みを作ることでした（Slide4）。小さな発見や六次産業、移住定住の促進ということではなく、もっとインパクトのある大きいことをやりたくて思っていました。そうしたイノベーションを残す為には色んなバリアやハードルがあつて、それをクリアしないとイケなかったんですね。例えば私はため池ソーラー発電を作りましたが、その前に再エネ促進を進めていく条例を洲本市に設定して頂いたり、我々は発電事業を非営利株式会社としてやりましたが、非営利株式会社は近畿では初めてで、儲けない会社って何なんだということで、対外的な説明や資金調達も大変でした。売電収入で域学連携を支援したり、卒業生も継続して活動ができたり、中には移住してくる子も出てく

るというような一連の仕組みにする為には、それぞれやっぱり乗り越えなきゃいけない壁があつて、従来の枠に囚われていては実現できなかったものがあります。そういう意味では我々も冒険に乗り出して、何を作るのかっていうことに対して明確な政策提言や実証をしてきたというのが大きな特徴だったと思います。

その中で大学にとって大事だったのは洲本市の変化が大きかったということですね。他の自治体とも色々組んでいて、大学からは何でそんな遠い洲本市に行くんだと、京都の中にもやってほしいと自治体もあるんだぞ、という声もありました。でもあえて洲本に来たということは洲本市の変化、先端の自治体であろうっていう可能性、そこが非常に面白かった。特に高橋さんが市役所内にいて、市役所と綿密に進めていけたということが大きいです。地域おこし協力隊の方針も私たちが見聞きしている自治体と比べて大変明確で、OBOGの方が推進する取り組みも今日展示されておられますが、洲本の色々な変化に対して、我々ももっと続けてやろう、発電所を作って終わりじゃなくて色々やろうっていう思いになったところでもあります。

しかし課題も当然あります。大学として一番難しいのは、誰も先生のニーズを聞いてくれないんですね。地元や学生のニーズや、域学連携の良かったことなんかは色々言われますが、先生はどうだったのと。先生は研究する為に大学教員になる方が殆どで、地域連携とか教育っていうのは先生の目的じゃないんですね。我々は新しいことを展開したいという思いを持って学部を作りましたが、若手教員からしたら研究歴を積みたくんですね。こういうことをやると負担になって、忌避感が生まれて…教員にも意義が必要です。これは大事なポイントです（Slide5）。

その為にどうすればいいかということを考えると、ひとつとしては洲本の域学連携が先端事例であり続けることが必要だということです。そうであれば、我々は洲本を対象として論文を考えてみようということにもなりますし、そこから新しいアイデアを社会実験的に実装する場所として使わせてもらうとか、そういう動きが生まれます。また学内から支援を得る為には、洲本で何かをやるという必然性を説明する必要があります。そうでないと各地を順番で回していこうという話にしかありません。そういう意味で、私たちは世間から注目される評価を得たいと思うようになりました。それがひいては域学連携の関係者のモチベーションの維持に繋がり、洲本市の持続的な発展に繋がると考えています。

我々は今後、洲本の緩やかなネットワークをしっかりと考慮して…サードプレイスでの意見交換の話もありましたが、そういうようなことを10周年をきっかけに今後やってい

○自治体・域学連携の先端取り組みにするために

- イノベーションのために、法制度や社会の「バリア」「ハードル」をクリア
 - 再エネ促進の条例の制定
 - 再エネ事業実現にむけた協定締結（市役所、大学、地元信金信組）
 - 非営利株式会社による発電事業 — 大学や洲本の関係者を発電事業に巻き込む
 - 地域経済の循環を目指して — 信金信組から資金調達
 - 地域経済の循環を目指して — 売電収益の寄附による域学連携支援
 - 卒業生の活動継続と移住の支援 — 交流と定住

○今後の課題

【1】そもそも政策実践・探究演習をどう総括するか

教員は研究をするために大学教員になる 地域連携や教育が主目的ではない

とりわけ若手教員は研究歴を積みたい → 政策実践・探究演習への負担感や

忌避感

地元、学生だけでなく、教員にも意義が必要

5

かないと、皆の思いがずれ始めているということもあるので、是非改めて調整していきたいと思っています。堅苦しい話で申し訳ないですが、以上で私からの話は終わらせて頂きます。

WG2 Presentation

雑多で多様なものの統合と拡散

野田 | 近畿大学の野田です。我々のワーキンググループでは「様々な連携大学、連携企業の多様な活動に関する検討」ということで、端的に言えば外から洲本に関わる色んなヨソモノたちの話です。結論として2つ提言があるんですが、いきなりそこに触れるのも何やら難しそうなので、これまでの議論の経緯を踏まえてご説明させていただきます。我々はワーキングの議論そのものを広く公開していこうということで、オンライン座談会という風に、半ばイベント化した中でディスカッションを進めるという方法を取りました。一般聴講者も募って第1夜から第3夜で開催して、わりに色んな方が参加してくれて、色んな議論をしました。その中で頂いた発言やコメントを4つのカテゴリに分類した上で、16の論点として整理をしています（Slide6）。これら以外にも様々なトピックはあったのですが、今回はこの辺りをかいつまんで引き続きお話ししていきます。

まずは域学連携の持続性についてですが、これは非常に多くの方から挙がったお話です。持続性を担保しようとする、どうしても仕組み化していこうとか、マネタイズしていこうみたいな話になるんですが、一方でこの10年は物

事の余白や偶然性、非計画的なことから生まれた出来事によって「成果とは呼べない成果」が蓄積されてきた結果だということは忘れずにいたい、ということがあります。もうひとつは、そもそも持続って何だということをちゃんと考えなきゃいけないということです。例えば活動がそのまま何年も続くことを持続とみなすのか、或いは別の何か…ノウハウが残ったり人間が残ったり、それらの見えない繋がりによって活動ではない別の何かが持続しているような状態とか、持続の定義を考えなくちゃいけないですね。その持続のかたちのひとつとして、既に色々動いてるものもありますが、学生 OBOG 等の関係人口を縦横斜めに繋ぐシステムは引き続き重要になってきます。

次に地域に目を向けると、まず地域づくりの大黒柱が必要で…これにはビジョンだったりキーパーソンであったり色んなニュアンスがあるんですが、学生は新陳代謝していく存在で、担い手が流動的である中で長期的に物事を考える議論が必要になってくるということです。続いて地域側の重要な人材についてですが、地域内外のハブ的役割であったり、学生の提案への前向きなリアクションであったり、そうしたヨソモノを受け入れるキャパシティが挙げられました。域学連携は人が大事だとよく言われていて、それは全くその通りなんですが、ただ具体的にどの場面でどんな人が重要なのか掘り下げる考え方はこれからも必要になってくると思われます。また学生の宿泊場所に代表される、いわゆる域学インフラはこの10年で随分拡充が進みましたが、市内の移動については未だ課題も多いという話も挙げられています。今日の基調講演では関係人口の話もあり

冒険（クエスト）し続ける地域と人のつくり方



野田 満さんデザイン共同代表／近畿大学総合社会学部講師

が報われないと次の10年は保たないだろうなと思います。改めて提案について触れていきたいと思いますが、まあ一言で言うとやっぱり具体的な目標ですね。それに色んな人が色んなことを頑張っているという姿を目指さなければいけない、自覚的にならないといけないということです。例えば毎週の「サザエさん」みたいに、毎回ユニークで面白いプロジェクトが生まれるけど、何週経っても物語の舞台や世界線そのものに何も進展がない、みたいなことになりがちです。一方で「名探偵コナン」みたいに…こちらも毎週事件が起こっても物語の時空はさして変わってはいないのですが、黒の組織の正体は少しずつ明らかになっていくみたいな、ちょっとずつ地域の物語を進めないといけないですね。ただ洲本市が全くサザエさん時空かという決してそうでもないと思っていて、冒頭でも触れた通り何かしら見えない世界は積み上がっているはずで、ただそれが、一般的には成果とは呼べないからといって見落とされていたりして…「これって実は成果だったのかもしれない」というようなことは、我々もそうですが地域の方も一緒に考えないといけないですね。探せば沢山あるのではと思います。

最後にですね、まあしきりに仕組み化、仕組み化と呼ばれていて、それはそうなんですが、やっぱり先程の余白や偶然性をどう設計していくのかというところが大事なと思います（Slide7）。仕組み化は嬉しいものもそうでないものも含めた誤算の排除を意味します。もっと言えば、身も蓋もない話になってしましますが、どうせ仕組み化しても意図せぬ出来事は起こります。であればそういったことが起きる前提で、よく分からないことが起こったとか、ポジティブな誤算もネガティブな誤算もアーカイブして次の段階に反映させていく態度が本当の意味での仕組み化かなと思います。作ってみた仕組みに対して、これで完璧だと思って思考停止するようなことは避けたいですね。

これだけ偉そうに言うておいて何ですが、僕自身もこの

提言2：雑多で多様なものを雑多で多様な価値のまま認める
余白や偶然性を計画的に残したシステム化の検討

クエストカレッジにできること／できないこと # 20%ルール # 5年に一度は域学シンボを
二項対立のせめぎ合いを続けていくことが域学連携（理想と現実、理論と実践、実学と虚学、道徳と経済、課題解決と自己実現、etc）

・ふとした交流や懇親の機会 ・学生や企業の洲本への思い ・後に武勇伝となるアクシデント ・関係人口のきっかけとなる思い出 ・その他、定性的な事象等 これまでの10年間で非計画的に起こったこと 偶然寄りの出来事と広義の成果	・何らかのプロジェクトの成就 ・経済効果や売上、事業利益 ・参加者数、移住者数 ・メディア掲載数、いいね数 ・その他、定量的な目標達成等 これまでの10年間で計画的に進めてきたこと 必然寄りの出来事と狭義の成果
---	--

今後より意図的に設計していく より高い確度で目指していく

→しかしそれでも意図せぬ出来事は起こる→また次の10年で計画していく→…

一方でこれまでの域学連携はある種の行き当たりばったり感の中で多くのドラマが生まれ、定性的かつ非計画的な「成果と呼べない成果」の蓄積によって地域を元気づけてきた10年だった。今後クエストカレッジ他へのシフトによる一定のシステム化は必然的であり、また必要ではあるが、どうせ幾らでも意図せぬ出来事は起こるという認識に立ち、ポジティブな誤算は都度アーカイブして、次の計画に反映させていくような冗長性への意識を常に忘れずにいたい。

7

10年でまだまだ成し遂げられていないものは多いなという反省と自戒を込めて、バトンを次に渡したいと思います。以上になります。ありがとうございました。

WG3 Presentation

域学連携事業は地域に何をもたらしたか

小林 | よろしくお願ひ致します。洲本市地域おこし協力隊の小林力と申します。私からは域学連携の大事な主体である地域の話をさせていただきます。こちらではワーキングを3日間開催し、1日目と3日目はオンラインで開催、2日目は地域の方や域学に関わって頂いた関係者の皆様にお集まり頂き、オフラインでディスカッションを進めました。検討内容は2点ありまして、1点目は「域学連携によって得られた地域づくりの成果や問題・反省点は何か」、2点目は「今後の提言」として、域学連携事業で円滑な活動を支える為に必要な地域側の受け入れ要件は何かを検討しました。実際の内容につきましては、ロビーの掲示にて詳しくご覧頂ければと思います。

ここからは域学連携事業の地域側の批評に入っていきます。まずポジティブな内容として、学生らと共感する機会が増えるとモチベーションが上がること、学生との関わりを持って地域の人は満足されているというような評価がなされています。特に地域団体や町内会の方からの意見としては、「活動に新しい主体が加わること」「地域住民に元気が出てくる」「地域づくりの動機付けに大きく寄与している」ということが大きな意見としてございました。

域学連携事業でこういったことが地域にもたらされたのかを絵で例えてみました。ある山の山頂が地域のありたい姿だとすると、域学連携事業はそこに向かうひとつの手段。ここでは道を走る車です。これに対して車の燃料にあたるのが、この後に説明する情緒的価値です。学生からの刺激を受けたり、地域への誇りが持てたり、そうした姿勢が地

域にもたらされるような価値です。一方、地域に残る目に見える成果とは何だったのか。それは振り返った時に「あそこを越えてきたよね」というような景色みたいなものであり、こちらを機能的価値と説明致します。例えば、PR活動によって地域が認知されたとか、商品開発ができたとか、地域の方は振り返ってみた景色に対して高い評価をされていました（Slide8）。

域学連携の評価は非常に難しい。とはいえ、批評にあたりこの「情緒的価値」と「機能的価値」というものを通してご紹介させて頂ければと思います。具体的に洲本の活動で言いますと、学生さんが主体になった「ロングトレイルのコースの整備」活動においては、今もなお学生が地域の方と一緒に取り組みを進めています。機能的価値の部分としては、ソーラー発電所や農産物の販売実績を大きく評価していっていることが、2日目の事前ワーキングから見えてきました。

また、2つの価値基準に対して時間軸と掛け合わせると、さらに見えてくるものがあります。域学連携事業における4つのタイプですね。多くのプロジェクトがありましたが、短期的かつ機能的な価値を求めようとする、学生さんが技術的支援を受けて活動し、活動そのものに成果を求めるセミプロ型という位置付けが1つ目です。2つ目であり一番多いタイプとしては、短期的かつ情緒的な価値を評価して、学生との交流を受けて地域が元気になるような青春型。継続的な時間の経過も見えていきましょう。域学連携事業を10年続けると、青春型が地域の中で自走した結果、地域の方でどんどん新しい事業を始めていったり、これに大学が並走していくケースがあります。これが3つ目の地域内発展型。そして最後の1つは域学連携事業そのものに機能的な成果を求めていく事業発展型。これらの見方も現実としてありました。

ここからはややネガティブな批評に入っていきます。地域の方が抱えている問題意識について申し上げますと、まず学生が入れ替わる構造に対して「活動を支える継続的な仕組み」が不足しているという点が挙げられます。学生さんが入れ替わる時に地域に負担が掛かったり、地域の理解不

足がある状態で新しい学生が来られたら困るという意見がありました。また学生によってやる気にムラがある等活動のモチベーションに影響する悩みの種があることが見受けられました。あとは地域側の入れ替わりの問題ですね。学生の受け入れ活動を引き継ぐ担い手が不在になりつつあるのが、深刻な問題としてあります。域学連携で培ってきたノウハウが地域内で引き継がれていないという点も意見として挙がりました。様々な角度からネガティブな批評がありましたが、こうした検討結果の裏返しとして「仕組みが不在である中である程度の継続性を保ってきた」10年間は前向きに評価しても良いのではないかという声も挙がっています。それは地域の先駆者の存在や寛容な住民の方々、臨機応変な対応や雰囲気成しえるものであり、洲本市の強みでもあると言える部分ではあります。

見えてきたネガティブな評価を深掘りしましょう。先程の域学連携の活動を4つの区分に分けましたが、問題がどこで多く発生しているのかを意見集約するとある傾向が見えてきました。問題は地域内で事業が自走している部分についてはあまり見られず、域学連携事業そのもので何か機能的な成果を求めようとする際に、「活動の連続性」が担保できないところでの指摘が起点になっている問題であり、事業発展型の区分において問題が起きているのではないかと見えてきました。

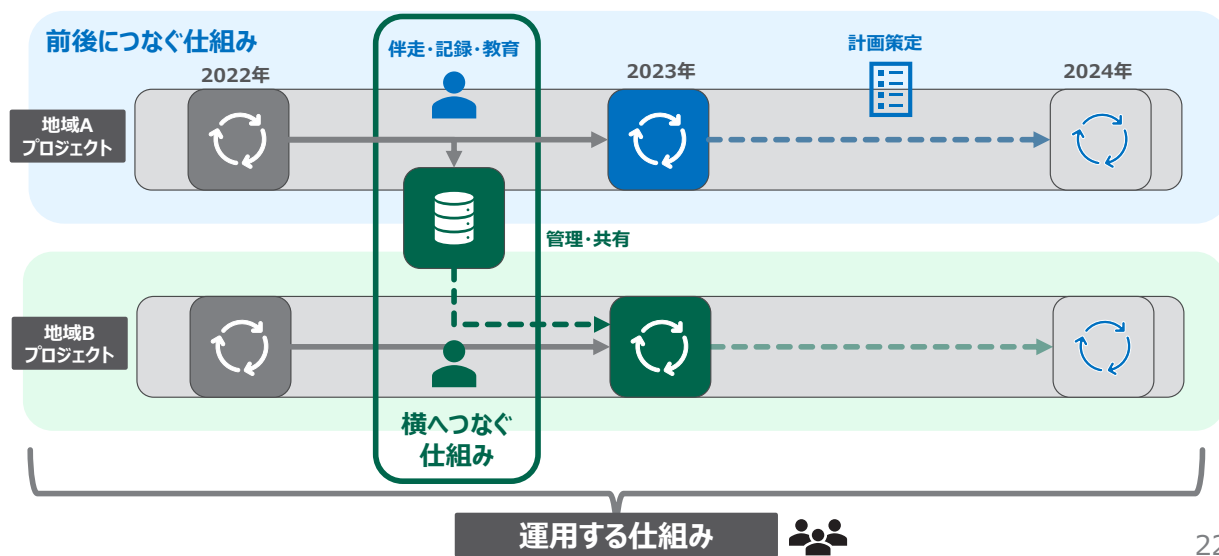
続いて、地域としてどういう点に注意して学生さんを受け入れていけば良いのか、その要件について見ていきます。最も重要なフェーズはどこなのかというと、やはり導入期の部分に最も票が多く集まっています。域学連携事業のゴール設定を学生さんと共有しておくことが大事であるということがポイントでございました。具体的には、地域に求められていることと学生さんのスタンス、活動の頻度や濃度の擦り合わせができていないままスタートしてしまうと、期待に対するギャップや疲れを発生させてしまいます。これを防ぐ為にも、導入前から自治体のサポートも受



小林力 洲本市地域おこし協力隊

4. 今後の域学連携事業への提言

ワーキングの中で浮き彫りになった課題や、域学連携事業で地域に求められる要件・整えるべき工夫の検討結果を基に、今後の事業推進への地域視点の提言を下記のイメージで示します。



22

9

しつつ、共にゴール設定をしていく必要があります。

また、こうした学生受け入れのノウハウをシェアする仕組みがないことも課題になっています。そして、地域の課題やゴールを学生さんとシェアすることは重要ですが、この「課題の捉え方」においても、アプローチの仕方で留意したいことがありました。それは、目の前の場当たり的な課題や、それを何とかしてほしい気持ちではなく、地域が向かっていきたい理想の姿に対して、もっと未来はこうしたら良いよねという「ワクワク」するような思考です。こうした課題で、大学生の皆さんと一緒にトライできると、もっと良いアプローチになるだろうと検討結果から見えてきました。

まとめとして、今後の域学連携事業への提言です。総論としては、域学連携事業を動かす仕組みをブラッシュアップしようという意見が多く出てきました。やはり機能的な価値を求めていくにあたっては活動の連続性が必要になります。各プロジェクトの単年度で学生が入れ替わっても、活動記録や伴走者が残るような仕組みが必要だろうと思います。もうひとつは地域間の横をつなぐ仕組み。域学連携事業は10年続いていますが、地域によっては最近始まったばかりで日の浅いところもあります。活動歴が浅い地域の方に、地域間でノウハウを横断的にシェアできるような仕組みが望まれていました。また、それらを全体で運営する仕組みも求められているところであります（Slide9）。議論の具体的内容につきましては会場のパネルの方で提示しておりますので、是非見て頂ければと思います。ご清聴ありがとうございました。

Discussion

中川 | ありがとうございます。残りの時間はですね、このピリピリとした感じで、批評的なお話もありましたけど、問題点や反省点というところをこの3人に喧々諤々話合って頂き、その様子を見てコメンテーターのお二人が感想を述べるっていう仕組みなんですけど、おそらくお二人も、もっと疑問点等々あると思いますのでそこはよしなに行こうと思っています。

まずは口火を切るという形で白石先生に…事前打ち合わせですね、10年経ったら先生も10年歳を取っているし、地域も10年歳を取ってるんだよということを仰っていたんですね。それは確かに、少子高齢化もあって10年前とは少し様子が変わっていく、先生も入れ替わっていくところでの持続可能性のお話もありますが、そういったところで白石先生に口火を切る形でお願いできますでしょうか。

白石 | さっき小林さんが横と前後の繋がりっていう話をしていた、洲本で課題を抱えている地域に入って行った時は、大体その時の年齢が若くて60代後半ぐらいだったんですね。それが10年経てば70代後半から80代になっていて、やっぱり同じように学生と足並べて力を出してっていうことを求めていくのはなかなか大変なんです。大学の教員だって、私ももうすぐ定年になりますから。ずっと発電所の事業を続けてきましたが、教育として、洲本のことを知っている者として、次の若い方々に役割を位置づけていくっていうのも物理的な限界がやってくる訳ですね。だから長くやるっていうのはコンテンツを絶えず新しくすると

か学生も地域も丸投げしないと色々な工夫も大事なんですけれど、最終的に世代交代した事業ができるのかっていうところが…日本では事例は少ない気がします。さっき話を聞いていて新鮮だと思ったのが、横の繋がりを作ること知識のリニューアルができるんじゃないかなっていうのはすごく感じました。

中川 | 分かりました。ありがとうございます。野田先生は地域の方々が歳を取っていくとこうなるんだよみたいなワークショップについて仰っていましたが…これも事前に告知をしていませんが、そんな話をさせて頂いてもよろしいですか。

野田 | 数年前の話なんですけど、いつもお世話になっている宇谷という地域で、コアメンバーの一人ひとりに1年後、2年後、3年後、X年後に何をしたいかっていう個人的な夢や構想を一例にまとめて頂いて、それを縦横斜めに横断させて繋ぐことで地域にとって必要な取り組みを炙り出すトライアルみたいなワークショップを思い付いて、実際にやってみたんですね。

地元の方の自己実現と地域づくりを繋げるひとつの方法になり得るかもしれないと思っていて、今後も定期的にやってみたいと思ってるんですが、このワークショップはある意味、一人ひとりが歳を取っていくということに対して自覚的になるということと、もうひとつのポイントは歳を取っても人生のステージの中でやりたいことややるべきことはあるはずだ、誰かがしないといけないことがあるはずだということを定期的に確認する作業だと思っていて、地域づくりにはそうした認識が必要なんだろうなと思います。ただこの方法はどこでもできる訳ではなくて、小規模集落だからこそこれぐらいの高解像度でものを見ることができたっていう部分はあるので、地域のスケールごとに目標の設定方法や自己実現との繋ぎ方は変わってくるのだと思う。

中川 | ありがとうございます。実際にアプリで写真を撮って加工して、10年後、20年後でしたっけ、歳を取ったらこうなるんだよっていうことを全員並べてみたとのことでしたが、地域の方はどう思われた感じでしたか。

野田 | まあ加工写真はアイスブレイクみたいな意味合いもあって、「お前の50年後、仙人みたいになってるやん！」みたいな。そこから真のテーマに少しずつ入っていくような感じでしたが、地域によって適切な方法は他にも色々あるのかなって思います。

中川 | 私が関わっている淡路島の他の地域は65歳以上の53人しか住んでいない集落なんですよ・そこで白石先生が言う今から10年後とかになると、若者の役割をやってくださいよって言うてもなかなかそれを保てなくなるって

いう風に思ったりしますね。

改めてですね、地域の方々とお話をされて活動の連続性について、洲本の方々はどういうマインドで学生さんに関わっていらっしゃるのか、小林さんどうでしょう。

小林 | 難しいですね。僕が今関わっている竹原という集落においては域学連携が始まった当初から10年来の活動をされている地域なんですけれども、やっぱり皆さんが口に行っているのは期待し過ぎない、心地良い関係性を持って学生さんと触れ合っているっていう寛容さの部分ですね。それで継続性を保っていくというひとつの方向性を指し示しているという風に思っています。1、2年で継続性が必要だっと思えるかどうかは難しいんですけど、長く続けているからこそより継続性が必要に見えてくるっていうのは、この10年を掛けて地域の方が歩んできた歴史を見て僕は感じました。

石山 | 継続性や連続性っていうようなお話になってるんですけど、3人の皆さんのプレゼンを聞いた時に私が思いましたのは、同時に仕組み化をするっていうお話が出てきたんですけど、実は白石先生のお話を聞いているとたまたま越境学習で白石先生と高橋さんが繋がって、そこでたまたま総務省なり洲本市なり最初の段階で色々な人の意見や意図があっただけでこういうことになったとか…色々な地域を見てると、最初はNPOの人とかがガーッと訪れてそれでやるんだけど、大体そういう人って飽きたら別のところに行っちゃうみたいなのがあるって、そうするとじゃあ属人性がいけないっていうところで仕組み化して、どんどんつまんなくなっていくみたいな話もあるんですね。そうするとやっぱり何か偶然がないと面白くないみたいなこともあるし、とはいえ今まで偶然でやってきたから仕組み化っていう話が出てくると思うんですけど、仕組み化し過ぎるとつまんなくなっちゃう。その辺りのバランスって3人の皆さんはどう考えられてるのかなっていう。

白石 | 私自身は洲本のプロジェクトを皆さんとやってきてね、まあスタートアップはどんなところでもできるっていう自信はあります。それはどんな分野であっても大事なことなんですけど、もうひとつはですね、その時に今みたいに目標を決めて、僕らは10年後どうなってるっていうのを最初に考えるようにしたんですね。2年目はどうする、20年後はどうする、年齢を考えたら20年は難しいかもしれない、みたいな考えでしたけど、それを考えるとね、ある意味成り行き任せでも良い気はするんです。でもその10年の蓄積で、色んなところの人たちと出会って、ここでこれをやりたいっていう時に、それをリアリティあるシナリオにして離陸させることぐらいは大体できるという自信はあるんですね。

だからこれからは横からのインプットでどんどん広がっていくことの方がおそらく大事で、その中でね、静かに過ぎていくプロジェクトがあっても良いっていうぐらいの…そこを覚悟してないと。ただ大切なのはオーナーシップがあるか、皆そこにこだわるんですね。オーナーシップがないプロジェクトはスタートしないので、そこを上手に最初から設定しておかないと…成功や持続の秘訣ってそこから生まれてるのでね、そこから話し合ってるっていうのは大事だと思っていました。

中川 | 白石先生は地元の金融機関から億単位の融資を受けて非営利株式会社を立ち上げられました。そんな先生なかなかないと思うんですよ。そんな超リスクなことを引き受けられたのは、持続可能性をつくる為なのか、一瞬の気の迷いだったのか、どんな感じだったんですか。

白石 | 持続可能性の為ですね。龍谷ソーラーパークっていうのは僕ら仲間で作った非営利株式会社なんですけど、洲本の発電所は3号機なんですね。1号機、2号機は既に作っていたんですが、やっぱり理解が得られなくて…非営利株式会社に金を貸すにあたって担保もないし当てにならない。証券化しても、こんな小口の証券を扱ってくれる証券会社ってないんですよ。皆どんどん手を引いていくっていう時代だったので。だからこのビジネスモデルを作るのはすごい大変だったんです。

洲本の場合もちゃんと事前に、例えば協定を結ぶ際に金融機関もそこに入ってもらうとかして色んな仕掛けをやって、やらざるを得ないよねっていう関係を作るのがすごい大変でした。そこから先に持続可能になるかっていうのは置いておいて、やっぱりインパクトのある取り組みをやることで域学連携に対する見方も変わりますし。龍谷大学もあそこに名前のある発電所を作った以上は少なくとも20年以上は洲本と関わるんだっていう決意ができますから、そういう意味では色んな作戦があったっていうところは間違いないです。ただ苦労しました。

中川 | 何が非営利化っていうとね、発電で得た収益は地域に還元をする。だから持ってるお金を株式に残すんじゃなくて地域に回すということですね。

白石 | そうです。余った売上は地域に給付金として差し上げるという形で、発電機の寿命は20年くらいですから収入が入ってくる間は毎年使い切ろうっていうつもりで毎年やっています。だからそれぐらいの、20年の寿命まではここで活動していこうという思いは込めました。

中川 | すごいですね。野田先生も過去10年ぐらい関わられてきた中で連続性に対しての問い、自戒の念も沢山あると…最初から10年間関わりますと仰ってから関わってたと思うんですが、今関わっている中での連続性や地域の思

いっていうところはこういった部分がありますか。

野田 | はい、仕組み化の話もありましたが連続性を担保するポイントのひとつは責任だと思っていて…関係人口も大事ですが、これからはもっと責任人口みたいなものを積み上げていくような話なのかなという風に思っています。

僕は学生の時からずっとお世話になっていて、そこから自分自身が少しずつキャリアを踏んで成長してきたという経緯もあるんですが、そもそも当初から「地域づくりって数年で結果が出るようなものではないだろうな」っていう前向きな諦め感みたいなものがあって。僕自身は大学の先生になって、別の大学に移っても関わらせて頂いていて、周りにいる人は入れ替わって行って、その中で上手くいくこともいかないことも沢山あるんですが、やっぱり何年も責任を持ち続けるっていうところが連続性の担保だと思いがら続けている部分はあります。

中川 | 改めてインタビューを市役所の方にさせて頂いた時に、「ついではん」に関わった京都工芸繊維大学の学生さんなんかとオンラインで話してたんですけど、就職した後に社長に相談して洲本に関わり続けられるような取り組みを会社として作ってもらったりとか…野田先生もそうなんですよ、元々は学生さんとして関わられていて、大学の先生になって、今度は学生さんを送り込む立場になると。奇跡ですよ、なかなかないですよそんな地域。そういう意味ですごくいいなって。

野田 | 地域の皆さんのおかげです。運と巡り合わせですね。ただこれからもそういう人がある種の非計画性や偶然性から生まれるんだろうな、仕組みの外側でそういったことが起こるかもしれない、みたいな認識は持ち続けたいいけないですよ。繰り返しになっちゃうんですけど、仕組み化して終わりじゃないんですよ。それを責任を持って見続ける、育て続ける、直し続けるっていうところがないと、絵に描いた餅が、文字通り絵に描いた餅のまま止まってしまうのではと思います。

白石 | 僕が思うのは洲本市役所の待遇ですね。高橋さんも普通は3、4年くらいで人事異動すると思うんですよ。それで熱量のない人が来てがっかりくるっていうのを、我々はどれくらい煮え湯を飲まされてきたか、そういう苦労を色んなところでやってきたので…実は一番サイクルが早いのは実は学生さんと市の職員なんですよ。そういうところで言うと、ここは長く付き合った人が沢山いる、市の職員さんもきちんと体制を作ってきたというのは本当に大きかったと思います。それがなかったらもっと難しかったと思います。

僕も最初に始めた頃は市役所の市長さんが挨拶に来て下さるような雰囲気が始まった訳ではないんですよ。でもPS

洲本で発電パネルを作って、竣工式に色んな方を呼んだ辺りから、市役所として本腰を入れる事業にしようっていう風に変わっていったのは大きかった。やっぱり市を変えるようなイベントを作るっていうのは非常に重要だったなという風に個人的には思っています。偶然もありますけど、そういう人的な力も必ず働いていたんだと。仕組み作りと言われればそうかもしれませんが、もう少し柔軟な、そういう土壌を安定させるような取り組みも必要だったんだなという風に思っています。

中川 | 僕も色んな地域に関わりますが、担当者が全てではないですが熱量とか思いとか、やらされ仕事みたいな人もいて…洲本市の域学連携の担当者の高橋さんが10年間この取り組みに熱心に関わり続けているっていうのは非常に珍しい、本当になかなかないんですよ。色んな理由があるかもしれませんが、市の采配かもしれませんが、皆が恩恵を感じて、良かったなと思っていらっしゃるということですね。さて、コメンテーターのお二人も巻き込んでいきたいと思うんですが、お二人のどちらかにマイクを握って頂いて、感想や疑問点等々お願いします。

指出 | ここに登壇されている皆様の中で、僕が関連性がない、一番の無関係人口に近い立ち位置にいますので、ヒーロー役で良くなっていう風に思うんですけど、さっきのお話の中で、お三方のプレゼンテーションがおよそ何人ぐらいたたてで話し合ったのか、どれくらいの人たちがワーキンググループに関与しているのか、僕にはあまり見えなかったのでもそこをそれぞれお話しして頂くと、より議論が活発になるのかなと思いました。

中川 | 無関係人口にさせないので大丈夫ですよ（笑）。野田先生のチーム多かったですよ。

野田 | 今ちょっと改めて確認すると…数え方の単位にもありますが、大学5つと企業が7になりますね、総勢20人ぐらいです。これを多と取るのか少ないと取るのかもあると思うんですが、そんな感じです。

中川 | 小林さんは週末に市役所で集まられてディスカッションされていましたね。

小林 | そうですね、町内会の方や行政の方含めて実際にワーキングをした人数としては18名くらいで、その他事前のアンケートで答えて頂いた方とかもいらっしゃるのでおそらく30名ぐらいになります。その意見を集約して、反映させて頂いた感じでございます。

中川 | 白石先生の方はいかがですか。

白石 | 大学の教員とサポートスタッフを中心にやりましたので、10名弱ぐらいです。卒業生も入って頂こうと思っていたのですが、なかなか日程も合いにくかったのでも今日は卒業生が何人も来てますけども、卒業生を巻き込んで

のワークショップにはならない形で、とりあえず振り返りというスタイルでやりました。実際の各科目をそれぞれ担当していたのは3名ですから、それ以外の先生方にも来て頂いているという形です。

指出 | ありがとうございます。さっきポスターセッションをざっと拝見させて頂いた時に、一番最初に僕に名刺交換を申し込んできたのは中学校3年の生徒さんでしたね。彼は元気だと思って聞いてたんですけど無印良品が好きだということで、無印を洲本に呼び寄せるにはどうしたいかって聞かれたので、1日掛けて直筆の手紙を金井会長宛に届けなければ必ず届くので、そうされたいかがですかっていう風にお話をしました。

まさに野田さんが仰られたように、関わっている人の背景にいる人たちをどれくらい把握してるのかっていうのはすごく大事なことなんですね。それを送り出している家庭の女性の方とか、その方も本当は来たかったかもしれないけど参加できない理由があったかもしれないとかを考えると、実質的に見えている関係人口の話ではなくて、そのぼんやりとしたところまで、地域に関わっている人たちをどう把握してビジネスやビジョンを作るのかっていうところが大事なかなっていう風に思いました。でも野田さんみたいな方がこうやって現れてるっていうのは…お三方がやってらっしゃったワーキンググループというのはすごく広がってるんじゃないかなっていう風に思います。

僕は各地域で関係人口の講座を開いてるんですけども、地域によっては大学生より社会人に来てほしいというところもはっきりいるんですよ。これはわりと如実で、例えばカップルで講座を受けていて、別れちゃったら途中で消えるんですよ。それぐらいの感じでふわりと地域に関わりたいって人たちもいるのであれば、それも含めていつ彼ら彼女らが戻ってくるかまで見ていかないといけないですよ。日本海側は今、鮭の遡上がものすごい少ないんですけど、これは色んな理由が考えられると思うんですが、生存している鮭の全てが川まで上がってくる訳じゃないんですよ。関係人口も全員が帰ってくる訳じゃなくて、野田さんが来たっていうことは大なる成果だと思うんですね。責任人口っていう新しい言葉を提唱されて、全員が必ず回帰するっていう考え方ではなくて、何年かしてから帰ってくるっていうくらいでも良いのかなという風に聞いていて思いました。僕自身東北の仕事を頂いたり、先程の下北山村のお話もありましたけど、ずっとプライベートで通っていて、仕事として自分から持ち掛けたっていうよりも、自然と仕事になっていく場合が多いのですが、東北も下北山村も訪れ出してから25年や30年以上経っています。それぐらい通っていると地域の方々も安心してくれるし、どん

な方が来てくれたら良いとか、どんな迎え方が良いのかも分かってくるので。僕が作っている講座は殆どのメンターの方がプロフェッショナルな人材じゃありません。その地域の眼鏡屋さんのご店主だったり、工務店の社長さんにメンターになってもらってます。或いは地域おこし協力隊1年目の人とか、そこでこう仰々しさみたいなものですかね、固まった計画性みたいなものを意識的に外すオフセットな感じでもやったりしていますね。

野田さんがさっき仰って下さったんですけれども、人は偶然の出会いで「成長したぞ」って思うんですね。だから出会いを果たすっていうのは、その瞬間で自分が楽しいって思うよりも自分が成長したっていうことを誰かに印を押してもらってという効果があるのかなと、僕自身も思っています。域学連携で学生が地元の皆さんと出会うことで、彼ら彼女が成長していくっていうことも、こちら側は必然的に偶然を意識して作らなきゃいけないと思うんですね。大人として必然的に、完全に偶発性を装って、彼ら彼女らがその偶然の出会いで自分が成長したって思ってもらうことも大事だと思っていました。ちょっと長くなりましたけど雑感です。

中川 | ありがとうございます。仕組みで学生たちを罫に嵌めるという訳ではないんですが、関わりを伸ばすとか保たせるとか、戻ってくるまでに20年みたいなのを仕掛けられるかみたいなことってなかなか難しいんですが、それは何か、先生が考えることとか地域の方々が考えるとか、誰が考えるのか…小林さんがマイクを握っていますね。

小林 | 仕組みを担う人が誰なのかっていうのは、すごく厳しさと難しさがあるなと思っていて、何て言うんでしょう、僕は今32歳になるんですけど、30、40代働き盛りの人たちは生活を担うようになっていっぱいいっぱいになる世代ですよ。協力隊だと任期を終えればとっと放り出されて、明日どうやって食べて行こうかっていう形になると思うんですけど、そういう世代が先程の仕組み作りのどこになるかという、機能的価値を求めちゃいがちなんですよ。面白さとトレードオフかなって思うんですけど、自分のリソースを導入したからには自分の生活もある状況なので、そこはなかなか難しいところだと思っていて…余裕がある人材じゃないとダメだなと思っていて、しっかり事業を作って資金を得て、何か賃金を得られるような活動ができたかなと思ってんですけど、今そこまでできていないので難しいなっていう。

白石 | やはり学生一人ひとりにとっても地域にとっても、偶然で面白い印象に残るような、自分の人生が少し変わったり発見があったりという風にしないと…大学のカリキュラムで組むということは、その1コマで学ぶ為のサービ

スみたいになっちゃうんですね。そこをどう、そうさせないかっていうところをなるべく気を付けているんですけども、学生の発表を聞いていると、私たちがやりましたみたいに皆なるんですね。要するに裏では市役所や協力隊の方が一生懸命舞台回しをやっている訳ですよ。学生にはね、そこよりもあなたたちが今やっているところがポイントだよっていう風に毎回苦労して伝えているんですけど、学生が「私たちがやった」っていう言い方ができることが大事だなという風に思いました。

もうひとつは視点が変わるんですけど、最初は洲本を外だと思って見ているんですけど、洲本にまた来て下さいっていう、そういう風に言葉が変わっていくんですね。そうした時に場所がこっちに来るんですよ。それもまた良いなって思って、何かそういうのを大事にして、それが伴わない時は良くなかった年だと思ってますし、今の指出先生の言葉は肝に命じて聞いていました。

石山 | 指出さんのお話で、仕組みからちょっと発展して今度は仕組みを誰が担うのかっていう話になってるんですけども、今までの話だと仕組みっていうのがかっちりしてなくて、ちょっと遊びがあって、それでまあ学生が実は偶然に成長していたのが良いっていうところだと思うんですけども、ちょっと今までの話を聞いてみると、他の域学連携より洲本が上手くいっているっていうのは関係者が上手く繋がっているっていうことだと思うんですね。

例えば市役所には高橋さんがいて、大学には野田さんとか白石さんとかがいっちゃって、他の大学の先生もいて、その大学の授業を例えば一緒にやってくれるワークアカデミーさんとか事業者さんもそこにいたりすると。更にそこで地域おこし協力隊の小林さんのような方がいて、そして更に背後と言うか、学生の方も直接繋がっているんですけども地域の色々な集落があって、シマトワークスみたいな地域のプレイヤーもいるっていうのが…他の地域ではこれが繋がらないんですよ。繋がらないし、繋がったとしても長くは繋がらない。

洲本の場合は奇跡的に高橋さんが異動しなかったからとか、白石先生がずっと絡んでるとか、そこで一度上手く繋がっちゃってこの10年間は上手く続いたと。野田先生は責任人口としてまだ先を見ようとしているけど、野田さんや白石さんや小林さんが未来永劫に関わっていけるとは限らないとなると、僕の考えるサードプレイスっていうのは出入り自由というか、縛り付けられてそれを必ずやらないといけないうということでもないし、それを皆に期待しても難しいし、学生にも地域おこし協力隊にも色々な人がいるかもしれないとなってくると、今までは強固に連携していたけど、人が入れ替わってもそれが繋がっていくにはど

うしたら良いんですかっていうことになってくると思うんですけれども、その辺りを。

野田 | これは提案というか願いに近いんですけど、域学連携はこれから地域が主語であってほしいと思うんですよ。学生が主役になっても良いし、時にはそこにスポットライトが当たるのも良いんだけど、やっぱり地域の人たちが「これは自分たちの大いなる地域づくり計画の一部で、何らかの目標達成の為に域学連携をやっている」と。その中では冒険人材なる人間や学生たちが入れ替わりながら好きなことをやっている、自己実現に向けて頑張っているように見えるけど、少し引いて見ると地域は一直線の太い柱に乗って動いている、という実感を作らないと、やりたい人がやりたいことをやっているだけで終わってしまうという風になりかねないと思っています。

とはいえその為のシナリオを作るにあたって…僕はシナリオはあくまで手段だと思っているのですが、地域だけでそうした大黒柱を建てるのがそんなに簡単ではないということも分かっているので、その為の、何をするかではなく何の為にやるのかっていう大きなシナリオを、地域の方々と一緒に僕は作りたいなって思っているんですよ。じゃないと10年後も多分同じ問題を抱えて同じ話をしているんだろうなと思っていて、今回はそこを振り返るのが大事だと思うんですよ。

白石 | 僕もこの10年を市役所の方たちと考えてました。ミクロのプロジェクトでは色んなことを言っていましたけど、今は成長期、上昇期中盤に差し掛かっていると思うんですけど、会場にいる方々も世代交代で入ってこられて…何年前かに最初のシンポジウムをやった時はおじさんおばさんばかりが座ってたので、これだけ若くなってるとことは一定数世代交代が起こっている。僕がレジュメで書いたように皆が洲本を参考にしたい、目指したいっていう自治体であり続けることで惹き付けてるのであって、個別の人材の魅力で域学連携をやっているのは初期段階なんですよ。洲本はその可能性を持つ地域だったと。これからは、そこを皆で支えて面白いことができるっていうミクロな取り組みと同時に、マクロな戦略性が洲本にもあるということがないといかんと思うんですね。

ここではエネルギーと食と暮らしが持続する地域ということで特区の指定を受けて、エネルギー自給を目指してたんですよ。一步も二歩も先端を行くぞっていうのが自治体の、或いは住民の政策課題としてあれば、作り続けたいっていう気持ちが後から後から湧いてくる人たちも出てくるんですが、そうでないとですね、付き合いが厳しくなるだろうなと思うんですね。

中川 | ありがとうございます。後半戦に差し替わる今のお

話でした。そろそろ交代の時間なんですけど…僕は洲本に関わって6年、淡路島に関わって8年ぐらいなんですけど、本当に新しい移住者の方々がおられます。飲食店をしたいとか住むだけ住んで仕事を探してるんだとか、お宿を作りたいんだとか、色んな方がおられて、こんな街ってなかなかないんですよ。

洲本は自然発生的に山のように、色んな方が来られる可能性を感じている、でもふと俯瞰して見ると交通費は掛かり水道や光熱費は高いし、みたいな色んなことがあるんですけど、でもここには関わり続けたいんだという地域で、不思議だになっていつも思います。改めて皆様に拍手をお願い致します。白石先生、野田先生、小林様、ありがとうございました。

そして第二部はメンバーが変わります。場つなぎの話をしないといけないのですが、指出さんいかがでしたか。

指出 | 雑ですね(笑)。すごく良かったです。皆さんの10年を思い出しながらの、本当に熱意あるコメントが聞けてすごく参考になりました。これも多分野田さんのパワーポイントで見ていたんですけども、一方で小学生中学生とか女性の皆さんの参画みたいなのが見直すところまで至らなかったようなことが書いてあったんですが、これ難しいところだになって僕もいつも思っています。

僕は最初にですね、まちづくりや地域づくりをやりたい人が現れる時にはこの3つの方法しかないと思って割り切ってたことがあって、ひとつはスナックをやるということでしたね、もうひとつはバーベキューをやるということ、もうひとつはカレーを食べるか駄菓子屋をやるかなんですよ。この3つだと大体皆来てくれるんですよ。それで自由に遊んでもらう。これは盤石ですよ。スナックかバーベキューかカレーを食べる会で、そこから「じゃあ私、子供食堂をやりたい!」っていう声が出てくればしめたもので、じゃあやりましょうとか、じゃあカレーから始めましょうとか、ゆるいんだけど前を目指す為に色んな方が来てくれる、天岩戸を開くような楽しい場所を作るというのは大事かもしれませんね。

パネルディスカッション 第二部

“淡路島クエストカレッジ”による 冒険し続ける 人と地域の つくりかた

Introduction

中川 | さあ準備ができたようでございます。後半戦に変わりますが、運営からのオーダーは、ここは和やかにということです。まずは淡路島クエストカレッジとか冒険人材とか飛び交っておりますが一体何やねんということで、昨年从这个クエストカレッジという取り組みが始まっているようなんですね。まずはこの仕掛け人でもあります富田様からプレゼンテーションして頂きたいと思います。ご準備よろしいでしょうか。

Presentation

淡路島クエストカレッジによる冒険し続ける地域と人のつくりかた

富田 | 改めましてシマトワークスの富田です。今日はですね、淡路島クエストカレッジとは何かっていうところを皆さんにご説明させて頂ければと思います。発表時間は10分なんですが今朝練習したら18分も掛かってしまったので、巻きで行ってみたいと思います。

クエストカレッジは正式には昨年度から始まって、実際に立ち上がったのは今年度からです。大学生や若手の社会人の皆さんに学んで頂くことをプログラム化して、コーディネートしていく団体として作りました。自治体とか島内外の企業さんとか、そして大学と連携しながらプログラムを作っていくと立ち上がったカレッジになります。当初の目的として、地域課題の解決に向けたチャレンジを通して冒険人を育むっていう、人にフィーチャーした目的だったんですけども、この春から色々プログラムを実施する中で…域学連携の課題みたいなのは今日も話題に出てきたかと思うんですけども、自分たちの中にもやっぱり沢山の課題が出てきてですね、この夏くらいから再考しようということで今に至ります。後半はそういった、今後どうしていくかという話をできたらと思います。

これまで何をしてきたかをサクッとお話したいと思いま

Panelist

富田祐介

株式会社シマトワークス代表取締役

柴橋静華

株式会社ワークアカデミー執行役員

Commentator

指出一正 前掲

石山恒貴 前掲

上崎勝規 前掲

Coordinator

中川悠 前掲



富田祐介 株式会社シマトワークス代表取締役

す。一番初めには2月に2泊3日で、隣にいるワークアカデミーさんとODKソリューションズさん、今日は外にもパネルを出されていましたが、その2社と学生さんを集めてフィールドワークをしました。5月と9月にはP-1グランプリ…これも地方の課題を新しい技術を使って解決するアイデアを学生さんに提案してもらうコンペにジョインさせて頂いて、民間の企業さんたちと一緒にさせて頂きました。この春には淡路信用金庫さんの新人研修だったり、海外のテキサス大学の受け入れだとか、S BRICK 近くのプロジェクトに連携企画として武庫川女子大学とか大阪経済大学の学生さんにワークアカデミーさんと一緒にプログラムを作って提供して運営するといったことをしてきました。9月には龍谷大学さんの1年生ですね、これから地域に入っていく皆さんに対して、地域の冒険人になってもらおうということで70名くらい受け入れて、そうしたプログラムもしています。

参加者の皆さんからはまちづくりに関わる仕事がしたいと思うようになったとか、地方創生や社会課題と結び付けるビジネスを今後やってみたくなったとか、チームワークの大事さや大切さを知ったとか、満足度の高い意見や感想をもらっている一方で、今日の前半部分でも沢山出てきてるんですけど、地域の成果に残り辛い、地域や取り組みの

繋がりを生み辛いといった課題、後は単純にカレッジの運営メンバーの不足とか、プログラムの展開がしにくいということがあって、面白くないなとか、こんなもんじゃないとか、変えていこうという話をこの夏以降してきました。再考している中でのポイントですが、地域課題の解決に向けたチャレンジを通して冒険人を生み出すっていうお話をしたと思うんですけど、それだけじゃなくて冒険する地域に伴走すること、その中で外部から来る冒険人を育てること、地域と人の代謝を促し続ける環境を作ることっていう3点にフォーカスしていこうと考えています。石山先生のお話にもあったように、今いる環境を飛び越えて、オーナーシップを持って目的へ向かっていくことを自分たちは冒険と言っているんですが、目的をきっちり作ることも、再三話が出てきていますがすごく大事だと考えています。これまで洲本市さんが主体でやってきた域学連携は継続的にやっていくと思います。クエストカレッジはまた別の視点で、地域で冒険されている皆さんをリサーチして一緒にやりませんかというような話をして5年、10年と長い目線での目的を作ると。その上で…カレッジとしてのプログラムは3年間ですね、もう少し短いフェーズで成果がみえる形にした状態で大学生さんに声掛けをして、一緒に目的に向かって冒険していくという環境を作っていきたいなっ

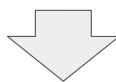
冒険する「地域」「人」に提供できること

「地域」

- ✓ 関係者と一緒に具体的な目標づくり
- ✓ 目標を達成するためのプログラム設計
- ✓ 一緒に冒険する仲間集めとプログラムの推進

「人」

- ✓ 地域・社会課題への挑戦
- ✓ 人生の選択肢が広げる新しい価値観
- ✓ とともに挑戦する仲間や人脈



**具体的なプログラムを目的をもって一緒に冒険し、
目に見えるゴールを達成させていく**

#地域づくりの動機付け #モチベーションの向上 #関係人口・交流人口の増加 #ソトモノからの新しい視点

今後の展望

③参加者満足度は高くとも、集客面や、継続するための資金面での難しさがある

④運営メンバーの不足で、プログラムの展開がしきれていない

- 地域活性化起業者(起業人材派遣制度)の配属で、**民間企業のノウハウを活用**
- 多くの大学、学生とのコンタクト数を持つ株式会社ワークアカデミーが関わることで**持続的な学び場の実現、大学との連携強化**
- noa+※との連携でスキル講座を取り入れたプログラムの開催

※noa+とは、ワークアカデミーが提供する、学生〜20代の若手社会人を対象としたキャリア支援サービスであると共に、そこで自ら学ぶ受講生と、成長意欲の高い企業が出会うマッチングサービス。これからの経済を支える若者・企業の成長を支援するべく、様々な学び講座やセミナー、イベントの提供もしている。

地域によって企業や地域活性化起業者と関わるメリット

- ✓大学との連携強化で、**今後さらに複数の大学との接点を持つ可能性がある**
- ✓専門スキルを持つ学生や社会人との接点を持ちやすく、**知識の代謝、新たな発想が生まれるヒント**

20

11

という風に思っています。

地域に対しては、関係者の皆さんと一緒に具体的な目標づくりを一緒にやれたらということと、その為のプログラムとか仲間集めとかができたらと思っています。学生さんや社会人さん、外から来る人の中には地域課題に挑戦したいっていう人は本当に沢山いるので、課題だけではないと思うんですけど、そういったものに応えられるフィールドがあると、結果的に人生の選択肢が広げられる、新しい価値観を持ってもらえる、人脈を広げてもらうというようなことがカレッジとして提供できるかなと思っています(Slide10)。計画的偶発性という話も先程出てましたけれども、この辺りは僕たちも本当に大切にしたいと思っていますところ。プログラムはこちらでお膳立てし過ぎると、お膳立てした通りの結果にはなるんですけどそれ以上が特になんかということになって、それを冒険と呼べるかという違うんじゃないかという話があったので、できるだけ余白を残したプログラムづくりをしていけたらと思います。

今後の展望ですけれども、先程お伝えした通り、長いスパンのテーマ設定をして、地域の方々と一緒にカレッジとして先を見据えた上で、3年間のプログラム作りをしていけたら良いなという風に思っています。これまでカレッジではオーダーメイド型っていうのを沢山やってきたんですけど、それをやっている以上、なかなかそうした設定がし辛いので、自分たちのマンパワーがある限り、幾つかの冒険地域を設定して、今年からの3年間はこの地域にプログラムカレッジとしてやりますという風に集中させて、オーダーで来る分に関してはその地域だけでできるだけコミットするような内容でやっていけたら良いなという風に思っています。後は横の繋がりですが、プロジェクトがバラバラで動いてしまうっていうのは自分たちがやっていく中でも沢山あってですね、それをしっかり報告し合える場所を作っていこうと思っているんですけど、今日のようになんか場所も良いかなって思ったり、やっぱり

面白い場所じゃないと面白い人って集まってこないかなと思うので、さっきから話に出てるスナックも良いかなと思っていたり、面白いプレゼンができる場所、色んな人が関わりたくなる場所を作っていくとか、WEB上で公開して事前学習をしっかりとできるようになる環境づくりができたらいいなと思っています。これで最後になりますが、集客面とか色んなところで自分たちだけでやるのは本当に難しく、株式会社ワークアカデミーの皆様と一緒にですね、そういった外部の会社さんとも連携しながら、一緒に集客面とか資金面のところを工夫しながら運営していけたら良いなと思っております(Slide11)。以上です。

Discussion

中川 | ありがとうございます。クエストカレッジとは何かって言うと、第一部のセッションでは登壇者の3名に域学連携の色んな問題についてお話頂いたんですけど、それらにある種チャレンジとして受け止めて解決できないかっていうことをシマトワークスさんが取り組んでいらっしゃるということになります。それでも色々な課題、マネタイズの話なんかもあるんですが、外部と色んな繋がりとして、ワークアカデミーさんまで協力されているということで、柴橋さんからこれからのクエストカレッジの支え方、サポートの仕方とかちょっとお話頂けますか。

柴橋 | ありがとうございます。株式会社ワークアカデミーの柴橋と申します。私もワークアカデミーですが、今年で創業41年を迎えます、大阪の人材教育サービスの会社になります。関西、関東で大学生支援をメインにお仕事をさせて頂いておりますが、直近2年は特に洲本市で18大学160名の学生の皆様にご参加頂きまして、色んなプロジェクトを走らせて頂いております。先程の資料にも少しありましたが、弊社では「noa+」というプラットフォームを作っておりまして、学生や社会人の皆様の学び、特に洲本のプロジェクトでは意識してテーマにしているんですが、夢中になれる経験をしてもらえる場づくりに取り組んでおります。お話について何点が頂いたんですけど、1つ目がマネタイズで良いですかね。

中川 | 難しい話ですね。

柴橋 | ですね、打ち合わせの時に私できれば避けたいって話したんですけど(笑)。

中川 | 半径5mって石山さんも仰っていて、ちっちゃい関係を作っていくんだと。でも地域に入って、淡路島でどうやって食べていくんだろっていうのをずっと皆さん考えているんですね。小林さんも協力隊が残り4ヶ月というところで、どう計画を立てていくのかってお話もありまし

たが、取り組みを長く続ける為にはお金が必要で、柴橋さんにはビッグアイデアがあるんじゃないかと。

柴橋 | そんなことないですけど（笑）、でも今日のお話を最初からずっと聞かせて頂いて、日本全体で考えた時に、今は間違いなく人口減少で、えげつないほど人が減っていきと言われてますよね。企業もですし、こういう市もですし、私も兵庫県の田舎に住んでるんですが、どこも若者が活躍してもらわないと困るじゃないですか。でもその人の数はどんどん減っている中で、どうやって若者を育成していくのか、活躍する経験を積んでもらうのかっていうところは、企業もですし、取引させて頂いてます大学もこれから生き残りをかけてどう存続していくのかという状況だと思うんですけども、どんな面白い授業ができて、どんな育成ができてというところが課題になってくると思うんですよ。なので大学にとっても面白い教育ができる場所であることと、活躍できる冒険人材をぜひうちについていう企業が沢山生まれてるような場所にしていってところで、全体でマネタイズしていく必要があるんじゃないかなって思っています。そうした場所に学生が一生懸命お金を出して来るっていうのは難しいので、三方良しというか、会社でも話してるんですけど、企業、大学、参加者全てが良いと思えるマネタイズが必要なんじゃないかっていう風に思います。

中川 | 本当に大学も人を集めるのに困っていて、そこで新しい学部を作るようなところと、もう一方で地域に関わって社会課題に解決するようなところが結構いらっちゃって、僕にもよくそういう相談があります。だからこそこういうクエストカレッジが、困っている大学とかプログラムを作れない企業とかの相談を受けて、淡路島で進めていくみたいな中で非常に可能性があるんじゃないかなということですね。

柴橋 | はい、そうだと思います。

中川 | 石山先生にお話頂きたいんですが、今のお話を受けての感想や期待値も含めてお話し頂けますか。

石山 | はい、第一部はピリッと、第二部はほんわかっているお話だったんですけども…ちょっとクエストカレッジって何ぞやって考えると、第一部からの連続性のあるお話なのかなって気がしてきました。何かって言うと最後に白石先生が仰った、要するに地域に軸を作ってほしいっていう、それって地域にマクロな軸をドーンと設定しといて欲しい、それは今までは具体的には食とかエネルギーだった訳ですが、これからはどうしますかっていうのが伝言として残されたと思うんですけど、これは2つの意味があるんじゃないかなと思っていて。

例えば1つは食とエネルギーに学びという軸をドーンと打

ち立てることになるんじゃないかなと思ってまして、というのはさっきの柴橋さんの話もそうなんですけれども、人口減少とかバブル崩壊以降失われた何十年みたいな話の中で日本企業って遊びがなくなっちゃうんですよね。それまでの日本企業にはすごい遊びがあって、本社とかに黙って勝手に色々やっちゃってることが大ヒットみたいな話があったらしいんですけど、バブルが崩壊してからギリギリの人数で全部が見える化してやるようになったら隠れてやるができなくなっちゃったみたいな状況が起こってるんです。クエストカレッジは冒険して遊んで良いんだよっていう学びを仕事で打ち立てることで、そこで学んだ人たちが企業に入っていくと、もう一度日本企業の中に遊びとか冒険ができて日本全体が活性化するぐらいのそういうような軸になる可能性があるんじゃないかなってというのが最初の話です。

もうひとつの意義が、さっき仰っていた第一部のお話にもなるんですけど、仕組みっていうのをどういう風に偶然を持たせてやるのっていう。例えばどうやってそのプロジェクトと繋げてくるのっていうと、やっぱり共有可能なスナックとかでいった方が良いと思うんですけど、そういう域学連携のハブっていうか原動力みたいな、遊びのある仕組みをクエストカレッジで再生産できるような意味付けがあるんじゃないかなっていう風に思いました。

中川 | ありがとうございます。富田さんは仕掛ける側として、1つひとつのプロジェクトに遊びや持続可能性を作っていく側だと思うんですが、今の先生のお話を聞いて改めてこう考えているところや、既にクリアできているようなところ、これはまだこれからというところについて補足説明お願いできますか。

富田 | そうですね、今日の会を踏まえてまたブラッシュアップできたらなと思ってるところで、なるほどと思いながら聞いてたんですけど、遊びの持たせ方に関しては、今まで企業研修をずっと淡路島でやってきていて…独立してから10年弱ぐらいやってるんですけども、思わぬところで学ぶというのが往々にしてあるなと思っていて。学生さんのコーディネートをやり始めたのは最近なんですけども、思わぬところで結果を出してくることもあって、例えばプログラムを実施して、夜にお疲れ様ですってことで飲み屋の話ばかりで恐縮なんですけど、偶然飲み屋さんで出会ったおじさんにすごい衝撃を受けて次の日から提案の内容をばさっと変えちゃう学生さんとか、それを自分たちがどう評価するかが大事だと思っていて。計画したことで得られたものだけではなく、プログラム外で何が起きたかっていうのも結果として残していくことをやれたらと思ってますし、そこに評価を与える軸があっても良いのか

なって。今はアイデアベースでこれから実装していければと思ってるんですけど、そういうことは思っています。全体の軸を決めるべきなのかっていうのはすごく悩んでいて、これはカレッジの話に限らず、地域を食とかエネルギーとかで位置付けるのは分かりやすいけれど、それでカテゴライズして良いのかどうか、面白いのかかっていうのは僕自身も分からないところがあります。今のところそこを決めてないんですけども、分かり易さでいうとあった方が良いのかなと思いつつ話を聞いていました。もう少しだけ喋ると、軸になるのはこっちで考えたカテゴリーというよりは、地域に沢山いる冒険人材に、その予備軍を送り込んで冒険してもらうのが大事だと思っているので…地域に何を残すかっていうことも含めてですね、主人公はやっぱり地域じゃないってというのは前半にも出てましたけど、僕自身もそう思うので、冒険だと言うと主人公が勇者になりがちですけど、勇者は必ずしもずっと同じ人ではないと思うんですよ。ターンによってヨソモノが勇者になることもあると思いますし、その柔軟性を持ちながら、カテゴリーを決めずに地域をどうしていくかをイメージして、今回のスライドを仲間と一緒に作った感じです。

中川 | 洲本のおっちゃんたちがまた寛容というか、お世話好きでね、プログラムの中だけではなくて、計画的偶発性でもないですけど、そういう出会いが全て生々しくて、みたいなことは非常によくあるなと思いつつ聞いていました。例のスナックもそういう理由かもしれないんですけど、指出さんにマイクをお渡ししてですね、クエストカレッジの可能性についてお願いします。

指出 | はい、とっても良いと思いました。多分富田さんはワクワクしたいんだろうなっていうのをすごく感じました。僕はワクワクという言葉が大好きで、よくソトコトでも使ったり自分の著書とかで書いたりするんですけど、ワクワクって水が湧く様が語源なんですよ。洲本は水の環境が素晴らしいと思うので、ワクワクっていう感覚がクエストからもありありと見えたのかなと。

興味深いのは、実際に富田さんと柴橋さんが学生さんと企業と協働するところでマネタイズしているのかなと思いつつ聞いていたんですけども。今、学生の人は皆ガクチカという言葉に反応して、ガクチカになるんだったらみたいな感じで僕たちソトコトの取材を受けてくれたりもするので、学生時代に力を入れたこととしての洲本との協働みたいなことになる、ものすごく価値観が上がるのかなっていう風に思っています。個人的に興味があるのがクエストカレッジがゆるい自己探求みたいなのに向かうとしてるのか、それともガクチカで表されるような検定ですよ、認証を出す訳じゃないけれども自分の就職とかに役立つ

ような検定感を強く出してるのか、その辺をこのセッションの壁打ちから考えていかれるのかなという風に思いました。

僕は今プライベートで一番よく遊びに行ってる地域が島根県の江津市っていうところなんですけれども、ここは小学校の教科書で東京から一番遠いまちって書かれたことがあるんですね。若い子たちがそれで胸を痛めた時代があったんですが、今では、東京から少しは遠いかもしれないけど江津らしさを出そうということで「Go-Con」っていうビジネスプランコンテストを開催したり、社会人大学と連携して、そこからゲストハウスが生まれたりして町は活気を呈しているんですよ。だからまちの規模によってそのまちのドラマチックさって変わると思うんですけど、クエストカレッジが洲本で行われる理由みたいなものが明確になっていくと、学生の皆さんに、それから起業家の皆さんも冒険しに来るようになるのかなっていう風に思いました。いずれにしても仕事を作れる人がそんな中から現れて、遊び感覚のある仕事が生まれると楽しみだなと思いつつ聞いていました。

中川 | ありがとうございます。ガクチカってホントにここ数年で言われるようになって、学生の時代に身に付けた力を就活で発表して下さいと言われて、ガクチカ恐怖症みたいなものもあったりするようです。ここで市長、突然ではございますが今までの域学連携の10年間の振り返りや評価、これからの10年を踏まえて、クエストカレッジの可能性や期待なんてものについて少しお話を頂いてもよろしいでしょうか。

上崎 | はい、まずこの10年間やってこれたことは私どもの力だけではないというのを改めて今日も感じたところです。関わって下さった多くの大学の方、先生方も勿論、我々のスタッフもそうなんですけど、そのような方々の力が結集してこの10年間で少しずつ成長してきたのかなという風に思います。そうした方々に改めて、この機会に私は感謝しなければならぬと思います。

それと今日、個人的に印象に残ったのは指出編集長の話の中で、「私が非常に好きな方」という言葉が5回くらい出てきたんですね。「私の好きな場所で」という言い方。自分もやっぱり、ここ淡路島がそういう場所でありたいという思いがしているんですよ。僕も洲本で60年以上過ごしてるんですけど…地域の外にはこんなに良いものがあるって言うところを狙いに行ってしまう、だけど本当は自分のところにもっと面白いものがあったんじゃないかなって改めて最近は思うようになりました。

私は今日の会で1つテーマにしてたのは、地域に軸を作るというのは良い話だと思って、色んな方がこの地域に

は来るんですけど、例えば地域の風習とか慣習を知ってから入ってほしいって思うんですね。ここに来て私はこんなテーマで活動をしますと言われても、いやちょっと待ってくれと、急に言われてもできるもんじゃないですよっていう、地域のオーダーもあるはずなんです。だからそういうようなところを見極めてやってほしい、これから地域と色んなところで連携する中で地域に軸を作るっていうのは大事なという風に思いました。

そしてシマトワークスさんとワークアカデミーさんのお力を借りながらクエストカレッジが立ち上がって、今から進めようとしてる訳なんですけれど、私たちにとって非常にありがたい話だと思っています。どんどん冒険して頂きたいし、偶然の出会いで成長するということも沢山出てくると思いますので、そういう機会を作っていくような、冒険というテーマの中でサイクルを重ねていくっていうのは私どもも一緒になってやっていこうという考えをしています。それから学生さんたちが、やっぱり洲本に来て学びやすいとか冒険しやすいとかいう環境を作るのが行政の仕事だと思っているので、その部分での支援を、やれる範囲でやりながら上手くいけばと考えていますし、必ずいつも全部が全部上手くいくとは思ってはいないので、その中で1つでも2つでもその数が増えれば洲本にとっては大きな力になると思っています。そういった部分についてクエストカレッジさんとか関係する方が一緒になって関係人口が増えるように、そして洲本で暮らす人間も勿論一緒にやって下さる方が豊かになるように、これからも一生懸命、スタートということで一緒にやらせて頂ければという思いを強くしました。ありがとうございます。

中川 | ありがとうございます。淡路島って大学がないのでね、18歳を超えると都会に出てしまうんですよ。18年しか一緒にいれないんだなって思いながらお父さんお母さんが過ごされていると思うので。

都会にいる大学生とか社会人が言うのは、都会の刺身は食われへんっていう風に仰るんですよ。都会の米も美味しくないって言うんですよ。淡路島のお米がいかに美味しかったか、改めてそこで故郷を感じたり誇りを感じるっていう方に沢山出会ってきました。市長が仰る通り、地域に暮らしていると…

上崎 | 私は果物が好きで、この時期にはビワがきて、次にイチジクがきて、ブドウがきて、みかんがきて、次にイチゴがくる。途中で栗が出てきたりっていうそういう部分が…季節のサイクルとしては大好きな部分なんですね。だから淡路島のそういう部分を改めて感じ直してるというのが今の現実ですし、さっき仰ったように米はやっぱりここのが美味しいですね。そう思ってます。



柴橋静華 株式会社ワークアカデミー執行役員

中川 | 「握り飯食べてみ」って何度も言われたことがあるんですが、今仰られたように私が大好きなサイクルというか、ルーティンというか、指出編集長が仰ったような私が好きな方とか私が好きな洲本とかと近いですね。

指出さんは全国を回っていらっしゃって、我が町は一番っていうように再認識された方はいっぱい出会ったと思うんですが、地域の誇りを感じる時、シビックプライドというのはどんなものなのかっていうのを教えてください。

指出 | うちには何もないよって、皆さん謙遜されてるんだなって常々思ってるんです。それを真に受けないようにねって若い皆さんには言うんですが…本当ですよ、自分たちのところにあるものを年々自分では見つけられなくなるっていうのは往々にあることなので、そういう時に他者の力を借りるのはとても大事です。地域にふらっとやってきた人が洲本の米は美味しいですねって言うのはお世辞ではなくて本当にそう思って言っているの、そこからまた再認識して、自分たちの町にあるものを改めて大事にするのが良いのではないのかなっていう風に思います。

先程も市長が、あんなに目を細めながら果物の話をさせているのを聞いていて、とても素敵な市長がいる町なんだなって改めて思いました。遠くのものを見ないで近くにあるものを目を細めて愛でる感覚みたいなものが、若い人たちや外から来る人たちの関心になるのかなって、そういう時代なのかなっていう風に思っているところです。

中川 | ありがとうございます。柴橋さんマイク持ってもらっていいですか。今の淡路島の学生さんてすごい控えめなんですよ。指出さんが仰られたように、もっと地域のことに感動してほしいとか、そんな仕組みや仕掛けを作らなければならないんですが、学生さんと沢山関わっていらっしゃって、そうした地域愛に触れる仕掛けにこだわっていらっしゃるところとかはあるんですか。

柴橋 | プログラムを作る上では、必ずその場所の方々とのコミュニケーションは入れるようにしております。併せ

て、ガクチカとか就職っていうところでお話が出たんですけど、今の学生さんってやっぱり親以外の大人と出会えていないっていうのがすごく大きいんですね。今日も先生から固定観念のお話がありましたけど、本当に世界が狭くて、親から聞いた社会しか自分はないんじゃないかって思ってる人が多いです。

ずっとアドバイザーとしてお話をしてる時によく思うのは、どれだけ無責任な大人に出会ったか、だと思っております。そんな大人が洲本には沢山いらっしゃるって…無責任っていうのは悪い意味ではないですよ。親として責任を持てるとかではなくて、その人に対して責任がない大人の軽く言った言葉が人生観を変えたりだとか、こんな生き方ができるんだとか、こんな方法があるんだっていう世界観を広げてもらえるんですね。私はここ数年で見させて頂いてる中で、本当に気軽に皆さんお話をして下さったり、この店美味しいから行きなみたいな感じで、そういった人間関係が作れるっていうのは洲本の良いところだなと思っていて。だから食べ物とかだけじゃなくて、人柄も含めそういったところに関わってって、本当に無責任な人の言葉ひとつで世界が広がったりだとか、コミュニケーションが取ればっていうのを大切にしています。

中川 | 僕も授業で80人ぐらいのクラスがあるんですが、手を挙げさせるんですよ。親の仕事を知ってる人って聞くと大体手が挙がるんですけど、仕事の細かい内容を聞いたことがあるかって聞くと3割ぐらいに落ちるんですね。子どもたちに自分の仕事を伝えたいかって大人に聞くと、男性なんか特に喋ってない。仕事は家に持ち帰らない、大人が仕事の話をしないうって悪しき習慣があって、もうひとつコロナで大人と喋る機会が更に少なくなって、友達同士でも深い会話をしなくなってきてるんだっていうのが結構あって、そういう機会をちゃんと作んなきゃいけないんだよっていうのが今の社会課題としてあるんだなって思ってる。洲本で大人と学生が顔を合わせている時に学生が必ず言うのは、こんな面白い大人が社会にいるのかとか、親しか知らなかったけどこんな人がいるんだって、感動したり未来に希望ができるって結構言うんですよ。それは非常に良いことだなって思っていて、淡路島は希望だらけだと、そんなこと思ったりもします。

さて残り時間が少なくなって参りました。ちょっとまとめの一言として、まずはコメンテーターのお二人からですね、総括ではないですが希望を含めたエールのようなものを頂きたいと思います。どちらから参りましょうか。

石山 | はい、あの指出さんのお話に触発されてちょっと考えていたんですけども、この間福岡県の糸島に行った時に…糸島って博多からの交通の便が便利なわりに、地元も



中川 悠 NPO 法人チュラキューブ代表理事

色々栄えていて移住者も増えてるんですけども、なぜ移住者が増えてるのかなと思ったらオルタナティブスクールが増えてるからっていうのが結構あって。やっぱりこう日本の学校教育がかなり窮屈なんで、糸島のオルタナティブスクールに子どもを入れたい、もっと自由に教育を受けさせたいということで移住されているんですね。従来の学校とは違う、もっと自由に探求させられるような仕組みを持った学校で、広い意味ではN高とかS高みたいなネット上の学校みたいなものも含まれるかと思うんですが、そうした時に、こんな感じで生きていこうよ、その為に学んで生きていこうよという国民運動みたいなのが起源にあって…クエストっていうのは、富田さんはドラゴンクエストじゃなくて探求だって仰ってるんですけど、ドラゴンクエストもある訳なので、洲本発の国民運動、冒険と遊びが実際あって、その無責任な大人が色々な価値観を触発させてくれるっていうことで日本に発信して、洲本発の国民運動になるぐらいを目指しても良いんじゃないかなということで、とりあえずの締め言葉にしたいと思います。

中川 | そうですね、洲本発の国民運動。さあ指出さん、いかがでしょうか。

指出 | はい、13時からこの時間までご一緒させて頂いて強く感じたのが、殆どが未来の話だったことです。古きを訪ねて新しきを知る、現時点を確認しながらちゃんと未来の話を洲本の皆さんがこうやってお集まりになって、登壇された皆様がお話しされているのがとても印象に残りました。

僕は常々、未来の話をとにかくしまししょうって言うんですけど。それで柔らかい未来をつくるレッスンをやってるんですけども、何で未来の話をするかというと、生後3ヶ月の赤ちゃんも未来の話だったら参加できるんですよね。誰も置いてけぼりにしないっていうのは未来の話をする時間だけなのかなって思うんですよ。なので今回の域学連携10周年のシンポジウムは、本当に皆さん今立っている場

所から未来をちゃんと考える時間に徹されているのが素晴らしいなって思いました。そういう未来づくりの一員に僅かながら入れて頂けて幸せでした。ありがとうございました。

中川 | ありがとうございました。残り時間が13分なんですけど、一旦ここで質疑応答の時間が取れたらと思います。ここまでの話を聞いた中で、直接先生にお聞きしたいことや、これからのクエストカレッジのことについて、挙手をした方からは是非、何人か受けることができたかなと思っ

ているところです。突然ですがいかがでしょうか。

質問者 A | 私は洲本市にリターンして設計事務所を生業としてやっている者です。今日の話で聞いてみたいことがあって、こういう域学の話とかクエストカレッジの話とかをどう広げていくか、どう伝えていくかみたいところで…個人的な感覚として小学校や中学生、高校生とか地元の子たちがもっと知っていった方が良いなと思っていて、地元で育った人間としてそういうことを知らずに外に出たので、そういうことを知って外に出るか、そうじゃないかというのは、この地で育つ子として大きいんじゃないかと思っています。その辺りの何かビジョンや考え、クエストカレッジももしかしたら高校生もやるかもしれない、みたいなことがあれば教えて頂ければと思います。

富田 | そこに関してはですね、僕自身の問題ですけども全く感度がなくて、よく分かってなかったというのがここ最近の話です。自分自身に子どもがいないのでそういうことかもしれないんですけど、最近S BRICKを運営するようになって、キッズベースっていう子どものスペースとかがあったりするんですね。その横でも色んなプロジェクトをやっているんですけど、その中で高校生との絡みがすごく増えるようになって、高校生とプロジェクトってこうやってやるんだっていうのは最近学び始めたっていうところで。社会の方が仕事しに来る、高校生が勉強しに来るみたいなスペースなんですけども、そこに高校生が来ていて、どうせ来てるんだったら高校生をもっと巻き込むようなことをやっていこうということで色々始めるようになってですね、イベントと一緒に入って手伝ってもらうとか、企画と一緒にやってみるとか、うちでバイトし始めたりと、色んな繋がりができるようになってきて、最近僕たちはそういうところで感度が上がり始めたなと思っています。

淡路島ゼロイチコンソーシアムの時も、高校生が大学に出て行くのかもしれないけれども、そういった時に憧れる都会の先の人たちがどんどん洲本に来て色々な活動をして悪戦苦闘している背中を見せれるように、そこで憧れを持ってもらえるようにっていうコンセプトがあって、そこから生まれたクエストカレッジでもあるので、高校生が直接そ

こに入って何かをするとか、高校生プログラムを作るのもひとつだと思いますし、大学生あるいは若い社会人が地元の冒険人材と一緒にわちゃわちゃやっているシーンを作ったらもっと面白い種を蒔けるのかなって思いました。

中川 | ゼロイチコンソーシアムって何ですか。

富田 | 市長からプレゼンテーションしてもらった中にもありましたけれども、ワーケーションという切り口で色んな企業さんに来てもらってですね…実はワークアカデミーさんもその枠組みで入ってもらっていたんですが、カレッジを立ち上げようということでコンソーシアムからは卒業して事業のパートナーとして今一緒に動いてもらってるんですけども、そういった企業さんがいっぱい来る場所になってます。そこを僕と洲本市さんと淡路信用金庫さんが一緒になって彼らの事業を支援したり、一緒にこんなことやってくださいよとお願いする、ゆるく繋がるようなプロジェクトですね。

中川 | 補足説明させてごめんなさい。という訳でこれから広がっていく可能性も徐々に続いていくという現状ですし、高校生からも広げて行こうっていう流れがあるということですね。残り数分ですがもう一方、いかがでしょうか。

質問者 B | 本日はありがとうございました。私は洲本市出身で15年振りぐらいに帰ってきて、ひよんなことから色々始めてるんですけども、皆さんこう地域を盛り上げる活動を色々な観点でされていると理解できたんですけど、なぜそれを始めたのか、地域に貢献しようと思って始めたのか、皆さんのワクワクの源泉みたいなのをもう少し聞きたいなと思って質問させていただきます。

富田 | えっとですね、僕自身はさっき指出さんに言われた通り、僕がワクワクしてるからやってるってのが一番です。少し昔の話になるんですけど、こっちに引っ越してきて13年で、関わりだしたのは2005年くらいなので18年ぐらい前から偶然こっちに来ることになって、当時は建築の仕事をやっていた古民家再生のプロジェクトに参加させて頂いたのがきっかけなんですけど、びっくりするぐらい冒険人みたいな人たちがいっぱいいたんですよ。そういう人たちがバチバチ喧嘩しながらやっている間に自分みたいな環境で20代前半、大学卒業間際ぐらいから数年を過ごしたっていう経験があってですね、その後は別に洲本に住もうとは思っていないくて、キラキラした東京に行きますみたいな感じで企業に働きに行っただけなんですけど、その人たちってその後もすごい冒険し続けていて、僕は僕で冒険していたと思うんだけど定期的な交流があってですね、たまにこう洲本の人たちの冒険に僕も関わるみたいなことが東京に行ってからまた続いていて。30歳になって独立しようと思った時に、東京の方が仲間も多かったしどうし

ようと思ったけど、冒険している人たちが沢山いるところで冒険したいっていう思いが強くなって、色んなそういきっかけを頂いて引っ越してきたのが13年前で。僕は皆さんが作ったフィールドの上にちょこっと乗って少しずつ芽を育ててシマトワークスになったっていう感じです。

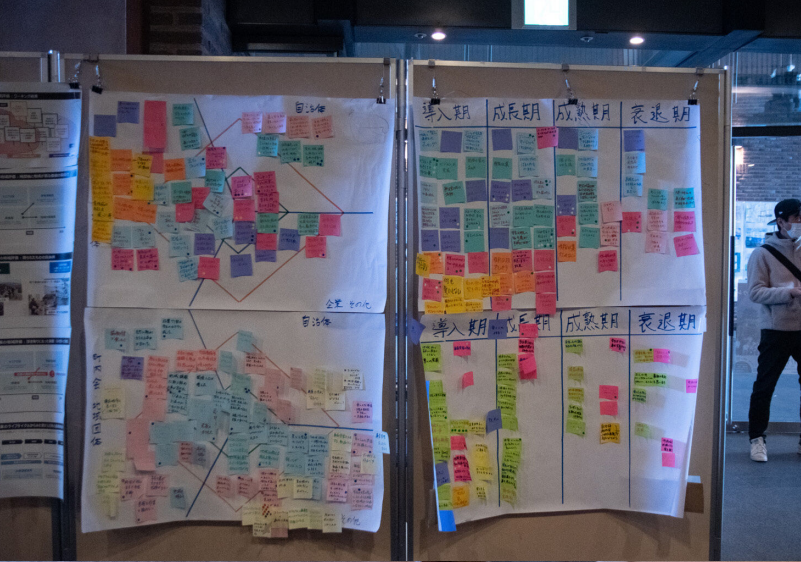
じゃあ今僕たちは次の10年を考えた時にどうするべきかって考えた時に、今その洲本に来る若い学生が僕が学生だった時みたいに…野田さんがそんな話されてましたけど、洲本に来た時に冒険しまくっている、大人が地域でわちゃわちゃやってる意味も30歳になるまで分かんなかったけど、いつか自分も影響されていて僕らもそうでありたいって思うし、そういうフィールドを作りたい人と、また若い人が10年後に戻ってきてですね、仕事しようぜってなった時には僕は50歳超えてるかもしれないんですけど、俺もっと冒険してるんでっていうぐらい張り合っていきたいみたいな、そういう場所で生きていきたい、ワクワクしたいからっていう、それが全てかなって思います。

中川 | ありがとうございます。時間になってしまいました。改めて皆さん、長時間にわたりお付き合い頂きありがとうございました。10年間を振り返って、次のシンポジウムが例えば5年後、10年後になった時にきっとまた新たな世代交代が生まれてるかもしれないし、長続きしたんだねこの取り組みはっていうものも生まれてるかもしれないと思いました。洲本には市長が言うように資源が多い、美味しいものもあるし面白いものもあるし、まだまだ続いていくと思います。今回クエストカレッジの話が最終的にありましたが、関わってみたいっていう方は是非とも手を挙げて頂いて一緒にやりたいなと思います。地域の方々も学生さんも来て頂きたいし、友達にも言ってもらって…この広がりを受け入れられるだけのキャパシティがこの町にはあると思いますし、可能性があると思っています。

白石先生、野田先生、小林さんにも改めて登壇して頂いて、

拍手で締め括りたいと思います。本当に4時間、色んなお話がありました。改めて大きな拍手をお願いします。これをもちまして洲本市域学連携事業10周年記念シンポジウムを終わりたいと思います。ありがとうございました。





中川 | 改めて本日はご参加下さいましてありがとうございました。本編を終了したところですが、ここで地域や大学の皆様からサプライズプレゼントがあるそうです。もう少しお付き合い頂けますか…それでは早速ですね、洲本市域学連携事業サプライズプロジェクトの皆さんから、市への感謝の気持ちを伝えたいということで、私の方から読み上げさせていただきます。

Surprise Speech

拝啓 洲本市の皆様、この度は洲本市域学連携事業 10 周年、誠にありがとうございます。洲本市長をはじめ職員の皆様のご尽力により、この素晴らしい事業が 10 年継続されたことを私どもは誇りに思い、感謝致します。この誠実な積み重ねが更に継続、進化して、他の地域の模範となり、更に洲本市が発展していくことを切に願います。

会場の皆様には是非知って頂きたいことがあります。それは、とある人物がこの事業に 10 年間携わり続けて、時に架け橋として様々なご縁を結び、時に縁の下の力持ちとして支え続けてきたという事実です。その根拠となる論文「大学地域連携の発展プロセスと課題解決のアプローチ法」をご紹介します。

洲本市域学連携の成功の秘訣、キーパーソンの要素は以下：

- 1 つ、地域へのコミットメントと継続力
- 1 つ、地域の方々と対等に議論しプロジェクトに巻き込んでいく交渉力
- 1 つ、学生や職員、地域外の関係者の方との深い関係を築くコミュニケーション能力
- 1 つ、地域の活動に濃淡を付ける決断力

私たちはこの人物と一緒に現場で汗を流して苦楽を共にしてこの 10 年間歩んできたと思っています。是非この場を借りて、彼を洲本市域学連携事業の功労者として労わりたいと思います。

洲本市役所企画課の高橋壺さん、壇上にお上がり下さい。

Award Ceremony

小森（大森谷） | 高橋壺殿、貴殿は洲本市域学連携事業を成功に導き、本事業の発展に大きく貢献されました。これはひとえに貴殿のたゆまぬ努力の賜物であり、他の模範とするところであります。ここにその栄誉を称え表彰すると共に、今後のご活躍を期待します。

令和 5 年 11 月 19 日

洲本市域学連携サプライズ事業有志一同

Bouquet Presentation

桜井（龍谷大） | 高橋さん、10 年間本当にありがとうございます



高橋壺 洲本市役所企画課

ございました。この花束は今日会場にいらっしゃる方々と、残念ながら来られなかった方々と気持ちを込めて、全員から高橋さんにありがとうという気持ちを伝えたいと思います。またこれからも、ワクワクする道のりを一緒に歩いていきましょう。

Speech by Meritorious Person : Hajime TAKAHASHI

高橋 | すいません、洲本市役所の高橋です。ずっと今日は裏方やったんで、次の片付けのことを心配しとったんですけど、まさか…本当に知らなくて驚いてます。

えっと、まあ 10 年間長かったなと。桜井さんもずっと 10 年間やってきた仲間ではあるんですが、あの本当によくやってくれたなって言うアレですけど、ただまあそんなにこう、大きな苦労もなくやってこれたのかなって風には思っています。大変なこともあったかもしれませんが、何か基本的には楽しくおもしろくやってきたのかなと。それをずっとモットーにしてきて、バンカランカとかいうふざけたホームページを作ったりもしましたけど、まあ面白いことが大事だし、それによって続いていくのかなと思います。ただその面白さっていうのは人それぞれあって、自分が面白かったら良いのか、他人が面白かったら良いのか、ただ自分以外の人が楽しくなったり面白くなったりするっていうのが自分にとっての喜びに繋がったなって、そんなことは思ってた。誰かが喜ぶようなことをすることで自分がおもしろくなりたいし、おもしろくなってきた。そういう 10 年間だったなって風に、振り返ってみたら思いました。

今回は 10 年間の節目ということではあったんですが、またこれから今後 10 年、いや 10 年と言わず何年も続けていければなと思っていますし…これは人事異動のこともありますんで後は市長さんにお決めになると（笑）。たまたま 10 年間ずっとやらせて頂いてるっていうのは、僕は変わりたいとは 1 回も思ったことなくでですね、ずっと楽

しくやらせて頂いてるっていうところで。いつかは異動っていうこともあるんでしょうけど、ただ今日もクエストカレッジの話もありましたが、要は域学連携が継続する仕組みや仕掛けみたいなものも生まれつつあるというところですので、今後もずっと皆で楽しく継続させていければという風に思ってます。

後はあの、今日は沢山の方にご参加頂きましてありがとうございます。本当にずっと心配してました、何人来るんかなって。おっきな会場やったんですけど、最後まで皆さん沢山残って頂いたことに本当に感謝申し上げますし、それで素敵な基調講演とパネルディスカッション、特にパネルディスカッションはとにかく私しっかりやりたいなっていう風にずっと先生方をお願いしていたんで、非常に熱の入った議論になったのかなと思っています。個人的には大成功のシンポジウムだったかなという風に思っています。また今後の10年、この事業でどんどん盛り上がっていきなっていると思いますので。中川さんもありがとうございました。今日は司会兼コーディネーターっていう重役を担って頂いて、こんな全く知らなかったんで、ほんまにちょっとびっくりしてるんですけど、本当に楽しい会になりました。皆さん今後とも応援よろしくお願い致します。ありがとうございました。



10/18

(水)

第一夜

19:00-20:30@Zoom

近畿大学 大阪工業大学
大和大学 株式会社 E-konzal

10/23

(月)

第二夜

19:00-20:30@Zoom

株式会社大同印刷所 コニカミノルタ株式会社
レガサルト株式会社 AKKODiSコンサルティング株式会社

10/31

(火)

第三夜

19:00-20:30@Zoom

京都大学S³ 株式会社ワークアカデミー
流通科学大《しずく》 株式会社ODKソリューションズ

コメンテーター 中川悠 (NPO 法人チュラキューブ) 辻郁子 (ふるさと応援コーディネーター) 高橋竜 (洲本市役所)
モデレーター 野田満 (さんそデザイン/近畿大学)

兵庫県洲本市を舞台に進められている、地域内外の協働に基づく地域づくり(域学連携事業)。これまでに多くの大学や企業が関係人口として洲本市に関わり、様々な取り組みを積み重ねてきました。本座談会では全12の大学や企業の関係者を招き、それぞれの取り組みの具体的内容やその成果と課題、地域との関わり方やこれからの展望、及び自己批評を交えた議論等を通して、様々な立ち位置からみた、関係人口を伴う地域づくりの要点に迫ります。

参加申込方法

Click!
[参加申込用フォーム](#) または右記 QR コードよりアクセス下さい。

参加申込用 QR コード



関係人口としての大学・企業の座談会
地域づくりに関わる
ヨソモノたち

無料配信

この座談会は、11/19(日)に洲本市文化体育館文化ホールで開催される【洲本市域学連携10周年シンポジウム:冒険(クエスト)し続ける地域と人のつくりかた】内のPD「域学連携事業10年の批評と今後10年を見据えた提言」の為に、公開ミーティングを兼ねたイベントです。シンポジウムの詳細は裏面をご覧ください。

2023/10/18 (Wed) 19:00-20:30 @ ONLINE

第一夜

Panelist
 近畿大学
 大阪工業大学
 大和大学
 株式会社 E-konzal

Commentator
 NPO 法人チュラキューブ 中川悠
 ふるさと応援コーディネーター 辻郁子
 洲本市役所 高橋杏

Moderator
 さんそデザイン／近畿大学 野田満

Introduction

野田 | 皆様、本日はお忙しい中お集まり頂きありがとうございます。これから「関係人口としての大学・企業の座談会：地域づくりに関わるヨソモノたち」の第1回ということで公開ミーティングを始めさせていただきます。モデレーターの野田満です。よろしくお願い致します。

これからパネリストの方々に洲本市での取り組みについて発表頂き、その後に休憩を挟んでディスカッションを行います。ここで聴講者の皆様からの質問やコメント等についても取り上げさせていただきますと思っています。そして最後に、今回コメンテーターとしてご出席頂いている NPO 法人チュラキューブの中川さん、ふるさと応援コーディネーターの辻さん、洲本市役所の高橋さんに一言頂くという流れで 20:30 に閉会の予定です。注意事項というほどのものでもないんですが、スライドにてアナウンスしておりますので適宜ご確認ください。それでは早速、主旨説明も兼ねて私の方からお話をさせていただきます。

Presentation 1-1 近畿大学

野田 | 改めて、よろしくお願い致します。モデレーターなのにプレゼンするのかという話ではあるんですが、近畿大学の教員として、うちのラボの取り組みについてお話しさせていただきます。僕は元々建築学科の出身なのですが、今は総合社会学部というセクションに在籍していて、農村計画とか地域デザインとか、その辺りを専門としています。ラボには大体 20 人ぐらいの学生がいて、大学内外で色々な活動をしているという感じです。

先程申し上げた通り今は大学の先生なんですが、僕は学生時代から洲本市にはお世話になっていて…淡路島は僕の地元でもあるのですが、大学院の時にご縁を頂き洲本市の地域づくりに関わり始めて、その延長上として、例えば地域

おこしマイスターという協力隊のような立場や兵庫県の地域再生アドバイザー等々を歴任兼任しつつ、現在は近畿大学のラボ主宰として、学生も交えながら継続的に取り組みを続けさせて頂いているという感じです。

さて早速、最初のプロジェクトをご紹介したいと思います。竹原（たけはら）という洲本市街地の南側、山奥の袋小路にある小さな集落で、学生たちと一緒にトレイルコースの整備と活用を進めています。

かつて炭焼きの為に使われていた山林道に新たなアクティビティを埋め込むということで、具体的には看板を作ったり、山の中で焚き火を使ったアウトドア料理なんかを…これは次のイベントの仕込みと言いますか、プレ実験なのですが、他にはハチトラップの設置や足場の補修等、来訪者が安全にトレイルを楽しんで頂けるような整備に取り組んでいます。これは木を間伐しているところですね。これをベンチにしたり階段をしつらえたりします。うちの学生も恐る恐る、頑張ってチェーンソーを使っていますね。一緒に山仕事の体験や練習をさせて頂いているというようなイメージで、自然の厳しさや難しさにも学びながら試行錯誤を繰り返しています（Slide1A）。今月にはトレイルを通して焚き火料理や地形の 3D スキャンを楽しむという、ハイテクとローテクの合わせ技のようなイベントを実施しますので、興味のある方は是非ご参加下さい。

発表時間が限られており早足で申し訳ないんですが、続いて鮎原の宇谷（うだに）という集落でお手伝いをさせて頂いている取り組みについて紹介します。現在進行形のプロジェクトもあるのですが今回は昨年度の「宇谷移住＆むらづくり読本」制作についてお話しします。移住者の為のテキストづくりですね。これは京都なんかで「集落の教科書」として既に事例があり、それをモデルに宇谷オリジナルの教科書を作ろうということで発足したプロジェクトです（Slide1B）。

まずこのグラフですが、これは移住検討者にとっての障壁



淡路島ロングトレイル構想

鮎原宇谷地区移住＆むらづくり読本

#移住＝単なる引越しではない
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ

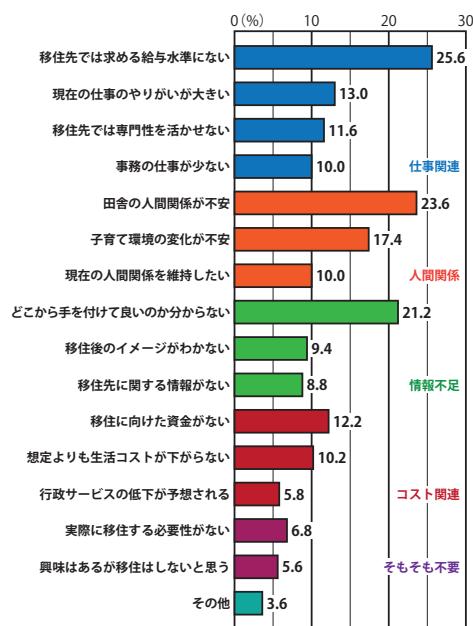


図 地域への移住を妨げる要因 ※引用文献より加算修正

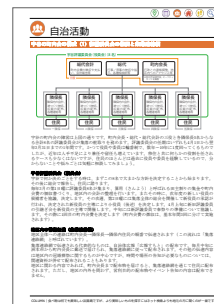


図 兵庫県洲本市宇谷地区移住＆むらづくり読本 (近畿大学野田満研究室 | 2022)

可逆的／動的な計画づくりの為に | 2022年に野田研究室で制作。公的情報では得られない当該地区の諸情報（いわゆるローカルルール）をあらかじめ移住検討者に伝えておく為のメディア。モデルとなった「集落の教科書」は京都府等で幾つかの制作事例があるが、本書のオリジナル要素として「移住関連のみならずむらづくり全般の情報を掲載」した上で、地元自らで能動的に更新し続けられるよう「製本ではなくバインダー綴じ」の永遠のβ版仕様としている。

引用 | 一般社団法人移住・交流推進機構：「若者の移住」調査結果レポート、2018.03

近畿大学農村計画・地域デザイン研究室

関係人口としての大学・企業の座談会：地域づくりに関わるヨソモノたち Mitsuru NODA

を取りまとめたものです。これによると移住を妨げる大きな要因のひとつは「情報不足」です。移住者と地元とのトラブルの原因は、有り体に言えばその多くが「そんなことは知らなかった／聞いていない」に起因しています。例えば自治会費を「いつ」「何回に分けて」「何円」「誰に」「どうやって」払えば良いか、いわゆるローカルルールのようなものを含めて、集落の良いところも悪いところも全てマニュアルとして共有、公開しようと取り組みです。学生が足繁く集落に通わせて頂いて、地元の方に色んなお話を聞いたり、現地調査をしたりしながら情報を整理していきました。

「読本」の中身についても少しご紹介します。宇谷が淡路島のどこにあるのかという基本的な話はもとより、近くにある商店や病院、公共施設やライフライン、ゴミ分別、各月の行事等々についてページごとにまとめていますが、空白を無理に埋めるようなことはしていません。新しい行事や取り組みが出てきたらその都度埋めていく、地元の方で更新し続けていくことを意図しています。

自治会の組織図や役員の仕事等についても掲載していますが、別にこれまで秘密だったという訳ではなく、実際は移住した際に地元の方から口頭では教わるものだと思います

が、ミスリードの無いようにきちんと図化、言語化しておくということを重視しています。記載している内容には自治体ホームページに載っている情報も含まれますが、宇谷に移住する上で必要な情報を一元化することが重要です。地域の歴史や伝統、例えば宇谷には5つの神様が祀られているのですが、その場所や略歴等についてもまとめています。移住は単なる引越しではなく地域の風土を知り、地域づくりの担い手になることが大事なので、こうした情報も不可欠です。一方で宇谷は地元の方が非常にパワフルで、積極的に地域づくりを進めている地域なのですが、そうした活動の履歴や地元の方へのインタビュー記事なんか「読本」には記載しています。モデルとなった集落の教科書にはない宇谷オリジナルの要素ですね。あとは巻末に方言集なんか掲載しています。

最後に…ここが一番重要なのですが、「読本」は製本印刷ではなくバインダー形式で制作しました。各ページの内容やテンプレートは自由にダウンロード可能な仕様にして、適宜リライトしたり新しいページを作ることができます。作って出来上がって満足するのではなく、これからの地域づくりと連動させて、どんどんページを更新して、差し替えて、それを我々もサポートして…永遠に完成しないサグ

ラダ・ファミリアのようなプロダクトであることを強調したいが為のかたちですね。

以上で一旦、近畿大学としてのプレゼンは終わりにしますが、今回の主旨について改めて簡単に触れておきたいと思っています。今日は大学の取り組みが中心になるのですが、大学にしる企業にしる、こういった形で地域に関わっているのか、或いは関わるべきなのか…単一の正解はないというところがポイントなのだと思います。反対に地域の側もどのくらいのスパンでどんな成果を求めているのか、互いの需要のマッチングが切り口のひとつかなという風に思います。直接的に何を作ったか、何を残したかは大事ですが、間接的であれ関係を築き続けることや、その先にある「関係人口を取り込みながら積極的に地域づくりを進めている地域」としての対外的なブランディングも重要なかもしれません。この辺り、全3回のディスカッションに向けた論点ということで、僕なりの問題意識として留めておきたいと思っています。

駆け足の発表になってしまいましたが、簡単なイントロダクションも兼ねた活動報告ということで以上とさせていただきます。ありがとうございました。

Presentation 1-2 大阪工業大学

藤本 | 大阪工業大学研究支援社会連携推進課の藤本と申します。まず私の方から本学の説明をさせて頂き、その後に工学部建築学科の藤井先生ならびに学生から域学連携事業の取り組みについて紹介させて頂きたいと思っています。本学は常翔学園の初代校長・片岡安による「世のため人のため地域のために実践的技術を持つ現場で活躍できる専門職業人を育成する」という理念の下に創設されました。枚方、大宮、梅田にキャンパスがあり、学部・大学院含め8,200名程度の学生が在籍しております。

地域との連携に関しては、永続的に地域の発展に貢献する形で大学を運営していきたいという思いから地元自治体や組織等との包括連携協定を締結しております。今年度から洲本市でも取り組みをさせて頂いているところですが、最初は我々の方から洲本市の企画課様にメールを差し上げて、交流拠点施設となる「よりまち荘」をご紹介頂き、そこから実際にリノベーションが始まりました。ここからは本学の学生にバトンタッチしまして、内容をご説明させて頂きます。

藤井 | 画面共有してもらってる間に自己紹介します。私は大阪工業大学建築学科教員の藤井と申します。建築設計を教えておりまして、学生は大学院生2年が3人で1年生が3人、学部4年生が10人、洲本市のプロジェクトは全

員で取り組んでいます。今から大学院生が説明させて頂きます。

屋 | それでは藤井研究室修士2年の屋が発表させて頂きます。この度は5月から8月の計4ヶ月でプロジェクトに携わらせて頂いたんですけど、建築を設計するにあたってはまちや風土を知らないといけないということで、最初は洲本市を深く理解することから始めました。具体的には中心街にある図書館を訪れたり、過去に域学連携を通して大学生がリノベーションを行った「ついではん」を見学したりしながら想像を固めた上で、よりまち荘の詳細部分の寸法の実測等を通して知識を蓄えていきました。

藤井研究室のメンバーで設計するにあたり、まず6月にA・B・Cの3チームに分かれて提案を行いました。チームAは離れに着目し、離れを開いた形で改修していくことで地域住民の拠り所となるような場所を構想しました。布製の屋根をかけることでまちのアイコンとなることを目指しています。チームBは素材の循環に着目して、ブロック塀を解体することでまちに対して開きつつ、その廃材をベンチに活用することで古いもので新しい空間を作る、かつ低コストでプランを実現するという事を考えました。チームCは和食に着目して、既存のキッチンオープンキッチンとし、土間を設けて地域住民がそこを通して入ってくるような空間を目指しています。

これら3つの提案の良いところ取りをして最終提案としました（Slide1C）。離れの改修、キッチンの修繕、そしてその間に縁側を挿入することで両者の関係性を繋ぎ、循環させるようなプランニングとしています。建築だけでなくキッチンシンクのような家具スケールの提案も行い、地域の方への発表会や意見交換を踏まえて着工に入っていました。

次に作業工程についてお話しさせて頂きます。スライドにも作業風景を載せていますが、ジャカゴ等に活用できるようにできるだけ廃材が大きくなるように解体しています。

洲本市地域交流拠点施設リノベーション事業

2) 完成イメージ

・最終提案

大阪工業大学
藤井研究室



5月

6月

7月

8月

離れの床も一度剥がして断熱材を入れています。床の仕上げは廃材の断面形状を活かして魅力的なものにしました。更にキッチンの修繕、縁側の制作等を進めた写真がこちらです。この後は地元の大工さんがガラスの貼り付け等を行い完成する予定です（Slide1D）。今年度の工事では離れとキッチン周りの施工を行いました、引き続き 2024 年、2025 年で他の部分のリノベーションを進めていこうと考えています。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

Presentation 1-3 大和大学

永井 | 永井と佐々木教授の方で発表させていただきます。私は 3 回生で、学部内で学生プロジェクトを立ち上げて活動しております。後ほどご紹介させていただきますが、今回そのプロジェクトを通じて洲本市さんとの連携を始めさせて頂きました。社会学部は設立 3 年目の歴史の浅い学部で、私は 1 期生になります。域学連携事業には 2022 年 4 月から取り組んでおり、主な活動は「レトロなまち歩き」への参加、SDGs 研究推進室ラーメンプロジェクト、米山（こめやま）地区での活動になります。本学の得能教授は元々洲本高校

に勤めていた先生なのですが、私も祖父が洲本市の出身で、洲本は縁のある土地です。

レトロなまち歩きには 2022 年 5 月に学生や教員が参加しました。それまで洲本の東海岸側に行くことがなかったこともあり、レトロな街並みに感動し、洲本市の魅力に惹き付けられました。

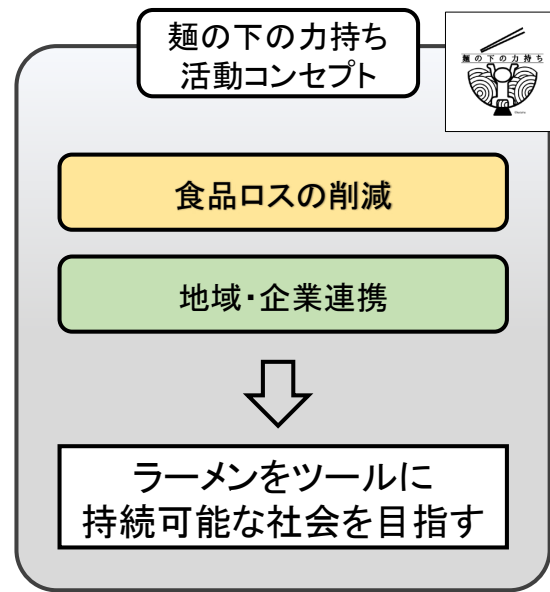
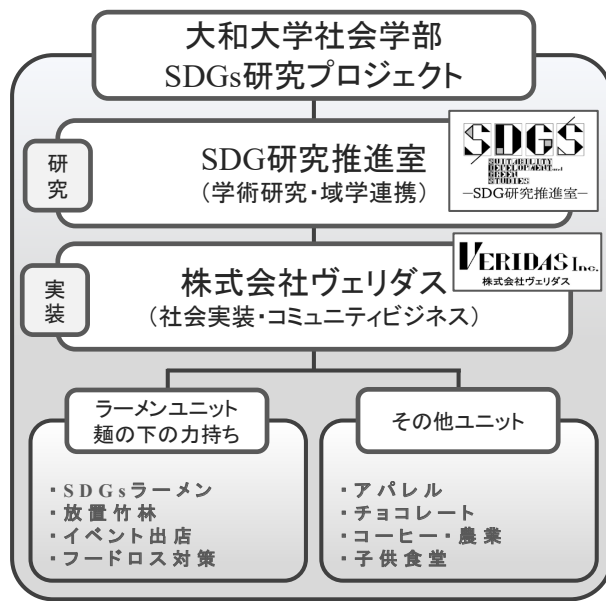
学生団体「麺の下の力持ち」については、本学の SDGs 研究プロジェクト…SDGs 研究推進室及び学生ベンチャーの株式会社ヴェリダスによるコミュニティビジネスの一環として、ラーメンユニットとしての活動を進めています（Slide1E）。食品ロスの削減や地域連携を目的に、ラーメンをツールにして持続可能な社会を目指しています。具体的な取り組みとして、米山地区の淡路島ソーラーファームさんという農家さんと連携をしまして、本来なら商品にならない為に廃棄されている傷物や規格外のタマネギやニンジン、キャベツ等の野菜をラーメンのスープやトッピングに使用しております。淡路島ソーラーファームさんとは SDGs 連携協定を締結しまして、持続可能な社会へ向けての取り組みとして地産地消や旬産旬消をキーワードに取り組みを進めております。学生がプライベートで淡路島に訪れた際にもご訪問させて頂く等、定期的な交流の架け橋に

洲本市地域交流拠点施設リノベーション事業

3) 作業工程&作業写真



学生団体「麺の下の力持ち」とは



1E

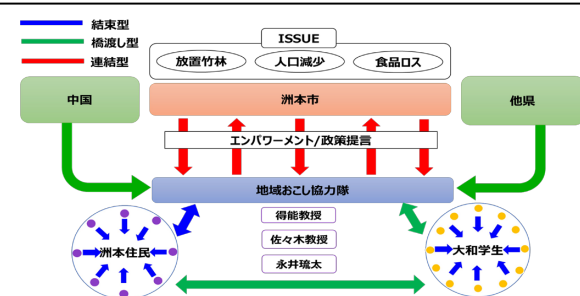
なりました。

もう1つが放置竹林対策の取り組みということで、地域おこし協力隊の小林さん、葛さんと一緒に千草地区で竹林整備を実施しております。少子高齢化で竹林整備の担い手が不足している状況に対し、地域おこし協力隊と学生と一緒に竹林の有効活用を考え、様々な企画をしております。メンマの製造や竹林を使ったサウナ等、これから様々な企画を実施していこうと考えております。

また今年度の日本計画行政学会で、本学学生の中川が域学連携事業について報告しました（Slide1F）。これから更に卒論論文に向けて調査を進めていく次第であります、社会関係資本のモデルにこの竹林プロジェクトが当てはまるのではないかということで、研究を進めています。

佐々木 | 引き継ぎまして佐々木正明と申します。社会学部の教授で、ジャーナリストとの二足の草鞋をしております。米山地区でローカルジャーナリズムという観点から事業を行っています。先程にもお話のありました米山地区でソーラーシェアリング事業を行う淡路島ソーラーファームの岡本さんのところで学生の玉ねぎ掘りを実施したところ、若者の労働力の必要性はもとより参加した学生からは楽しさややりがい、学びについての声が多く挙げられました。ここに多くの可能性を感じております。今後市が拡充すべき取り組みとして、アグリツーリズム、ソーラーシェアリング、週末ボランティア等が考えられるのではと思います。その上で、あえて課題を3点お伝えしたいと思います。1つは大都市圏の若者へのアピールです。今淡路島がブームだという声もありますが、実際に若者は殆ど行ったことが

日本計画行政学会での報告(中川2023より)



1F

ない。特に高校生から大学生にかけて、こうした事業を通じて淡路島に触れさせることは大事だと感じました。もう1つはリーズナブルな長期滞在施設の拡充です。これがあれば淡路島への長期滞在や定期的な来訪が可能です。最後は島内アクセスの悪さを補う工夫と新たな人材活用です。島内の移動はかなり難しいです。例えば地元の高齢者が車を出してあげる等の人材活用ができればと思います。やはり大都市圏の大学生は淡路島にとって宝の山です。多くの学生が来れるような新たなアイデアやシステムがあれば事業の更なる効果が望めるのではと思います。

Presentation 1-4 株式会社 E-konzal

榎原 | E-konzalの榎原と申します。よろしくお願いします。私は大阪の江坂というところで生まれて、江坂でずっと育ってきました。今は環境とかエネルギーのコンサルティングの仕事してるんですけど、十数年前に再生可能エネルギー塾というところに高橋さんと出会いました。再生可能

エネルギーを活用したまちづくりみたいなのができないかということで、先程のプレゼンにもありました千草竹原地区に入ったのが1つのきっかけで、龍谷大学さんが最初に域学連携事業で入られてから関わり始めたという状況です。それを発展させて地域のエネルギー会社を作ってますね、収益をまちづくりに活かすっていう取り組みをやるうとしたんですけどもあまりうまくいなくて、今は大阪の能勢町と豊能町で会社を作って、エネルギーを地域外に輸出したお金で高校生の通学支援や活動支援を行う事業を進めています。

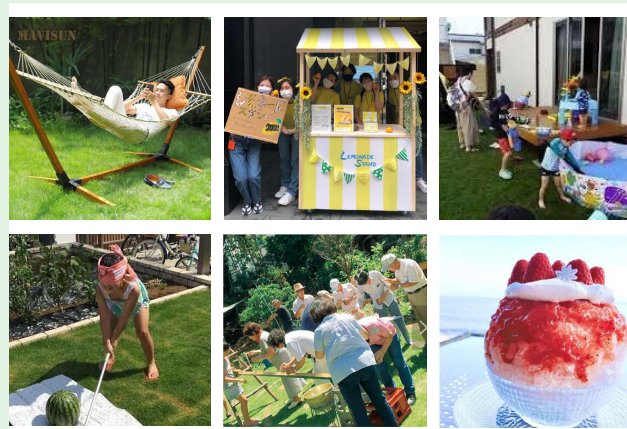
里山地域にも関わってるんですけど、皆様ご承知の通り高齢化による人手の不足や森林の放棄が進んで獣害が深刻化し、田畑にシカやイノシシが入ってくるという状況が続いています。一方で街中では子どもたちがちょっと走っても注意なくちゃいけないとか、マンションで音が出せないとか、公園でボール遊びもできないので、何かここをうまく繋げることで相乗効果が現れるんじゃないかっていうのを最初の仮説として持っていました。実際に連れて行ってみた写真が…これはうちの子どもたちなんですけど非常に楽しそうで（Slide1G）、やっぱりここ良いな、こういうことやりたいなという風に思った時に、ある田植えイベントがあったんですね。それで息子の友人たちの家族に色々声をかけた時に、皆こういうの行きたかったっていう風に言うんですけど、自分たちで里山のイベントを探して行くかということちょっと…という感じで行きにくいみたいな話があって、なるほどそういうものかと。その障壁を取れないかなというのが今 E-konzal で行っている「ひととき（人と樹）」です。

事業のコンセプトとして、都会と田舎で良いところ取りができないかと思ってまして、具体的には里山地域ではなく江坂に体験型の施設を作ることによって、里山の人たちの顔が見える環境を作ってから関係人口を増やしていこうという取り組みです。場所は坂江駅から徒歩7分にある倉庫

跡地です。元々はうちの親が貸していた土地なんですけど、そこが空いて…近くにスイミングスクールや小学校があって飲食店とかには向いてない敷地なのですが、親にですね、もう人口は減っていくからマンションなんか建てるなよ、お金儲けの為に目が眩むようなことするなよと言われて、じゃあ何か面白いことやろうかとなったのがきっかけです。

イメージはこういう感じです（Slide1H）。里山地域では当たり前のことなんですけど、例えばプールを出すとか、流しそうめんやスイカ割りをやるとか、ハンモックで寝るとか…街中ではなかなかできません。うちの息子も手持ち花火を数回しかやったことがなくて、ちょっと問題だなと思っていました。冬は芋を焼いたり薪を割ったりして、街の生活の中で自然に触れて仲間と繋がる空間を作っている段階です。施設内にはオープンルームやクリエイティブルーム、木工スペースや畑があって、火で遊べるような空間があって。森林組合から直接調達した広葉樹を使った建築になる予定です（Slide1I）。

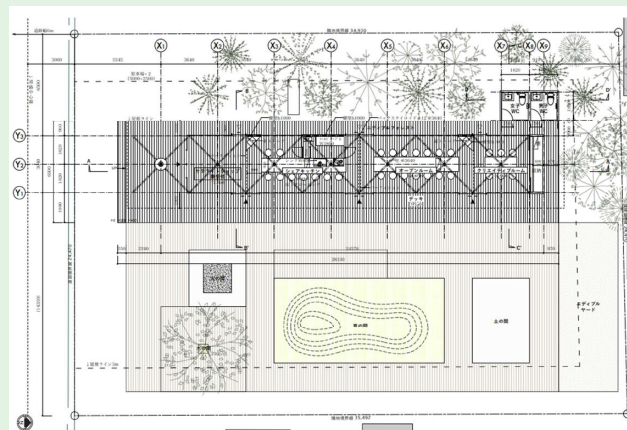
せっかくなので色々な方を巻き込みたいと思っておりまして、再来週の日曜日に地域の人と一緒に芝生を植えるというアクティビティを、第二弾は小屋をつくったりしてスペースを完成させるというようなスタートアップイベントを開催します。また淡路島でもこういったことをやりたい



1H



1G



1I

なということで大和大学さんをご相談して話を進めているところですよ。

我々は必ずしも淡路島だけで活動しているという訳でもないんですが、里山との連携の事例として少しお話させて頂きました。ありがとうございます。

Discussion

野田 | パネリストの皆様ありがとうございました。まずは僕の方から口火を切る形で、パネリストの方々に対してご質問させていただきます。一問一答が3回続くこととなりますが、その後は流れに任せて自由にディスカッションできればというところです。併せて、聴講者の皆様からの質問やコメント等は都度チャット欄に打ち込んで頂ければ適宜拾っていきますね。終了時刻が来た時点でコメント含めて一旦は締め括りたいと思っはいるのですが、その後の延長戦と言いますか、アフタートークを含めてお付き合い頂ければと思います。

まずですね、大阪工業大学さんのリノベーションの取り組みについて…感想を含めてですけど、チームABCでコンペ型式で進めるのはとても良いなと思いました。例えばBチームはマテリアルフローというかコンセプトチュアルな構想があった中で、Cチームはプログラム重視、最終的には折衷案ということでした。一方でこの座談会の主旨である「大学と地域」の関係ですが、これは研究と実践ということでもあるし、理想と現実、日常と非日常等、色々な対比構造で描かれるのではと思っていて、つまり構想の豊かさと現場の難しさとの対比であったり、どういったプロセスで折衷案に着地していったのかということや…藤井先生にお聞きする問いなのか、学生さんに答えて頂くべきか分からないのですが、コメント頂きたいと思います。どうでしょうか。

藤井 | 折衷案にしようというのは私の方から言ったんですけども、屋君何かありますか。院生の回答を聞きたいなと。

屋 | そうですね…折衷案にする上で意識したこと、でしょうか。

野田 | アンビルドでないものをデザインするにあたり、やっぱり捨てるを得なかった要素とかもあると思うんですけど、その辺り、ちょっと簡潔にコメント頂けると。

屋 | 捨ててきたことは勿論あるんですけど、例えばAチームの布の大きな屋根とか、僕たちのには形として魅力的だなと思ったんですけど、実際に建築を建てるにあたってコストや施工方法の関係でやはり難しいっていうところがあって。そうなった時に何でもそうだと思うんですけど、徐々に現実可能なレベルで魅力的なものを作っていく…今

回もそういった意味で、例えば最後の提案のパーソナルな部分にはなるんですけど、キッチンをまちに開くっていう提案で、ただそれだけじゃなくて、まちに対して開く為の開口部がパカッと上に開いてそれが大きな屋根になるように作っていたり、リアルで建つから普通のデザインで終わるとかじゃなくて、できる限りデザインも魅力的なものを目指しつつ、でも実際に使う人が幸せになるようなラインを責めていかないといけないという感じで、学生同士で話し合った上で最終的な提案になりました。

野田 | 藤井先生からはいかがですか。

藤井 | 補足的に言いますと…「使う人が最終的に幸せに」っていうのもあるんですけど、学校の課題とは違うのはお施主さん、所有者さんの意向がやっぱり強いところもあって、それも踏まえた上で最終的に、使う人はどういう風に利用するんだろうっていうのを想像しながら、学生たちが初めてあいつたプロジェクトを通して、勉強しながら進めていったっていうのもあるのかなと思います。

野田 | B4・M1・M2という布陣の中で、卒業設計や修士設計を経験しているかどうかでその辺りのマインドも変わってくるのかなと思いました。また引き続きお話を聞かせて頂ければと思います。ありがとうございます。

続いて大和大学さんについてはですね、これもちょっと先生か学生さんか、どちらに答えて頂くかという話ですが…リーズナブルな長期滞在施設の拡充とか、ある意味域学連携インフラみたいなものの必要性については確かにそうだなと思いながら聞いていました。結構な投資が必要な部分でもありますね。こうした連携の為のインフラについて、そこまでコストが掛からないものや、ハードもソフトも含めてなんですけど、活動に取り組んでいて必要だと思ったものやアイデア等は他にもあったりするんですか。

佐々木 | 永井君、行きますか。

永井 | そうですね、学生がこう実際に淡路島に入らる中で一番必要であると思ったのがやっぱり移動手段です。例えば地域の方々の車に乗り合わせて行くようなことができたり、まあ最近都会ではよくあるコミュニティバスであったりとか…逆にその若者が病院に一緒におじいちゃんおばあちゃんを送るようなシステムを取り入れてる自治体も実際にありますので、淡路島でも例えば土日限定でそういうシステムを取り入れると学生も来やすくなるのではないかなという風には思いました。

野田 | 佐々木先生からはいかがでしょうか。

佐々木 | これは実体験なんですけども、淡路島の施設って点在してるんですね。高橋さんのご厚意で車を出して頂いたこともありまして。永井くんは車を持っているので車で行っても勿論良いんですけども、何かここで地元の力を活

用できないかなとも思っています。米山地区の近くに高橋さんの元同僚さんがやってらっしゃるお安い宿があって、そこだと学生も多分4〜5泊はできるんですね。ですが予約がいっぱいで取りにくい状況です。

農家の方々は純粋な労働力として若者の力を必要としていると感じますし、私も大学で学生には現場でのリアルな体験の重要性を常々話していますが、学生は自分では行きません。永井君がいるのでちょっと言いにくいんですけども…目的意識を失っている子たちが非常に多いです。例えば建築学や医学等の理系では学びながらやりたいことを見つけていこうという意欲のある学生が多いです。淡路島のポテンシャルの高さは全国のモデルケースになり得ると実感しています。先導する人と地域、そしてリーズナブルさが合わさると、Xの2乗3乗という風に大きな効果が出てくるのではと思います。

野田 | うちの学生も淡路島に度々お邪魔している中で、移動手段では四苦八苦していますね。免許持っていない子もいます。域学専用の白タクがあっても良いなとか思いましたけど、簡単に解決できる話ではないですね。手段としての移動ではなく、移動そのものに目的性を持たせるような工夫も必要なのかもしれません。

学生の専門性も気になりました。やっぱり学問には現代の物差しでいうところの非実学なものがどうしても出てくる場合に、だから駄目ということではなく、そういった分野の学生が現場でどう立ち回るのかみたいところは考えていかなきゃいけない部分だとは思っています。

最後に E-konzal の榎原さんにお聞きしたいのはですね、今回の報告内容のみならず、淡路島以外でも色々な事業を手掛けていらっしゃると思います。そうした取り組みの相互比較なんかも踏まえて、ビジネスとして行う時のシビアさ、事業性や生産性も当然意識しなきゃいけない中で、フィールドとしての洲本市はどのように写っているのかなという点です。佐々木先生から淡路島のポテンシャルの話もありましたが、その辺りについてのご見解をお伺いできればと思いますが、いかがでしょうか。

榎原 | そうですね、まあ企業でやってるからといってビジネスセンスが必要かという点必ずしもそうじゃないような気がしています。私も別に事業の組み立てがすごく上手という訳でもなくて、それよりもやっぱりこう今一緒にいる人たちと何か面白いことをやりたいと考えた中で、そのツールとして事業を使っているっていう感覚なんですね。なので単体の事業が全て儲かっているかと言うとそんなことはなくて、総合的に赤字にならないように回してるっていう状態です。

なので地域に関わることをやる時には別の事業で儲かった

ものを活用したりですとか…そういう風にしないと多分もう保たないような地域があったり、単体の事業で儲かる単純な仕組みだけをやっていくと面白い取り組みなんて何もできないんじゃないかっていう気がして。変な話ですけど儲かるところは儲かるところでちょっと我慢して、儲かったことで別の面白いことやろう、みたいな発想でやっています。今回ご紹介した取り組みもめっちゃくちゃ黒字になるかと言うとまあほぼ難しいと思っていて、それよりも新しい価値を生み出すことにチャレンジしたいというところで今回のプロジェクトを位置付けて、全体のポートフォリオで見えています。

洲本市は可能性あると思いますけど、まちづくりみたいな部分だけで事業性を取れるかって言うと難しい面も多いんじゃないかと思います。個人的にはそうではなくて、やっぱりしっかりと面白いことをやりたい人たちが集まる仕組みを域学連携みたいな形で取り組むことによって、持続的にしていくかっていうところに面白さがあるのかなっていう気はしています。

野田 | 回転寿司のビジネスモデルのようなイメージでしょうか。次回、次々回で他の企業の方にも発表して頂くので、引き続き色々なお話をお聞きしたいと思います。

僕なりの質問を一巡させて頂いたところで、少し共通するワードに迫っていきたくと思います。今回の発表時間では活動そのものについてのプレゼンテーションが中心にならざるを得なかった中で、そのサイドストーリーと言いますか、活動を通じた地元の方との付き合い…良くない意味のアクシデントなんかも含めて、何か印象に残っているエピソードやターニングポイントがあれば教えて頂きたいと思っています。先程の順番でもう一度ぐりとコメント頂きたいのですが、大工大の皆様いかがでしょうか。

藤本 | 地元の方と言いますか、大家さんとかですね、高橋さんとか色んな方とお話はさせて頂いたんですけども、やっぱり皆様「地域おこし」に熱を入れられてるっていうのはすごく実感をしました。

今回のプロジェクトは大家さんや洲本市さんの資金、色々な原資で活動を行っているので、ある程度そこでの制約は出てきてる状況でございます。なのでそういった意味で…先程の学生さんが話した内容の通りで折衷案になりましたけども、しっかりどれでも実現できるような形で実施できれば一番良かったのかなっていうのは思いましたね。まあそこは現実的なところの話になってくるので、なかなかずんなり行くとは思わないんですけども、ある程度は我々も学生という資源の提供をして、かつその中で自分たちの教育とプラスして実学的な学びを頂いているところなので、その兼ね合いが難しかったなというのは思いました。

あとは交通手段ですね。我々は学生の数も多かったので苦労してるところで、ある程度はご負担頂いてるんですけども厳しいなというところは正直ございました。

野田 | 学生の皆様からはいかがですか。

屋 | そうですね、やっぱり費用の関係とかで折衷案にしないといけないとなった時にどこまで実現可能なのか、お金を出してくれる方からの話とかも聞きながら進める部分は結構苦労したかなと思います。

野田 | クライアント以外の方との交流ややり取りはどのくらいありましたか。

屋 | 例えば職人さんですね。ちょっと話が違うかもしれないんですけど、銭湯を探してた途中で大雨が降ってきて、洲本市の方が車で送ってくれたことがあって。何というか、そういう人の温かさみたいところは感じました。

野田 | なるほど、大学や企業に限らず偶然性を伴う交流は僕もよく耳にします。大工大さんのプロジェクトは、先程の言葉で言うところの連携インフラそのものを整備する行為だと思います。出来上がった拠点を舞台に、更なる交流が生まれる種を撒くような大事な取り組みだと思って聞かせて頂きました。ありがとうございます。

続いて大和大学の皆様どうでしょうか。地域の方との交流について印象に残っていることがあれば。

佐々木 | まず私の方から3点お伝えしたいと思います。1点目はですね、私の授業では地域の有力な…非常に前向きで頑張ってるしゃる農家の方々にお世話になっているんですけども、例えば学生が30～40人で農業を手伝うんですね、おそらくですが他の農家から「なぜあそこだけ」と言われてるような雰囲気があるんですね。本人も非常に気にされています。そうした方へのコミュニケーションを私からもできればしたいですし、農業体験をしながら地域の問題に入っていく、つまり農業だけではなく地域の中に学生が積極的に入っていくというのが大事だなというのを感じました。

次に、永井君もラーメンをやっていて感じるところでもあるんですが、農家や漁師の方々では捨てる食べ物が非常に多いんですね。フードロス対策を全面的にやっていくのであれば、何を捨ててるのか、どんなものが使えるのかを学生に一件一件リスト化してもらって、都市部で高く買ってもらえるような価値を再生産していくようなことが有効だと感じました。

そして3点目、大阪工業大学の方々も財源について話されていたんですけど、これふるさと納税を活用するのはいかがでしょうか。洲本市なり淡路島なりがですね、域学連携を高めていこうという政策に基づいて予算化していくとか、10年目から20、30年目に向かう為にこうしたアイデ

アはどうかと思いました。以上です。永井君からは何かありますか。

野田 | 永井さん、コニカミノルタの楠さんからチャットで質問がありますね。【永井さんはなぜ地域の商材を使ったラーメン作りを始めたんですか？】…こちらへの回答も併せてコメント頂ければと思います。

永井 | かしまりました。先に私が感じた課題の方をご説明させていただきます。様々なプロジェクトをさせて頂く中で一番大きな課題として、地域が学生に過度な期待をしてしまって、学生と住民との間で摩擦が起きてしまっているのではと感じています。イベントのボランティアの募集であつたり、企画をしている中で学生が来なかった場合の次の手段がないというか。学生が参加させて頂くことで経験にもなるんですけども、プライベートと学業との両立もありますので、そうしたところをこれからどう解決していくかっていうのが大きな課題だと感じました。

楠さん、ご質問ありがとうございます。地域の食材を使ったラーメンを作り始めたきっかけなんですけども、個人的にラーメンが大好きで、年間400杯は食べるくらい好きなんですけど…僕たちは21歳のコロナ世代で、大学1回生の時はリモートで、高校3年生の時はもう半が休校状態で、なかなかコミュニケーションを取るっていうことが少なかった世代になるんですよ。そうした時に、大学に入って環境の授業や佐々木先生のジャーナリズムの授業を通して地域の課題へ目を向けた時に、食品ロスとラーメンそして地域創生っていうのが結びついて、だったらラーメンっていうのをひとつのツールにして、地域の魅力であつたりとか、個人的に大好きなラーメン日本の文化として世界に広めようということで活動を始めさせて頂きました。

野田 | ありがとうございます。お二人のご発言に沢山のヒントがあったように思います。

「関係人口のヒトデ」って僕は呼んでいるんですが…関係人口を表す際にありがちな、きれいな同心円状に広がる社会空間のダイアグラムがあるんですけど、あれは全然実態に即したものじゃないと思っていて、実はヒトデのように社会関係は歪で、実際は関係人口って言えば言うほど地域内の「無関係人口」は広がるんですよ。その辺のコミュニティの偏りと言いますか、そうしたものが地域内に軋轢を生んだりすることは、確かによくあるなと思いながらお聞きしていました。悉皆調査という訳ではないですが、地域は結局一人ひとりの人間の集まりなので、スピード感をどう調整していくのかは僕自身も課題として感じているところでもあります。

もう1つですね、財源の話がありました。こうした話は是非この後のディスカッションなんかで具体的な作戦会議が

必要だなと勝手に思ってるところなんですけど、これからの域学連携を、やっぱり財源の面でもちゃんと支えることは大事な論点ですね。連携するのは皆で何かをこしらえたり閃いたりみたいなところだけではなく、露骨に言えば稼ぐという…独自の財源を持つファンドとしての意味合いも忘れてはいけませんね。僕が域学連携に関わり始めたのは学生時代ですが、東京の大学に居たので旅費が往復3万円以上したんですよね。なので当時は3万円分の働きをしなきゃいけないと思っていたりもして…裏を返せばそうした建て付けなんかも地域の過度な期待にリンクしちゃうようなことも有り得るよなと思いました。学生の立場の置き方と言いますか、セミプロのつもりで行くのか、或いはもうちょっと先方の期待を下方修正してあげるとか、必要に応じてイーヴンになるように調整していくことが大事な話かなと思います。この辺り、今日の続きだったり次回、次々回でも何かと論点になりそうな大事な話ですね。

最後に榎原さんの方から、地域との交流とかについて少しお伺いしたいと思います。ご自身の体験談でも、他の事業の中で見かけられるようなことでも結構ですので、ご見解をお願いします。

榎原 | 皆さんほど申し上げることはないんですけど、里山で活動している時に思うのは、地域の一部の方々には面白がってもらったり興味を持ってもらうんですけど、大多数の方は無関心で、色々発信してもほぼ知らないと言われるのに対してどうしたら良いのかっていうのはすごく思っています。何とかしたいと思って継続的にお声掛けはしているんですけど、地域の本当に無関心な方は本当に無関心なので、どうアプローチしたら良いのか答えはなくて、そこはずっと悩んでいるというのが現状です。

野田 | ありがとうございます。まさに今日こういう場で共有したり、当日のシンポジウムもそうかもしれませんが、引き続き肅々と情報共有を進めていくことが大事なのかなと思いました。先程聴講者の方から【過度な期待はお互い様かもしれませんね／ゴールの設定や共有、マッチングはとても大切だと思います】とのチャットを頂きました。今ちょうど同時並行で、地元の方たちによるWG3でもプレストが進められているのですが、そこでも同様のテーマが出てきているような気がします。やっぱり互いが互いに期待し過ぎることによるギャップで問題になったり傷付いたりみたいなことは多分にあるのだと思います。

楠さんからも引き続きチャットを頂いています。【誰かに何かをやってもらうというよりも、同じ目的やビジョンなどに集まる同志みたいなチームにならないと厳しいのかもですね】…そうですね、チームの形も色々ですが根本として大事な部分ですね。

そうしているうちに際どい時間になってきました。一度コメンテーターの方から一言ずつ頂きたいと思います。僕の方で指名して良いですか…辻さん、中川さん、高橋さんの順番をお願いします。

辻 | 皆様お疲れ様でした。それぞれに地域に関わっておられる苦悩は学生だけではなく、大人やもっと上の高齢のボランティアにも共通することだったので、なるほど私も実感しました。

大工大と大和は自治体と協定を結んでおられるということで…協定書ということは更新があるということですよ。そこが境目になるのかな、行政によくある3年で終わってしまうというような。仮に更新されなかったら大学は活動を続けられますかというのが気にかかったりして、いじわるなんですけど聞いてみたいなと思ったところでした。更新時期がやがて来るのか、永久なのか、更新ができなかった時にどうなるのかっていうのは、ボランティアにもよくあることなので。

野田 | ありがとうございます。オフィシャルな繋がりが実質的にどう働くのかっていうところですね。お答えできる方いますか。

ちょっとだけ繋ぎますけど、協定っていうのは「切れる」ことも大事だと思うんですよね。永続性を担保するものではなく毎回毎回きちんと見直しましょうというところにも意味があって、域学連携も何かこう、目的を達成したらきちんと一旦解散することも大事なかもしれませんね。一方でただただ継続させることが全く無意味という訳でもなく、その辺りのバランスや考え方には多様性がありそうですが、大学側から何か一言ずつ頂いても良いですか。

藤本 | 大工大の方から一言いいですか。我々は協定の方はまだ結んでなくてですね、先程ちょっと紹介させて頂いたのは、我々のキャンパスが設置されたところの自治体とは結んでるっていうところなんです。協定の話はあったんですが、ただその時はまだ取り掛かりの段階だったので、我々の方が準備ができていなかったっていうのがございまして。今回は協定はなしで進めさせて頂きましたけども、これから先ですね、連携が進んでいく中で改めて我々の方からアプローチして、高橋様に相談したいなとは考えてます。本学の考え方としては以上になります。

野田 | ありがとうございます。続いて中川さんからお願いします。

中川 | 皆様ありがとうございました。こんなにも色んな取り組みがあったのかと驚いている次第でございます。アグリツーリズムって可能性が本当にいっぱいあって。僕も8年前ぐらいから日本遺産…弥生時代の銅鐸をどういう風に観光や地元の教育に使うかってプロジェクトに巻き込

まれて、その翌年ぐらいから洲本の商店街に関わっているんですが、無関心って仰られていたように、なかなか関心を持って頂けないことって沢山あるんですよ。

仰られた中でいくと、皆様で縁があって洲本市と関わって、すごく良かったとか成果があったかと思うんですが、他のまち…丹波篠山とかも色んなことやっていますし、僕奈良の生駒市の市役所にもいるんですが、本当に色んな町が色んなことをやっていて、その中から洲本市を選んでもらうにはどうするのか。

広報の仕方って、僕元々メディアの人間なんですけど、「知ってもらう為の広報」があると思うんですよ。もう一つが「忘れさせない広報」ですね。我々は最初にエネルギーをばんと掛けて「こんなのが始まりました！」とかやるんですけど勢いがあるのは一回だけで、本質的にやらないといけないのは、知ってもらう為の広報：1に対して忘れさせない広報：5はしないといけない、といつも思っています。アグリツーリズムだとしてもよりまち荘だとしても、忘れさせないんだよ、高橋さんが。高橋さんが忘れさせない広報を全力でやり続けているというのがいつもすごいなあと思うんですが。なので学生の皆様がプロジェクトをつくることも勿論そうなんですけど、お知恵として、どうしたら忘れさせない発信をし続けられるんだろうとか、ラーメンのように細く長く続けるものなのか…だからこう、スモールソーシャルビジネスっていうのも正しくて、お金が回転すると必ず持続可能になるんだなと思いながらお話を聞いてました。

今後の議論の観点としても、プロジェクトを立ち上げるのはすごくありがたい、地域があって人がいて課題があれば生まれるんですが、それがどういう風に儲かるかは別にして、どう続けられるんだろうとか、どう発信し続けるのか、選んでもらい続けるのかということを考えてあげたらすごく良いなと思って聞いてました。

野田 | ありがとうございます。そうですね、大事な観点をまた頂きました。忘れさせない為の広報という話がありましたね。それに重ねてもう一つ、「思い出させる広報」もこれから大事なんじゃないかなという風に思いました。延べ人数では数百人もOBOGの方が社会で頑張っている訳ですが、そうした人がふとくすぐられるような、そういった形もこれからは重要なんだろうなと思いながらお話を聞かせて頂きました。

そうしましたら最後に、高橋さんの方からコメントを頂きたいと思います。よろしくお願いします。

高橋 | 皆様本日はお疲れ様です。ありがとうございました。まず最初にですね、榎原さんのことを少し補足しておきます。先程の榎原さんの「ひととき」について、洲本市のお

店や農家さんがその拠点で活動するという話があったんですが、それならすぐ近くの吹田にキャンパスのある大和大学さんが洲本市での活動をそのまま持っていったらいいんじゃないかということで、今プロジェクトを進めているところです。榎原さんには域学連携の初期の頃、龍谷大学とスタートして数年間は関わって頂いてたんで、今日の場で色んな話を聞いた上で昔と今との違いについて感想とか印象を、僕が喋った後で是非コメント欲しいなということで…先に榎原さんに振っておきます。

で、コメントというか、大工大さんの話を聞いてて強く感じたのは、例えば学生さんの提案というところで何かこうビジョンがあって、提案があって、施主の意向やお金があって、妥協する部分もあって、一通りの流れとして提案されたのがすごく分かりやすかったですね。これは多分今回のリノベーションだけじゃなくて他のプロジェクトも一緒やと思うんですね。理想では学生さんの提案通りに出来れば良いんだと思うんですが、殆どのパターンで折衷案とかの妥協に落とし込まないと形にしにくいというのがあるのかなと思ってます。大工大さんの3案から折衷案にする時に私も重々確認したのは「それで楽しいか」と。成果としてそれで良いのかということは学生さんに何回も確認しました。要は折衷案にすることで楽しくなくなるのなら、プロジェクトとして良くないのかなと気にしながらやっていたので…僕も仕方ない部分もありながら、考えていかないといけないことなのかなと。後はリーズナブルなインフラの話は引き続き考えていきたいと思っています。

それと地元メンバーのワーキンググループも動いているということで私も参加しているのですが、皆様しっかりとした意見を出してもらっていて、ここも楽しいワーキングになるんだろうなと思っております。若干凹んでいる部分もあるんですが…ただ今回は、この10年間を批評することによってやっていますんで、どんどん僕が凹むほど良くなるのかなと思っていますので、何というか遠慮なく意見を頂ければと思います。ひとまず私からは以上で、榎原さんからコメントを聞きたいと思います。

榎原 | すいません、私がそんなに何か申し上げられるようなことはないんですけど、でもやっぱり一番最初に、誰も入ったことないところに皆を引き連れて、大学と連携して、そのエリアを拡大させて、これだけの色んなバックグラウンドを持った方々が関わってきたことは本当にすごい一言だなという風に思います。

最初にエネルギーという切り口で入ったんですけど、それだけでなく地域を元気にする為に色んな専門性のある人たちが集まって面白いことが起こっていく、というようなこともすごく感じます。僕が関わってる他の地域にもどんど

んそういうノウハウを入れていけたら良いですし、洲本に関わった方々は建築やデザインやファシリテーションの経験が別の地域でも生きてくとも思います。洲本を第一のフィールドとした「洲本卒業生」みたいなネットワークがあれば、お互いが困った時にお願いするような立体的なプロジェクトになっていって面白いなと思いました。1本の線が布になって、立体構造物になるようなかたちが作られつつあるのかなと。

野田 | はい、ありがとうございます。時間が迫ってきましたので最後に一言話して終わりにしたいと思います。

さっきの色々な専門性が3Dに繋がっていく流れは10周年ならではお話ですね。もうひとつはやっぱり「楽しい」という概念とどう向き合うのか。地域づくりは楽しさばかり追いかけてはいられない部分もありますし、でもやっぱり楽しまなきゃという話も、きちんと議論しなきゃいけないと改めて思います。

あとは高橋さんが凹んでいるみたいな話も、僕は色々引っ掛かっていて…多分これは、この機会に皆で一緒に凹まないといけなそうですね。地域、大学、企業、行政、色々な立場の人間がどういった痛みを伴っているのかをお互いちゃんと知らないと、何というか一定の誰かが悦に浸っているような状況では今後の10年は保たないと思うので、きちんと痛みや悩みを共有するっていうのがこのワーキンググループの大事なミッションなのではないかなと思うので聞かせて頂きました。

一度ここで区切りとさせて頂いて、後はパネリストの方々含め残れる人は残って頂いて、プラスαでお話したい、質問したい方で延長戦を行いたいと思います。無理のない範囲で結構ですので是非ご参加下さい。続きは皆でわーっと喋れば良いかなと思っているところです。そういう訳で一旦は線を引きたいと思います。第2夜、第3夜も同じIDでアクセス可能ですので、引き続き仲間に入って頂ければ幸いです。本日は皆様ありがとうございました。

After Discussion

高橋 | 藤本さん、ちょっとだけ良いですか。

藤本 | はい、大丈夫ですよ。

高橋 | 多分1回か2回か話したと思うんですけど、大工大さんは他の地域でもプロジェクトやってるじゃないですか。それに比べて洲本市は勝ってるかどうかという…もう一度確認しておこうかなと。色々お話伺いした上でアレなんですけど、勝ってる部分と負けてる部分を教えてほしいなと思ってんですけど。

藤本 | めちゃくちゃ難しい(笑)。勝ち負けの判断って

うのはちょっと難しいんですけど…奈良県の川上村では廃校のリノベーションをしているのですが、建築物も敷地も大きいし年数も長くスパンが掛かっていて、実績としてはそちらの方が大きいのですが、洲本市さんは今年度から始まったばかりですので、これからどんどん大きくしていければ良いなと思っています。

野田 | ものづくりやデザイン分野の大学だと、デザインや設計の余地のあるプロジェクトを用意できるかどうかで地域への関わりの意欲は変わってきますよね。僕自身もそうでした。学生の時は何かを作りたくてしょうがなかった。

藤本 | 本学は建築だけでなく都市デザインやプロダクトデザインの学科もありますので、建築に関わらずものづくりや商品開発等、幅広く提案ができるのかなと思います。私も今回初めて藤井先生のところの、学生さんのデザインとか見せてもらったんですけど、すごいクオリティでした。先程の資料にも出てたんですけど、その辺りのデザイナーさんに引けを取らない。感銘を受けた部分でしたね。

野田 | 繰り返しになりますが、やっぱり最初にコンペしたっていうのはすごく良かったなって思うんですよね。地域に提案する前に内々で洗練させるっていうやり方をきちんと取ったっていうのは…うちのラボでも真似すべきだなと思いました(笑)。いきなりポンと出すのではなく競争性を持たせるというのは域学連携において大事だなと思うのですが、そこは藤井先生の常套手段みたいなところがあるんですか。

藤井 | 実は私都立大出身なんです。小林克弘先生の研究室で、その時は実施コンペをひたすらやっていた。そういう手法や手段があって…今回人数が多いというのもあったのでグループを分けてコンペを。折衷案にすることは決めてなかったんですけど、その後の高橋さんの反応とかを見ながら折衷案が良いんだろうなということで。今回域学連携に参加したのが初めてで、やりながらどれを正しいのかを考えていたので、場合によってはコンペで一案に絞るっていうやり方も変わってくるのかなと思います。

野田 | 今回は学内というかチーム内のコンペでしたけど、今後はもっとオープンなコンペ形式もあるのかもしれないですよね。地域で何らかのミッションを設定して、手を挙げた大学でオフィシャルに競った上で勝ったチームが実践していく。そういうやり方もありかなと思いました。

高橋 | 永井君はよりまち荘もう泊まった？

永井 | いえ、まだ泊まってないですね。

高橋 | レトロこみちの活動だとよりまち荘に近いと思うんでまた言うてもらったら。野田先生のところは既に。

野田 | もう随分お世話になってます。だから今日設計チームにちゃんとお礼を言いたかったです(笑)。ありがとう

ございます。

辻 | すみません個人的な興味で…玉ねぎをソーラーシェアリングで作ってるって仰ってたじゃないですか。これまでサツマイモとかしか知らなかったんですけど、玉ねぎってばっちりなんですか。玉ねぎがいけたら他の野菜もいけるのかなって思うんですけど。

佐々木 | ここのはパネルが非常に小さくて、玉ねぎでもいけますしサヤエンドウも作ってますし、沢山作ってます。島中に広がれば良いなと思いますし、学生にも教えてるんですけど売電ができるんですよ。売電ができると不作の時の経営も楽になりますし、5～6年で費用をペイできるので、農業をやりたい学生も増えるのではと思いますが、永井君どうですか？ソーラーシェアリング。

永井 | 僕の祖父も都志辺りが出身なので小さい時もよくウェルネスの方に行かせて頂いたんですけど、そうした活動を全く知らなかったので、ラーメンプロジェクトを通して知れて良かったなと思ってます。祖父の親戚とかが週末農業で玉ねぎを育てたりしてるので、私も将来的に週末農業みたいに洲本の方で…例えばラーメン屋を開いたとしたらその材料を作ったりできたらなとか個人的には思ったりします。

野田 | そのまま永井君に質問して良いですか。佐々木先生への質問かもしれないんですけど、学生は学生で結構忙しいですよね。域学連携と学生生活と、当然プライベートもある。日々バタバタしてるって感じですか？

永井 | そうですね、バタバタしてます（笑）。ただこう僕らとしては、淡路島に旅行感覚で行ってそこで活動もして…僕らは修学旅行がなくなってた世代で、本当にこうした学生らしい経験が1年2年なかったので、そういう部分では本当に高橋さんに感謝しかなくて。交通費も頂いた上で淡路島で活動して、夜は洲本市の魅力発見じゃないですけど昔からあるような銭湯や飲み屋さんに行ったり、楽しくやらせてもらってます。

野田 | そういう副次的な楽しみみたいなものがないと保たないですよね。高橋さんが仰ってたミッションそのものの楽しさもそうですが、オンオフの切替も必要ですね。

ちなみに、うちのラボでの取り組みは授業扱いではないんです。洲本でどれだけ頑張っても学生は単位を1つも取れません。旅費は域学予算から出して頂いていたり、地元で受け皿として補助金を取って頂いてそこから捻出したり、野田の研究費の場合もありますが、いずれにせよ学生は「出してもらっている」立場なので、とにかくセミプロとして現場に臨むことを意識させています。何が言いたいかっていうと、大学によって学生の立場は異なるんですよ。PBLみたいな実践系の授業の受講生だったり、ラボ単位で

仕事を受けた委託先の一員であったり。それによって学生のモチベーションや責任感も変わってくるのかなと思ってはいるんですが、佐々木先生の見解はいかがですか。

佐々木 | はい、私自身が淡路島に接点があるということも踏まえてなんですけども、できることなら必修の授業で送りたいんですね。

授業だと1学年MAXで200人送れます。私自身実学を重視してますので、さっき言いましたが岡本さんは玉ねぎ収穫の時期に200人来ればすごく助かるんですよ。あと永井君も言うてましたが淡路島で消費することができるんですね。ここにさっきポテンシャルがあるって言ったんですが、滞在型の施設があればビジネスとしても成り立つというように思っています。現地で学生に神戸新聞の地域情報の欄を…内容がとても充実しているのですが、朝にそれを買って読ませたり、飲食店も繁盛します。大勢でどっど行くのはありかなという風に思いますね。そうすると今度許容する側の意見も出てくると思うので、私の妻の実家に泊めるというようなことも考えてますし、今度小学校を宿泊施設にするような話が…高橋さん、ありましたよね。

高橋 | 廃校活用、まだあまり進んでないんですけどね。

佐々木 | そこがあれば、どばっと200人泊まりますよね。そして米山地区がどわっと人で溢れる。学生の勉強にもなるかなという風に思います。

野田 | 確かに派生需要も含めて規模がモノを言うところもありますね。どちらかが正解という話ではなく、また地域のニーズもあると思うんですが、僕は個人的には少数精鋭が望ましいとずっと思っています。うちのラボは去年10人ぐらいでお邪魔してたんですけど、やっぱり差が出るんですよ。能力もそうですがプロジェクトへの向き合い方で。頑張る子は頑張るし、当然そうじゃない子も出てくるっていう中で、一人ひとりとコミュニケーションを取りながら進めるには、正直10人でも僕も地域も大変で。まあ結局そういうところは地域の意向との掛け合わせかなっていう風にお聞きしていました。

高橋 | ビジネスの話も出たので楠さんにも是非ご発言頂ければと思うんですけど、補助金も活用しながら洲本市で色々活動して頂いてますが会社は東京ですし、遠いところから活動されるのは難しいなと思うんですけど、僅かな財源で活動されてるっていうのはビジネスの観点で言えばいかがでしょうか。

楠 | ありがとうございます。来週喋ることがなくなるので抑え気味にいきます（笑）。皆様の活動は素晴らしいなと思ったんですけど、今日は大学の活動が多かったということもあって、新しく「生み出す」部分が結構多かったのかなと思います。僕が淡路島のこの活動に参画したきっかけ

が、今自分がやってる新規事業が印刷を使うというのがテーマで、ちょうど僕の小学校からの同期が市議会議員をやっていたのを思い出してですね。15年振りぐらいに Facebook で DM を送って、それで色々やっていこうと菜の花畑を活用したエコプロジェクトをやっています。

それで思ったのが、プロジェクトを生み出し続けてはいるんですけど持続可能になってないなっていうところなんですよね。今回の全てのプロジェクトに通じるところだと思うんですけど、ビジネスの観点が入っていかないと今日の学生さんが卒業した後、多分終わっちゃうんだろうなと思うんですね。それを何とかしたいなっていうのを来週お話しさせて頂くんですけど、皆様と一緒にやっていきたいなと思ってますし、一応ある程度大きい会社に所属していて地域創生とか自治体 DX とかいう会社も作っているんで、そこにプロジェクトをまるっと持っていつてみようかなと勝手に思っています。ネタを探している人は沢山いると思っていて、ポツポツと生まれている活動をそこにどう繋げていくか考えてるっていう感じですかね。

野田 | ありがとうございます。持続可能性というところでは、今日あんまり触れなかったんですけど域学連携の卒業生、つまり OBOG の存在はどうしても避けられない話題で。僕自身も OB です。それで、これは洲本市だけじゃなく全国的にあることだと思うんですけど、学生 OBOG による組織や団体ってポンポン発足するけど大体は何もできずに消えていきます。じゃあ組織ではなく何が残れば良いんだろうっていうのがあって。

1 つは地元とのハブになる人が存在し続けることですが、もうひとつは取り組みが残り続けるということですね。その延長線上にあるのがビジネスとして残るということになるのかなと思います。それについては僕自身、この 10 年ではなかなか組み立てられなかったなっていう反省がずっとあって。次回また楠さんや他の企業の方のお話から学ばせて頂きたいと思っていますところですよ。

楠 | ありがとうございます。学びはそんなにないかもしれないですけど頑張ります（笑）。

野田 | その他の方ががででしょうか。この手の話はいつまで経っても終わりはありませんが、ぼちぼちお開きの時間かなと思います。最後に一言二言ありましたらよろしくお願いします。

佐々木 | 一言いいですか。今回の振り返りにもならないんですが、現在日本中を席卷している自治体に安芸高田市があるんですね。地方自治体がどのように生き残っていくのか、議会と市長との関係、そこに予算がどう絡んでくるのかトレンドになっています。マクロな目で日本社会と地方を考えないとえらい目に遭いますよねというのを今若者た

ちも見ていますので、洲本市の取り組みもモデルケースになっていくのかもと思います。安芸高田市は議会と市長の戦いが悪い風に捉えられて報じられているんですけど、見方を変えるとそうではなくて様々な示唆を与えているので、日本が立ち上がる為の大きな枠組みで洲本を見ていくということも大事ななという風に思います。

野田 | ありがとうございます。全国の事例も含めて…自戒を含めて言うんですけど、もっと論文書かないとダメなんですよね大学は。一般理論化して社会が学習可能なかたちでアウトプットする、つまり論拠をもって域学連携事業を政策的に支えることは研究者の大事な役割なのですが、域学に関わる大学教員はそれをサボってきたんだろうなと思います。

最後に高橋さんから、次回に向けての一言を頂いて終わりにしようかなと思うんですがいかがでしょうか。或いは次回以降へのリクエストが何かあれば、モデレーターとしてできるだけ対応するようにします。

高橋 | いや、もう最後のまとめ方も野田先生にお任せしますのできつと大丈夫なんだろうという風に、そこは心配しておりません。先程も佐々木先生から洲本市を日本再生モデルにするんだっていう非常に大きなお話もありましたし、楠さんの本気の地方創生を目指すビジョンとか…地元チームでは色んな話があって凹んだ部分もあったんですが（笑）、僕ももっと先を見てというか、長期的で大きいものを掲げてやるのも良いのかなっていう風に、皆様のお話を聞いてて思ったところです。

なので足元の取り組みも当然ですし、その結果として地域がどうなったっていう批評もそうなんですけど、洲本が、淡路島が、というところも見ながら議論できたらなと思いました。皆様今日は長時間お疲れ様でした。ありがとうございました。

野田 | ありがとうございます。こんな感じのディスカッションを引き続き取りまとめてシンポジウム当日に臨みたいと思います。第 2 夜、第 3 夜もよろしくお願いします。

2023/10/23 (Mon) 19:00-20:30 @ ONLINE

第二夜

Panelist
レガサルト株式会社
株式会社大同印刷所
コニカミノルタ株式会社
AKKODiS コンサルティング株式会社

Commentator
前掲 辻郁子

Moderator
前掲 野田満

Introduction

野田 | 定刻になりましたので始めさせていただきます。今日は第2夜でございます。今回は延長戦も含めて色々なお話を聞かせて頂きました。今回の発表者は全て企業の方ですね。引き続きディスカッションしていきたいと思えます。大学からのお話が中心だった初回とはまた違った議論になるのかもしれません。それでは早速、よろしくお願い致します。

Presentation 2-1 レガサルト株式会社

高山 | 改めましてレガサルト株式会社の高山慎之介と申します。会社からの発表ということで紹介して頂いたんですけど、僕は京都工芸繊維大学の卒業生で…現在は京都橘大学の教授をされている鈴木先生が京都工繊にいた時代に淡路島で活動していました。そうした大学時代の活動を含めて、これからこういうことをやっていきたいというのを発表させていただきます。在学中の3年間古民家改修等の活動をさせて頂いて、今は社会人の4年目です。域学連携が始まって2年目ぐらいですかね、8年前に僕らの先輩が入ってたんですけど…鮎原（あいはら）にある築100年の古民家を「ついではん」として改修するというのが最初の活動です（Slide2A）。建物を域学連携の為に寄付頂き、うまく使えないかということで改修案を学生たちが考えて、他の研究室にも協力してもらいながら延べ500人以上の手で、地元の工務店や設計事務所の方々にも協力してもらいながらDIYで改修していきました。蔵は学生ならではのアイデアで、壁を全面抜いてガラス張りにするという大胆な改修をしました。改修後は移住体験者や域学連携の学生の宿泊場所として活動拠点になっていましたが、今は指定管理のデイサービス施設として使われています。次に取り組んだのは五色の廃校になった養護学校の一室に

ついではん



LEGASARTO

2A

農泊の為の空間をつくるというプロジェクトで、当時は浜田化学さんがその学校を買い取って宿泊施設として改修するという中でお声が掛かりました。多くの人と一緒に宿泊できるドミトリーのような感じで、フレキシビリティをコンセプトにジャングルジムのような構造を基本として、暖簾や仕切り壁を自由に組み替えて部屋をつくれるような遊び心を意識しました。

続いて取り組んだのが本町の商店街にある「米田屋」の改修です。NPOが子ども食堂や就労支援の為のスペースとして使っていきたいということで、母屋は構造はプロの工務店さんにお願いして、設計は学生の方でさせて頂きました。蔵は地域の方を招いての土壁塗りやDIY体験も交えながら学生だけで施工を行い、子ども図書館としてオープンしています。

こうした3つのプロジェクトを学生時代にさせて頂き、卒業後は今の会社で住宅や庭の設計、飲食店の運営、古民家再生等の事業に取り組んでいるのですが、淡路島で構想しているものとして、シャッター街になりつつある本町の商店街の7丁目にあるタケダ玩具店さん…昔は玩具屋さんだったのですが、縁があってその建物をうちの会社で受け継がせて頂ける話が浮上しまして、どのような運営をしていこうかというところで、NPO法人をつくらうと思っています。域学連携の学生、地域の人や課題、これまでの活動とこれからの活動を繋げたり、域学連携をまとめた研究や現役の学生の活動をサポートができるような場として、事務所兼学生が無償で泊まれる宿泊施設、活動の発表場所のように日常的に使うことができたという風に思っています。構想段階なんですけど、2階部分に宿泊、商店街に面した1階は学生が発表したり地域と繋がれるようなスペースを作って、奥には明治時代からの立派な蔵が残っているのでそこ面白く使いたいと思っています。「月光玩具店」という名前ですが、タケダ玩具店さんは洲本の皆さんが子どもの時代にそこで玩具を買ったよという風に結構有名ですので「玩具店」というところは引き継がせて頂いて、建物の奥の吹き抜けのようなスペースで月の光を見ながら…僕も学生時代そうだったんですけど、夜遅くまで皆で議



LEGASARTO

2B

論する場所という思いで名付けました（Slide2B）。

これは僕が全部を考えたのではなくて、淡路島で活動したいと僕がずっと言ってたのを社長が応援してくれまして、こういうやり方で活動できないかと描いてもらって。これから取り組もうという次第です。ありがとうございました。

野田 | ありがとうございます。鈴木先生から何か補足やコメントはございますか。

鈴木 | はい、端的に説明して頂きましたが、当時は空き家問題が深刻化する中で、その活用についてはあまり議論されていなかった時代だったので、そんな中で洲本で取り組んだことに非常に意味を感じております。

また取り組みのスタンスとしましては、私どもの研究室を中心として活動をさせて頂きましたけど、できるだけ色々な研究室に声を掛けて、学生それぞれの能力を活かせるような…構造の研究室だったら耐震診断とか、歴史の研究室だったら建物の歴史的価値を見出すとか、得意技を活かしながら連携してやってくれたところが良かったかなと。研究室ではなくて学生が主体となって成果を出してくれたと思います。勿論課題も沢山あるんですけども、学生さんの力を強く感じたプロジェクトでした。

野田 | ありがとうございます。この後また詳しくお話を伺いたいと思います。

Presentation 2-2 株式会社大同印刷所

大西 | 皆様こんばんは。大同印刷所の大西です。武庫川女子大学さん、洲本のあわじ里山プロジェクトさんと一緒に

活動させて頂いております。これで2年目になりますが、最初は実践授業として、2年目はゼミの学生さんたちと一緒にということで進めております。

弊社は印刷会社なんですけれども、活版印刷という50年前の印刷を未だにやってたりするような会社で、手漉きの紙も作っております。印刷会社が何で紙を作とんねん、ということですが、私元々製紙メーカーから社会人のキャリアを始めてまして、特別な思い出というか…ペーパーレスの時代ではありますけれども、ライフワークとして紙を作ったりしておりました。趣味程度のものだったのですが、自分で作った紙を世の中にもう少し流通させていくような仕組みができないかなという風にも思っておりました。そうした中で放置竹林の解消と未利用農産物の資源化、そして地域の活性化をテーマに、2年前から取り組みだしたということです。

育ってしまった竹は非常に固く、紙にするには強い薬品や沢山のエネルギーが必要でなかなか大変なんです。竹は人間の背丈になるとタケノコとして食べることができなくなってきて、逆にその段階で刈ってしまえば放置竹林の解消にも繋がってくる訳なんですけれども、資源として使うには難しく放ったらかしになってるのが現状です。幼竹をメンマにして食べて活用しようという取り組みが日本全国で広がりつつありますが、製造過程で半分が廃棄になります。その未利用の部分が紙の材料として馴染みが良いということで、メンマ作りの廃棄物と、竹林整備の際に沢山出てくる竹の皮を100%原料とした手漉き紙を「かぐや姫紙」と名付けて活動しております（Slide2C）。

紙の製造プロセスとして、まず不純物を取り除いて鍋で3～4時間ぐらい煮るんですけれども、その後繊維をほぐすビーターという機械にかけます。更にそれを網のような漉桁（すけた）で漉いていくと紙になります。よく質問されるんですけれども、和紙とも少し違います。

エシカルペーパーといって環境に優しいとされる紙が沢山出てくるんですけれども、大概パルプ…木材から得られる繊維が混ざっています。混抄紙とも呼ばれますが、それらとは違って「かぐや姫紙」は農産物100%ですし、手漉きなので小ロットで作れます。更に紙漉きから印刷までワンストップでできることで、それらの体験サービスが提供できます。

「かぐや姫紙」とは

放置竹林解消 × 未利用農産物の資源化 × 地域活性化

幼竹や竹の皮100%を原料にした手漉き紙

〈製造のプロセス〉



DAIDOUINSATSUSYO co.,ltd. 2023

この「かぐや姫紙」のプロジェクトは武庫川女子大学さんとあわじ里山プロジェクトさんと弊社で取り組んでおるんですけれども、竹由来製品の開発を通して竹林整備の人材育成や、放置竹林問題の認知度を上げていこうというのも活動のひとつです。またその中で楽しいこともあるよねってところで里山体験のコンテンツ化をしたいなと思っています。竹林整備は学生さんと一緒に安乎（あいが）地区というところでお手伝いをさせて頂いています。古くなった竹を間引くような作業ですね。竹炭で焼いたおやつを食べたりして楽しみながらやっています。竹原地区では小水力発電のエネルギーと川の水、そして竹の皮で紙を作ったり、ガールスカウトさんに指導頂きながら竹で食器や串を作ってバーベキューをしました（Slide2D）。

こういう取り組みを知って頂く為の広報活動として…去年洲本で純国産メンマサミットが開催されまして、日本全国でメンマを作る取り組みをされてる方が報告するという会なのですが、そこでブースを設けて一緒に幼竹から紙を作りませんかというご案内をさせて頂きました。それから9月に大阪のSDGs対応技術展にも出展して、「かぐや姫紙」の見本を配布してPRをしました。12月のアップサイクル技術展にも出展を予定しております。

面白い取り組みだと言って頂ける方は沢山いらっしゃるんですけれども、ただやはり手漉きの紙というところで最後

竹食器のBBQ（ご協力：ガールスカウト兵庫県2団）



DAIDOUINSATSUSYO co.,ltd. 2023

ターゲットとしてはこんな感じで（Slide2E）、皆様のよう
なプロジェクトの推進者や関係人口を増やしたい地方自治
体さん、副業や兼業で地域貢献したいと考える色んな方が
ユーザーになってきます。後はこうしたプロジェクトを体験
させたいと思っている保護者や教育関係者なんかも入っ
てくるんじゃないかと思います。皆様の取り組みもそうで
すが、各方面から参画して一緒にプロジェクトを作ってい
くことができれば持続可能にもなるし、色んなビジネスの
アイデアも生まれるし、Well-Being もどんどん広がって

2E

大学生

勝手に育っていくんじゃないかという風に思います。ポイントとしては教育プログラムみたいな形式っていうことですね。地域の教える側と、保護者や都市部の学生さんを絡ませるのが良いのではと思っています。

実際にやり始めていることとして、先程の菜の花プロジェクトに企業代表としてコニカミノルタの私が入って…オイルを入れる瓶をリサイクルできないかっていうことで私がこれまで付き合ってきたガラスメーカーにサステナブルな環境に貢献できる場を提供してあげたり、地元の事業者がオイルを活用して商品を作りませんかというような話で巻き込んだり、短期学習としてプログラムして学生さんとか先生を巻き込むということが生まれています (Slide2F)。これをビジネスとして持続可能にしていってというのが私が取り組んでいるネタになります。

自分の故郷に久々に帰ってみた時に素晴らしいエコプロジェクトがあって、すごいなあと思って入ってみたことがきっかけでしたが、やっぱり中に入っている人が疲弊していて、このままだと自然消滅してしまうとか、変な方向に行ってしまうのではと思いました。人を繋げることでそれを解決できると実践しながら確信していますので、この会も繋がりのおかげになれば、各プロジェクトを理解し合って持続可能にしていければという風に思います。よかったらアクセス下さい。以上です。

Presentation2-4 AKKODiS コンサルティング株式会社

玉川 | よろしくお願ひします。AKKODiS の玉川です。日本を課題解決先進国にというビジョンで今年からこの社名で活動しております。人材派遣や教育関係、コンサルティング領域のビジネスを主に行っています。

ソーシャルイノベーションパートナーズプログラムと社内では呼んでいるんですけども、2019 年からエンジニア職の人間が地域課題の解決の為に現地に赴くプログラムを社員研修で行っております。企業の人間は地域に入り辛かったり戸惑うところもあるのですが、そこも研修のいち要素で、技術者としてお客さんに言われたことや要件の定まっていることをやるだけではなく、自分たちで課題を見つけて、自分たちの技術を使って解決することを考える研修として洲本市で活動を始めて、今年で 4 年目を迎えます。活動の指針としては洲本を拠点に面白くて格好良い活動をしていこうと…どんなに会社として魅力的でも「それあんまり面白くないよね」っていうことはやらないとか、どんな取り組みも独りよがりでは意味がなくて、幅広い連携関係を作りながらやっていくとか、そうした指針のもとに取り組んでいます。後は活動の指標として、若者が帰ってく

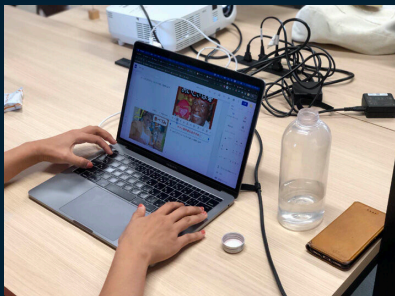
る働ける洲本市にしていこうということを掲げています。その一環としてデジタル体験会を毎年開催しているのですが、小学生とか中学生に興味のある子が多いんだということが…アンケートの結果をみると、デジタル体験会をまたやってほしいという意見や、島外に行っても学びたいっていう人も多くてですね、島外に行かないと学べないという状況は、できないことの積み重ねになってしまうので、こうしたことをできるようにしていってというのが若者にここで生活してもらうことにも繋がっていくのかなという風に思います。他にも「洲本市はデジタル化されていると思いますか」と尋ねると「されていない」と回答する人の方が多かったりするので、やっぱり地域のデジタル化を進めつつ、それを使って働いたり魅力を作ったりしながら、小学生、中学生、高校生が帰ってきた時に色んな仕事に就けるようになってれば良いなと思います。2022 年に開催した時も小学生や中学生から、病院や市役所がデジタル化されてると嬉しい、過疎地域がデジタル化されていると嬉しいという声がありました。やっぱり子どもたちも色んなことを考えているんだなって改めて感じますし、それをどうやって実現させていくのか、洲本市としての成功体験を身に付けるということを我々は考えています。

2023 年はシマトワークスさんと連携させて頂いて…これまで AKKODiS 主催で色々やってきましたが、AKKODiS ってそもそも何だっというところで苦労してたんですけども、活動していく中で地元の企業さんとも連携できるようになってきました。今年の体験会では Google でスク립トを組んで掲示板を作ったり、Web サイトを作るような本格的なこともできるようになってきています。ただ我々も企業なので、洲本でやったことがちゃんと会社に利益として還元できればと思っています。参加者の反応等を見ながら、これをサービスとして販売できる形になることを目指しています。

告知も兼ねるんですが 11 月に地元の事業者さんと連携した形でサウナイベントを行う予定です。サウナ自体は地元で色々用意してもらっているんですけども、ウェブサイトは僕らの方で作りました (Slide2G)。体験会で終わらずに、それを題材としてゆくゆくはこうしたウェブサイトの作成が住民の皆様でできるようになると仕事で循環してくるような形になるのかなと思いますし、イベントの申し込みの時はちょっとプログラムを変えて QR コードでチェックインできる仕組みを自分で作ったり、デジタルのあり方は変わってくるのかなって思います。洲本でまず取り組んで、AKKODiS のサービスとして戻してやるというところで (Slide2H)、洲本市ってこういう初めてのことを前向きに捉えてくれるところが非常にありがたいと思っています。

デジタル体験会からの発展として・・・地域への展開

AKKODiS

<https://www.mulkfamily.co.jp/awajishima-saunafes2023/>

Website作成

洲本市で実施するサウナイベント
のWebサイト作成で利用

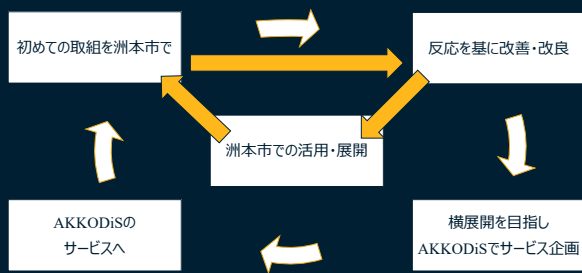
2G

© AKKODiS 2023 この資料は関係者限りの資料であり、Adesso Groupに無断での使用・開示を禁じます

13

持続可能な取組へ

AKKODiS



2H

す。洲本市での反応をみて、1つサービスとして作れたら事業部が横展開していく、そしてまた別の取り組みを洲本でしていくというような形を想定しています。

洲本市での活用・展開が正直できていないのがまだ弱いところなのですが、今回サウナイベントとかをきっかけに道が出てきたのかなと…今後増やしていきながら自分たちのサービスとして利益も出して、洲本にも還元していければと思っています。AKKODiSからの発表は以上です。ありがとうございました。

Discussion

野田 | 発表者の皆様ありがとうございました。まずは高山さんから…既に楠さんからチャットでコメントを頂いていますが、同じようなことを僕もお聞きしたいと思っています。鈴木先生がちらりと仰っていた課題の部分、これについて鈴木先生や高山さんにお伺いしたいのですが、いかがでしょうか。

高山 | NPO 法人をつくる段階での課題について言えば、現地要員の確保ってというのがあります。僕は淡路島で活動したいと思っているんですけど、移住をして完全に淡路島の人になる訳じゃなくて、ずっと第二の故郷としてヨソモノでありたいので、意思疎通がちゃんと取れて活動できる人間が別に必要だと思っています。

野田 | ありがとうございます。続いて鈴木先生からお願いします。おそらく先程仰っていたのは設計に取り組んでいた当時の課題かと思うんですが、そういった部分も含めてコメント頂きたいと思います。

鈴木 | 実はこの改修プロジェクトはめちゃくちゃ時間が掛かりました。延べ500名以上のマンパワーを要したということでしたが、1日2日ではなく長期戦を覚悟して取り組まないといけない。移動の問題は前回議論されましたので避けますけども、いかに継続させるのが大きな課題になる訳ですね。変わっていく訳です、学生も。高山君も3年関わりましたけども、大学院に行かない子は1年2年しか関わらないので、継続性をいかに確保するのかというところが非常に大変でした。もう1つ、私は国立大から私立大に変わったので大学の違いを肌で感じてる訳ですけども、こうした取り組みに対するスタンスは大学によって色々異なるというか、それが課題になったりもします。私が心掛けたのは学生が主体的に動けるように全面的にバックアップするということでした。幅広く学生に声を掛けて頂いて、研究室にこだわることなく参加できる雰囲気を作り出していったということですね。そういう意味で言いますと、例えば卒業設計なんかはよく年度末とかに大学

間で連携して色んな展示会とかやりますよね。あれなんかは完全に建築学生の間で定着している訳で、ああいった大学を越えたプロジェクトチームができないかなと考えています。今回の高山君の取り組みが1つのきっかけになればと思います。

野田 | ありがとうございます。大学の体制によって学生と地域との関係も色々あって、単位を伴うかそうでないか、学部学科の専門性とリンクするか否かみたいなのは前回も触れさせて頂いた部分ですね。国立と私立の違いについては僕も似たような身として深々と違いを感じてます。そうした意味において、高山さんのビジョンの中で、あくまで現場に赴く学生を主体としてどのように持続可能にしていけるかというのは重要な論点ですね。引き続きまたお話を聞かせて頂ければと思います。

続きまして、大同印刷所の大西さんにも質問させて下さい。企業として参画する上での、ある種の宿命とも呼ぶべきところですが…発表の中ではっきりとは触れていた訳ではないのですが、事業性とか採算性という部分で、例えば何年計画だとか、特許技術として昇華させたいとか、目標や撤退のラインであったり、非常に生々しい部分ではあります。が差し支えない範囲でいかがでしょうか。

大西 | はい、まず紙というメディア自体が衰退しているということもありまして、これをどう広げていこうか、まさしくそのマネタイズのところが今の大きな課題になっています。結局それができないと持続可能ではなくなってしまふというところがあります。どういう加工をしてどういう風に活用していくことができるのだろうか、例えば印刷素材以外のアクセサリ用途とか、色んな可能性を考えながら行けるところまで行こうじゃないかということと、まちづくりや里山整備に関わらせて頂くというのは元々好きでやってるライフワークの一環でもありますので、ビジネスも大きなテーマとしてあるんですけれども、そういうところだけではないということで、無理なく関われる範囲で続けていけたらなと思っています。

野田 | 発表でのお話も踏まえると、企業人としての人格と、地域に関わる一人の人間としての人格を上手に両方走らせながら取り組んでいらっしゃる印象を受けました。ありがとうございます。

そういった話は楠さんから感じる部分があったりして、例えば副業や兼業という形は非常に今日的な地域への関わり方だなと思います。一方でそういうものが認められ辛い企業も多くある中で、いわゆる社会人の巻き込み方について補足説明を頂きたいなと思いました。世の中にはマネーで動く人やロジックで動く人、ロマンで動く人とか色々いると思うんですが、学生の巻き込み方とはまた違った、社

会人の仲間の作り方みたいなものがあるのでしょうか。

楠 | ありがとうございます。勿論、どんだけ儲かるのみたいな事業効果って、こういうテーマで参画する時には絶対上司に説明しろって言われます。でも逆にその説明がクリアできれば、ある程度は何でもできるんじゃないかって思っています。先程チラッと説明しましたが、菜の花でオイルを絞って瓶に入れて販売してたりするんですけど、その瓶を再利用するサイクルを作ってサステナブルに貢献するテーマを設定した時に、企業の人めっちゃくちゃ食い付くんですね。リサイクルに適したガラス素材とかを作ってるメーカーは活躍する場がめっちゃ欲しいんですよ。ただ彼らは卸売メーカーとかしか知り合いがないから、実際にどうやって繋がっていったら良いかわからない。そこを紹介してあげるだけですごく乗ってくれるっていうのはあつたりします。

正直本当にこのテーマで入りたいっていう思いさえあればどうとでもなれると思うので、やっぱりどれだけこのテーマが魅力的で面白いのかということはどう伝えられるかがキーになるんじゃないかなと思います。

野田 | ありがとうございます。発表の後半にあった教育のお話も含めて言うと、今こういうことに取り組んでいる楠さんや他の方々が例えば今後社内で更に上のポストになった時に、部下となる次の世代のこうした思いをどんどん認めていく価値観というか、文化を作ろうとしているという風にも受け取れるコメントでした。教育を受けた人間が次の教育者になるっていう中長期的な視点で考えることもポイントなのだと思います。

最後に玉川さんですが、「島内で学べるなら学びたい」という潜在層みたいな人間がそれなりにいるということだったり、社会実験という語弊があるかもしれないんですが、リサーチとアーカイブを繰り返して常に効果検証しながら注意深くビジネスチャンスを探りつつ活動されているという印象を受けました。こうした点において、同様のプログラムを他の地域でも実装されている中で…感覚的に答えて頂ければと思うんですが、洲本市の固有性みたいなものを感じられることは他にもあるんですか。行政のリアクションについては既に触れられていましたが、もう1つは島であるということが物理的にも情緒的にも色んな部分に関わってくるのかなと思うんですけれども、何かその辺り、他の地域と比べた時の洲本の特徴があればお願いします。

玉川 | はい、ありがとうございます。私自身も洲本市さん以外に色んな自治体に出入りさせて頂いてるんですけど、やっぱり洲本市さんのフットワークが軽いなっていうのは…高橋さんの人柄なのか企画課の雰囲気なのか、洲本市自体がそうなのか、色んな要素が絡まっているとは思

んですけど一番はやっぱりそこですね。前例踏襲が色んな自治体さんで言われている部分なんですけど、初めてのことだけやってみようっていうところは僕が知っている中では…さっき資料で紹介した自治体の中ではトップクラスだっている風に思っています。関西ノリみたいなのところもあるのかもしれないですけども、同じ関西でもお堅いところはあったりするので、これだけ開放的なのは一つの要素かなと思います。

こういったワーキングも含めて、産学連携や色んな関係人口を作りたいという自治体は多くて、うちも社員数が多いので非常に感謝はされるものの、やっぱりなかなか受け入れ辛いという地域もあります。域学連携を10年も続けられたことは強みだと感じますし、そういった経験があるからこそ我々も受け入れて頂けたのかなと感じてる部分はあります。

野田 | ありがとうございます。洲本市のフットワークの話は色んな場面で聞きますが、企業の方からもそうしたお話が出てくることで改めて重要だと認識しました。

この話から少し広げて、経験談やエピソードをお伺いしたいと思います。皆様それぞれの立場で地域の外から関わりを作ろうとしていたり、その関わりを続けようとしていたりする中で、いわゆるカウンターパート的な方と繋がることがあるのだと思いますが、例えば地元のこういう立場の人間がいたから、或いはこうした能力を持つ人間がいたから助かった、ありがたかったみたいなことがあれば教えて頂きたいなと思います。思い当たった方から発言して頂ければ。

高山 | 域学連携の話とはちょっとずれるんですけど、僕は淡路島で卒業論文を書いている…洲本商店街の7丁目に4ヶ月ぐらい居候させてもらいながら、商店街の建物一軒一軒を測量させてもらって、どういう家の歴史があるのかを家の人に聞いて回っていました。今までプロジェクトで洲本には来ていたものの商店街に関わった訳ではなかったので、ヨソモノが来て家を隅々まで見せてくれというのは抵抗があったと思うんですけど、7丁目の会長の津田さんという方が、研究の為に協力してやってってくれている風に回って下さったんですよ。それで建物の端から端まで貴重なデータを取らせてもらって論文を書いたことがきっかけで今に至るので、津田さんが自分の時間削って親身に手伝って下さったのは大変ありがたかったです。

野田 | ありがとうございます。なかなか今はそんな研究できないですからね。地域の代表者として窓口になって頂くというのは僕自身も経験があります。とてもありがたいことですね。他の方はいかがでしょうか。

玉川 | 発表の時に少しお話ししたんですけども、3年

目を迎えた時に地元企業さんとコミュニケーションする中で、主催は地元で、コンテンツをAKKODiSさんをお願いできるかっていう相談を頂けたのが非常にありがたかったなって思っています。

うちだけでやるのもできなくもないんですけど、回数を重ねたり横展開させる上ではやり辛いところもあって…会社に説明するにも何回同じことやるんだという指摘もありますし、これまでは実証実験だからということでやってきたんですけど、シマトワークスさんが間に入ってくれたおかげで複数開催がすごくやりやすくなりました。3年間やってきた中で、自分でやるだけではなく島内で連携してやることができるようになったのはありがたかったです。サウナの話も別の事業者さんなんですけど、こういった企業さんが増えると、若者が働けるという最終的な目標にも繋がると思いますし、前向きに受け入れてくれる企業さんが増えていくと良いなと思っています。

野田 | 同じ志を持った上で、上手に舞台を整えてくれる地元企業の存在は重要ですね。ありがとうございます。

楠 | 僕の方からもいいですか。発表では今していることをあまり喋ってなかったのでそれを補足しながら喋れればと思うんですけど、今週末に淡路島で島祭りがあって、そこで露店を出して先程のエコプロジェクトのサイクルを小さく1周体験できるイベントをやります。手動の機械を設置して、油ってこんなに簡単に絞れるんだよっていうのを体験して頂いたり、家の廃油を使ってハロウィンのキャンドルみたいなものを作ろうという体験をするんですね。

僕が参画して1年経ってないぐらいなんですけど、こうしたことをどっかでできないですかって伝えただけで祭りを紹介して頂いたり場所を確保してもらったり、市の職員さんだけでなく農家の方が協力してくれたりみたいな感じで…きっかけを作ったり取りまとめをする人が現れただけで、皆動いてくれるのがすごい素敵だなと思いました。

野田 | ありがとうございます。同じくコニカミノルタの宮木様からもコメントを頂いてます。今の話にも通ずる内容ですね。【企業でも地域でも、新たな取り組みを始める時には「リターンではなく、自分の興味関心・使命感・大義等を行動原理とする感性と実行力を持ち、できない理由を並べず“どうしたら少しでも前に進むか”という観点で実働しながら、必要なリソースを自ら集めることを厭わず、これらの“プロセスそのものに快感を覚えている人”が必要だと考察しており、このような人を「変態」と呼んでいます】。そうですね、これまでに皆さんが挙げて下さった地元のキーパーソンの方々も、どこかにそうした変態的エッセンスを持ち合わせている人間なのかなという風に思います。企業であれ何であれリターンを第一義としないこ

とや、プロセスに価値を見出してみるのは大事ですね。結果は結果で当然重要ですが、プロセスもまたひとつの成果であるというふうな見方を持っている方が洲本には多いように思いますし、これからも必要とされるキャラクターなのではないかと思いました。ありがとうございます。ここでコメンテーターの辻さんにもボールを投げさせて頂きます。さっきまでの話題に関連するコメントでも、冒頭のプレゼンテーションに対するものでも結構です。いかがでしょうか。

辻 | はい、面白いなあと思いながら聞かせて頂きました。大学だけでなく企業さんが入る、そして地域の側もウェルカムという形で、そこに高橋さん…個人名を言っちゃっても良いかなというぐらい熱心に行政さんが関わるっていう、多種多様な方が集まるとこんな面白いことになるんだなっていうのを実感させて頂きました。

下世話なことを聞くんですが、企業さんが関わっておられる中で採算を合わせるっていうところで、事業性はどうにかなるよっていう風に心強いことを仰って頂いたんですけども、こういう場に参加したり地域に入られるにあたって、今日コニカミノルタさんなんて何人も出てこられてるんですけど、そういった方たちは手弁当の感覚で来ていられるんですか。

楠 | 何かイベントをやって楽しかったら終わりでは勿論ダメで…僕らは印刷機のメーカーなんですよ実は。新しいイベントって絶対販促や情報提供が必要ですよ、その印刷物を全部僕たちがやりますっていう試算で計画する、みたいな感じです。

辻 | なるほど。

野田 | 辻さんのコメントに関して、他の皆様からのご意見を聞いてみたいと思うんですけど、大西さんいかがでしょうか。

大西 | そうですね、営利事業としての部分もあればライフワークとしてやっている紙漉きの原材料確保の為という両立の中で、せめぎ合いというんでしょうか、あわじ里山プロジェクトさんや安乎の地域のお役に立てたらなっていう部分や、紙だけじゃなしに竹林整備としてももっとやるんじゃないのかなというところもあったりして…先程のような展示会で全国の、具体的には竹の粉からプラスチックを作ったりしているような方と知り合って、素材としての新しい可能性も見えてきたり、そうした学びが自分の未来にとっても役に立つのではと思います。それが洲本市のお役にも立てたらなっていう風に思いながら関わらせて頂いています。今年度は兵庫県の補助金の採択を受けているので、出張等については公費でもサポート頂いています。

玉川 | うちも回答させて頂くと、採算性だけで言うと洲本

だけでは採算は取れてないです。ただ洲本で実証実験のよう形でさせて頂いて、その成果がパンフレットに載るぐらいにはなってるんですね。それがサービスになるという点では今後も長い目でというのがひとつあります。

あとこうした活動は、うちの社員も何人か地域に入ってますけど研修の為なんですよ。なので広義の投資ということで…今日も色々お話を聞かせて頂いた中で、本人のプラスになって何かに反映されれば良いなという風に思いますし、人材派遣っていう点では、お客様に対しての新たな価値観であったり技術であったり、何かで単価が上がっていくことになれば採算が取れてくる可能性はあるのかなって。洲本市だけでなく色んな地域でやってるので、広い目線で見た時に洲本としての活動がプラスになればという風に意識しています。ここだけの採算だけを目指してはおらず、色々な要素が絡み合いながらできれば良いのかなと思っています。

野田 | ありがとうございます。時間が来てしまったので最後にもう一周、パネリストの皆様から一言ずつ頂きたいと思います。この公開座談会の主旨のひとつとして、来月の域学連携シンポジウムに向けた提言という部分がございしますので、企業の皆様からは今後の産学官の連携といいますか、三者の連携を前向きに進めていくにあたって、大学や学生に求めることや、具体的な取り組み内容等についてコメント頂ければと思います。順番は問いませんので思い付いた方からどうぞ。

高山 | 僕は洲本市での活動が自分にとって本当に良い経験やと思ったんで現役学生にも是非こうした機会を作りたいという気持ちでやってるんですけど、今も京都橘大学の学生を…鈴木先生の紹介でレガサルトのインターンシップという形で来てもらったりして、タケダ玩具店さんの現地調査に行く時も同行してもらっているのですが、そんな感じで多くの学生に最初は合宿なんかで窓口を広げながら、卒業後も関わっていききたいという変な奴、突出した奴を発掘できたらと思っています。

発表の補足なんですけど NPO 法人も人を集めてまして、龍谷大学とか京都大学とか域学連携の卒業生に声を掛けてメンバーに入ってもらったりしてるところで、卒業後も何か関わりたい思いを持ってるけど関わり方が分からない人たちの窓口として、NPO を通して洲本市で活動できたらなっていう風に思っているんで、そういう未来を持っています。

野田 | インターンの子、高山さんにとっては弟弟子に当たるんですかね。僕自身も学生の時から洲本にお邪魔していて、今は先生として学生を連れて行っている状態ですが、今後も世代を超えた活動が増えていく中で、今回の NPO

のような基盤整備が必要になっていくのかなと思います。

楠 | これは学生にというよりも教授の方や大学の職員さんに対してという形になるのかなと思うんですけど、場は作ったんで体験したらどうかとか、そういった形での促しが多いんじゃないかなって思っています。勿論それは良いことだと思いますし、良い体験が生まれて、変態が出てきて、卒業しても絡み続けるとか、自分の肥やしにするっていうのは…生まれたいとは思わないんですけど相当奇跡に近いかなって思うんですよね。なので場を作って送り込んで終わりという訳ではなくて、先生方であたり連携に絡んでいる方々がきちんと自分ごととして、なぜ送り込むのかっていうのを学生さんたちに話したら良いのかなっていう風に思います。

これは企業でも一緒に、管理職とか上層部の方が新しい事業を作る場を生み出して、若者に手を挙げてっていう風に言うんですけど、実際に若者が参画したら自分で道を切り開かないといけない場面が多くてですね、そこから意図的に良い人材を創出して成長させるのは奇跡に近いなって思っているの、その辺の意図や理由っていうところも一緒になって作っていければなって思っているの、そういった連携ができれば嬉しいです。

野田 | ありがとうございます。僕自身も背筋が伸びるお話でした。今うちのラボでは洲本市の宇谷っていう所にお邪魔してるんですけど、僕が前の大学にいた時に域学連携の受け入れをして頂いていた協力隊の方が定住した集落なんですね。当時から何か一緒に面白いことできたら良いねって話してるうちに、今は学生たちと一緒にその集落の地域づくりのお手伝いを頑張っているところなんですけど、その辺りの経緯を…事あるごとに学生に話してはいましたが、充分な説明責任を果たせていたかということですね。楠さんの話を聞いていて、真水ではない関係というか、地域との関わりのコンテキストをきちんと伝えたり、継承しなきゃいけないなと思いました。続いてどなたかいかがでしょうか。

玉川 | じゃあ僕行きます。域学連携って色んな大学生さんが関わって良いなって思ってる部分ではあるんですけど、地元の小中高校生にもうちちょっとアプローチできればなっていう風に思っているのと、手に職をつけるということじゃないですけど、体験会を通してホームページを作れるようになった地元の高校生とかが、大学に出ても洲本に関わり続けられる仕組みが作れたらなと思っていて、是非そういったところがうまくいくと良いなと思っています。

野田 | ありがとうございます。先程の楠さんからの発言も踏まえて、色んなことが生まれていけばと思います。域学連携が10周年を迎える訳ですが、それでもまだ玉川

さんの仰る通り、関わりの薄い層は沢山いると思っていて…僕がすごく感じているのが奥様方なんですよね。地元のおっちゃんたちが一緒にやろうぜって積極的に関わって下さる中で、それを支えているのは実は奥様方です。そういった方々のニーズにも目を光らせるというか、恩返しを含めて接点を作っていかなきゃいけないと思いました。

大西 | 学生さんとの関わりは1年か、長くても在学中というのが基本です。OBOGになっても関わりたいという人も勿論いると思うんですけど、基本的には代替わりしていきます。入ってくる学生さんを巻き込んでいける魅力をいかに作れるかっていうところが僕にとっての今後の課題で、エネルギーが要るなって思ったりします。

地元の方々も連れてきた学生に毎年同じことを説明しないといけないっていうのを仰っていてですね、冗談半分ではあったんですけどマンネリというか疲れというか…地域の基礎知識的なところをもっとこっかがうまいことサポートする、接着剤のような役割も少しはお手伝いしないといけないかなと思っています。

野田 | その類の話は僕もよく聞きますね。確かにそうだなと思う一方で両面あるなとも思っていて、受け入れる地元が責任を持ってレクチャーすべきだろうということもある意味では正解なのかもしれません。ただ知識や経験をどう継承していくかについては、例えば企業のような「数年で循環しない人たち」が適任である可能性はありますね。ありがとうございます。

最後に、総括という訳ではないんですが、これまでのお話を踏まえて鈴木先生からコメントを頂きたいなと思いますがいかがでしょうか。

鈴木 | はい、指導教員の役割っていう話で、私は学生に対して社会に対してどう関わっていくのか、建築を通じてどう社会貢献していくのかということをよく話しているんですけども、そういう意味では、域学連携を通して社会と繋がることは非常に大事な経験を得られる訳ですね。具体的に洲本市と関わることによって学生が目に見える成長をして…下手な大学教育では絶対できないですね。大学は学生を暖かく見守って、成長過程をしっかりと見据えてバックアップしていくことが大事だと思います。社会人になって繋がりを広げていくことになれば、より大きな社会的ネットワークとして地域と関わっていけるんじゃないかなと思います。

野田 | ありがとうございます。定刻を少し越えてしまったのですが第2夜はここで一旦の区切りとさせていただきます。前回と同様、引き続きディスカッションにご参加頂ける方は残って頂いて、もう少しだけお話できればと思います。それでは皆様、本日はありがとうございました。

After Discussion

鈴木 | ちょっと高山君にお聞きしたいんですけど、そのNPOはホームページか何かを立ち上げてるんですか。

高山 | いえ、ホームページどころかまだ申請もしてなくて、申請に必要な会員数が今やっと集まったっていう形で、事業内容とか予算とかを相談中です。

鈴木 | 法人として認定される為には色々規約作ったりとかありますね。

野田 | NPOの登記は半年近く掛かりますからね。

高山 | タケダ玩具店さんの譲渡も、建物の整備や手続の関係でまだ時間は掛かると思うんで、譲渡してもらうまでにNPOができたらなっていう形で思ってます。まだちょっと長い目で見ておいて頂けたらと思います。

野田 | 研究所って個人的にすごい大事だと思っていて、前回もそれに近いコメントをしましたが、域学連携を研究として、学術的に昇華し切れていないんですよ大学は。だから例えば卒業論文や修士論文をアーカイブしていくとか、そういった部分も非常に大事な役割だと思います。洲本市の一連の取り組みを他者が学習可能な一般理論にするっていうところを本当は大学はやらないといけないんですが、この度のNPOのようなインカレッジな主体がそれを進めていくのも新しいなと思って聞いていました。

高山 | 最初に考えているのは「域学連携史」という歴史を資料として取りまとめたっていうのがあって、最終的には…域学連携に特化した論文って殆ど出ていないので、そういった学会みたいなのを作れたらなっていうのを京都大学の鈴木君と話していて、教授の方々にもご賛同ご協力頂きたいと思っていますので、もう少し整ったらお話しさせて頂ければと思っています。

野田 | 学会ってだいたい研究者だけのサロンになっちゃってるので、今日お集まり頂いた皆様とか地元の方とか含めたコミュニティとして成長していければ面白いですね。

楠 | 逆に大学側や教育者側から企業に期待するものって何かあるんですか。

野田 | そうですね…学生にも色々いて、能力の大小はまあ仕方ないとしても、端的に言うとか皆いい加減なんですよ。時間とか納期を守れないとか、メールちゃんと書けないとかレスポンスが遅いとか。そういうところを毎回叩き込まないといけない。さっきパネリストの皆さんには地域側に必要な人、いてくれたらありがたい人についてお聞きしましたが、僕が個人的に思うのは学生の不義理をちゃんと叱れる人ですね。これも関わり方次第ではあるんですけど、学生を甘やかすのではなくクライアント然とした態度で接することも大事だと思っていて、そういうのを企業の方の背中を見ながら学ぶこともあるんだらうなっていうつも

思っていたりします。

もうひとつはさっきの話とも近いんですけど、学生の起業なんかは流行っていますよね。起業したいんですよ学生にもよく出会いますが、ビジョンはともかく実務のイロハを身に付ける機会がありません。超基本的なことと言うと確定申告とか契約の3点セットとか…それを企業の方に教えてくれというのも無茶というか失礼な話なんですけど、産学官の連携を通していわゆるビジネスってこういう風にできているんだとか、仕事ってこういう感じで生み出されていくんだというのを学ばせて頂ければと思っています。

今は仕事に就く時代ではなく自分で仕事をつくる時代だと思っているので、そういう実例を皆様の姿から、僕自身も勉強したいと思っています。鈴木先生からはいかがですか。

鈴木 | 学生と一言と言っても3回生、4回生、大学院生で全然状況が違うんですよ。色々機会をもらったら良いと思うんですけどね、4回生なら将来的に論文としてまとめるような展望で取り組んでほしいし、学年に合わせて対応頂けると大学としては理想かなと思います。

楠 | 就活を控えた年齢と、そうじゃない学生は違いますもんね。

野田 | これ正解とは限らないと思いつつの発言なんですけど、こういう関わりの中でピンときた学生を企業がヘッドハンティングするとか、域学連携が就活のプラットフォームになっていくのは選択肢としてあるのかなとも思っています。正直インターンとか関係者全員がしんどいと思うので。

楠 | 実際に僕のチームでは去年の年末に似たようなことをやりましたよ。

野田 | そういうの良いですよ。インターンの枠組み自体をガラッと変えて欲しいなって企業の方には思っています。夏休みインターンでいないのでゼミ出れません、卒論の調査ができませんみたいなことばかりで大学としては迷惑なんですよ（笑）。インターンって企業の方にとっても面倒だと思いますし、例えば域学連携の取り組みと企業インターンを合わせ技でやっていくと、お互いにとって効率的じゃないかなと思います。

玉川 | 洲本ではないんですが、別の地域で会社のインターンとして地域に関わらせるっていうのを今年初めてやってみたんですね。今やってるプログラムの短縮版のような形で、うちを志望している学生が3泊4日で地域に赴いて、インタビューをしながら地域課題の解決手段となるアプリを開発するっていうことをやって。他の企業と違う見方で学生の人となりを知ることができて面白いと思いました。まだトライアルなんで大人数ではやっていないのですが評

判は良くて、大学生を連れてきてくれるということで自治体さんにも結構喜ばれました。今後は洲本でもやっていくんじゃないかなと思ったところではあります。

野田 | 地元のニーズと合致していれば三方良しの取り組みですね。洲本が単に会場として使われちゃうだけだと色々問題も起こってくるので、入念なマッチングは大事なかなと思いますが、非常に可能性のある試みですね。

辻 | 企業さんのインターンシップの話、かつての10年前、20年前ぐらいと比べて、企業さんの地域への入り方はかなり変わってきてるなと思いました。今日はこういう方々が集まった場だからそう感じたのかもしれないですけど、いわゆるCSRみたいな、バスで100人ぐらいやって来てゴミ拾いして帰っていくみたいな時代とは違ってきたのかなって。

野田 | 今の方が健全というか、下心はない気はしますよね。

辻 | そうですね。地域で何かやってますっていうのを見ただけで帰って、その人たちが立ち去った後が大変っていうような活動ではなくて。

確かに学生が働き手になる前準備としての場を域学連携でつくることもそうですが、社会人になってもああやって地域に関わって活動している人がいることを知って、地域や社会の一員として還元できるような本当の人としての生き方を考える場になれば良いなとすごく思っていて。そういう大人をかつては身近に見れていたと思うんですよ。でももう今は無理じゃないですか。会社入っちゃったら、もうその人がどんな働き方をしている、家で何をやっていて、休日に何をやっていてっていうのは皆知らない。私たちもそうだけど関係性が途切れちゃって、そうした日常というか…非日常かもしれないけど、見れる場がすごく少ないなって思っていて。学生さんがそういう関わりを見ることで、自分の生き方とか暮らし方、もっと根本的なところを見れるのが域学連携の良いところだなっていう風に思っていました。

野田 | 同感です。さっき僕が「正解とは限らない」と前置きしたのはそういう部分もあって…つまり我々はプログラムとして、仕事として地域にコミットしてますっていう背中を学生に見せれば良いのか、或いは仕事と呼べるかは分かんないけど地域に関わりたいたから、副業にせよ兼業にせよライフワークにせよ片足だけどしっかり突っ込んでいる姿を見せるべきなのかというところは両面あるなという風に思います。

やっぱり採算性が担保できて、ビジネスとして成立している関わり方であるべきなのかもしれないですけど、土日に趣味でやってるよという姿もまた、彼ら彼女らにとっては自分を重ねる可能性として見出せる部分が大きいのかなと

も思いました。

楠 | どちらも大事なんですけど、僕は土日これをやっているんじゃないで平日にやっている訳ですね。平日ど真ん中にこんなに自由なことをやっているっていう背中を見せたいです。

野田 | それも正解ですね。

辻 | 良いですね。

楠 | 会社の規模にもよると思うんですけど、うちだとめっちゃ人数いるんで、僕はよく学生さんだけじゃなくてうちの若手とかに面白そうですねって言われるんですよ。それはとても効果があると思っていて。会社に入っちゃって、仕事って我慢しないといけないとか上から言われたことを効率よくこなさないといけないみたいな、そっちのマインドに皆なっちゃうんですよ。自分の頭で考えてやりたいことをやっていけば良いのに、それが不可能になるって勝手に思っちゃう人が多い。地方創生が社会で認知されていく中で、うまく活用して真面目に遊びながら社会貢献するみたいなことが自由にできていくのと良いなって思っています。

玉川 | 真面目に遊べるっていうのは大事な気がしますね。

野田 | 流行り廃りみたいな…どこ行ってもSDGsだよ、みたいなものもある中で、安易に揺さぶられずに上手に乗りこなしながら社会貢献と自己満足を重ねていくイメージですね。そんなスタンスの皆さんが、さっきも触れましたが上司になって、意思決定できるセクションになった時に新たな文化が確立されるのかなと思います。

僕はよく学生に「君らがじいちゃんばあちゃんになった時に同じように学生を受け入れられるか。いつかはそうならないとダメなんだ」と言っていて。次の10年っていうお題が今回与えられている訳なんですけど、もっと長い目線で考えた時にこれから入社する社会人とか、行政で言えば第二、第三の高橋壺が生まれるかっていうところもそうなんですけど、その為の何と言うか、基盤とか土壌みたいなものを作っていくのが今後の10年なのかもしれないですね。今回登壇頂いた方々の思考や取り組みも、それって当たり前だよなって言われるような。

楠 | 本当に、やりたいことを意外と自由にできるんですよね、ちゃんと説明できれば。

野田 | そういうクレバーさやしたたかさみたいなところを学生は是非学んで、盗んでほしい。

楠 | そこはもう自分の意思があるかどうかですね。僕が今思っていることが正しいと信じていますし、説明を求められれば幾らでも説明できるので。

辻 | 意思もそうだけど、多分その技術は企業さんの中で培われたと思うんですよ。助成金とかもそうなんですが、

説明できちゃうってところが、学生さんが憧れる技術なのかなって。

野田 | 確かに、精神論のように見えて実は技術論ですよ。

楠 | そうですね。ビジネスの体系を上手いこと整理して説明していくっていうスキルがもっと日本に広まれば良いなと思います。

野田 | 僕も最近は学生に補助金の通し方とか教え始めてるんですよ。大学は研究機関なのであまり実学に傾き過ぎてもアレなんですけど、学生からそういうことをやってみたいというニーズがあった時に、大学教員としての自分自身がどう対応していけるかっていうのは大事だなって思っています。

玉川 | さっきの「遊ぶ」じゃないですけど、僕も根本は自分が作りたいものを作るってところから始まっていますね、結果的にサービスになったから会社にも説明がついたってところもあるんですけど、例えばクラウドを使って何かを作ってみたいなっていう欲求の中から、じゃあ何ができるかなっていうことでデジタル体験会をやったりとか。趣味に走るものもあって、僕の専門はセキュリティなんですけど、その啓発活動とかセキュリティ対策の支援もやっていたりするんですけど、そこで衝撃的だったのは、中学校の女の子がホワイハッカーに憧れて体験会に来るってことがあって。

野田 | すごくですね。ホワイハッカーという言葉はどこで知ったんですかね（笑）。

玉川 | すごく積極的でお父さんお母さんも一緒に受けてたんですけど、ウイルスに感染するとクレジットカードの番号とかこうやって抜かれちゃいますよ、気を付けて下さいって話しているとお母さんの方から歓声が上がって（笑）。初めての取り組みだったんですが意外とそういう反応があったりして、自分のやりたいことと現地のニーズが合えば本当に良いなと思います。

マーケティングのことばかり考えていると何も進まないような気がしますし、やりたいことをやりながらトライ＆エラーを楽しんでいたら賛同して頂ける方も増えるのかなと思うので、地元の方にも楽しく関わっている姿を見せるのは大事なかなと思います。会社の中では何してるのか分かんないってよく言われるんですけど（笑）、それでもまあ楽しそうにしていると興味を持ってくれる人も結構いるので、社内では成果を出すことがやっぱり大事ですが、現地では楽しくやりつつ、成果が付いてくると双方にとって良いなと思って活動しています。

楠 | それめっちゃ重要な要素だと思ってて、外に出てお客さんに使ってもらえる場でやりたいことをやるのが大事なかなって思います。これをやらないで社内だけでやっ

ちゃう人がめっちゃ多いんですよ。そうになると誰も価値を感じられないので意味がないんですね。ただそれで何も社会に貢献してないのに仕事は回っちゃうことは結構あって。玉川さんとかはやりたいことを好き勝手やってるんだけど外でやってるから、それを楽しいって思ってくれる人が出てきて、広がったりビジネスになったりするんじゃないかなって思います。

野田 | 研究にも社会への成果が求められるものと、世の中に受け入れられるかは関係ないやっていうのがあって、いずれにしてもやりたいことを自由にやってる姿は学生にも見せたいなと思いますし、Doingで見せるのかBeingで見せるのかという話もありますね。企業の皆さんはDoingもそうなんですけど、先程までの議論を踏まえるとBeingの部分…生き方や働き方、楽しみ方みたいなものを外で示していくことも大事だなと思いました。

宮木 | お疲れ様です。貴重な機会にうちのメンバーを参加させて頂きありがとうございます。楠さんに呼んで頂いて参加しましたコニカミノルタの宮木です。

今のお話を聞いてて…大学の研究と一緒にするなって思われるかもしれないんですけど、自分の企業が作ってる価値を自分の言葉で、自分の責任で説明する能力っていうのがめっちゃくちゃ大事なんだなと思いました。足が長い研究だったとしても私利私欲の為じゃなくて展望がちゃんとあって、それを結局コミュニケーションというか発信する力というか、説明能力が求められるんだと思ってて。会社も一緒に、今やってる活動の…価値があるどうかは分からないけどあるかもしれないからやってる人が納得してもらう為に、認めてもらえる説明が必要で、ただそれを他の誰かが作ってくれるだろうと期待している人が、学生さんの中にも多いのかなと思います。

社会に貢献したいんですけど言っても、誰かのスキームに乗っかるんじゃなくて、自分の興味関心に従って、自分がやりたいと思ってることが何らかの価値に繋がるかもしれないということを伝えていくのが…研究資金の獲得でも社内の認知でも俯瞰すると同じなのかなって。そういう時に大事なのは、楽しそうにしていることだと思うんですね。会社の中にも沢山いるんですよ、仕事つまんなそうにしてる人。僕は最近コニカミノルタに入ったんですけど、大学の先生とかとお付き合いすることも多くてですね、大学の先生も結構両極端で、自分の研究を生き活きと語る先生は魅力的で楽しいなと思うんですけど、つまんなそうな人もいて。楽しそうにやるっていうのは巻き込んでいく能力でもあるんだろうなって思いますね。

野田 | ありがとうございます。貢献スキームにフリーライドしてる人が多いというのは確かにそうだなと思ってい

て…会社という「自動社会貢献装置」に頼らずに自分で道のりを作れるかっていうのが大事である中で、「説明責任」というのが今日のキーワードの1つかなと思いました。自らでやっていることの価値を説明することもそうですし、自分で何もしなくて良い場所にいると責任感もなくなるし、頭使わなくなっちゃうんですね。うちのラボでも「うちに来るなら自分で自分の尻は拭けないとダメだ」って口酸っぱく言って。じゃないとうちに配属されても保たないよ、とか学生には言ってるんですけど、域学連携のプロジェクトも構造は同じで…地域に対して責任を持ってやるとか、提案の意義を説明できるかどうかっていうところは、ずっと付いて回るんだよって伝えながら檄を飛ばしています。

宮木 | 企業のイノベーションも地方の変革も現在の延長線上からいかに離脱していくかだと思って。何か決められたスキームに乗っていても焼き回しにしかならないので、平たく言うとおせっかいをしないといけないんですよね。

野田 | なるほど。そこのコネクトというか選択肢をいくつか見つけられるか、どのように伝えるか。

宮木 | だから余計なこととか、過去に誰もやったことないことをやる時に、それをやる意義とか価値とかが説明できないと人は共感してくれないし、ましてやお金を出してくれる訳ないんですよね。

野田 | 域学連携に着地させて言うと、受け入れの仕組みみたいな話が最近の課題として持ち上がっているんですけど、システムチックになり過ぎちゃうと今みたいな変革って生まれにくくなるんだろうなと思っていて。個人的には上手くいったことは即マニュアル化すれば良いと思っているんですけどその弊害もありそうだと。マニュアル化しつつ、でもそうじゃないやり方も積極的に探していきましようというやり方もあるんでしょうけど、なかなか良い正解が見つからないなと思っているところです。

宮木 | マニュアル化はもうめっちゃくちゃ大事なんですけど、マニュアル化した瞬間にさっき言ったフリーライダーを増産することに繋がっちゃうので、そこのジレンマはありますよね。企業でも一緒です。

野田 | 仰る通り、マニュアル化してフリーライダー人口を増やすのか、野放図状態にしてアウトサイダー人口に託すのかっていうのは賭けに近い部分もあって、大学のラボを運営していても思います。

宮木 | 域学連携の体系化は社会にとっては良いことでもありつつもイノベーション力は削がれていくというか、それで本当にあらゆるバージョンに立ち向かえるのかっていうことも思ったりします。

野田 | 行き当たりばったり性、ブリコラージュ性みたいな

ところを洲本市はひたすら鍛え続けていくのか、仕組み化によってフリーライダーをどんどん許容していくのか、今後も企業の皆さんには俯瞰したご意見をお伺いしたいところです。大学もそうですし、役場の高橋さんもずっと悩みながら走り続けてきたと思うので。

宮木 | 企業だと20%ルールみたいなのが流行っていたりして、それが結論とは思ってないんですけど、8割はマニュアルに則ったとしても2割は余計なことを、おせっかいをするぐらいのバランスで。ただずっと20%でやり続けるっていうのも結構無駄が多いので、マニュアル10割の1年や、何か新しいことを掴んだらそこに全振りする1年がどこかのタイミングであっても良いのかなって思います。

野田 | そうした時に、こちら側のベンチャー的というかスピード感のあるマインドへの地域の順応というか、地元のニーズとどう合致させていくのかというのは必ず直面する大きな壁だなと思います。プレイヤーが入れ替わっていく中で、ヨソモノと地域が同じ解像度で分かり合う為には、翻訳者が必要なのかもしれません。

宮木 | 地元の人からすると、誰かが関わり始めて消えていくっていうのが何周かすると嫌になっちゃうんじゃないかとか思ったりするので、継続的にどう関わっていくのかみたいなのは必要なんでしょうね。

野田 | ドラゴンクエストの堀井雄二の故郷だからという訳じゃないんですけど、地域の中に大きな物語が蓄積していくことが大事だと思っていて。色んな人が入れ替わり立ち代わり、今日の話だと変態とか怪物だとかも出てくる訳ですが、ごちゃごちゃとしているように見えても何らかの共通した目標があって、例えばガーターを塞いだ初心者用のボーリングみたいに、右往左往しながらも何となくは真っ直ぐの方向に地域が進んでいるような実感をどう作っていくのかなっていうところが重要で…洲本各地のプロジェクト渋滞みたいな部分を僕は今かなり心配しています。富栄養化によってアオコで汚れてしまった池みたいな状態を招きかねない怖さもあって。誰かがきちんと1本の筋道を意識して、皆が自由に好きなことをやっても動じない地域づくりの柱みたいなものが、これからは一層大事になってくるのかなっていう気がしますね。

楠 | 必要だと思いますね。もう振るい落とされているような地域もあるかもしれないです。

野田 | ヨソモノたちの活発な動きに疲れちゃったりとか。

楠 | 何も知らされずに色んなテーマが走っているの。

野田 | 地域づくりを諦めるのとは別の意味の諦めが生まれているのかもしれない。

宮木 | 企業の課題もそうだし地域もそうなんですけど、目先で何となく感じるマイナスをゼロにしようとする動きは

産業とか環境とかどの地域も内容は大体一緒で。企業もそうなんです、多様化するユーザーのニーズに応える為にどうするかみたいな。そうじゃなくて、そもそもあなたは何をしたいのっていうベクトルの方が、一体となった推進力が生まれるのかなと思いますね。

玉川 | うちもそれは一緒ですね。課題解決って目先のことがフォーカスされがちだと思っていて。うちの活動でも課題解決という言葉は全く使わない訳じゃないんですけど、未来を作って活動しましょうっていうのをよく言っていて。課題からじゃなくて、要は何を目指していくのかを決めることから始まって、それを実現する為の障壁を取り除くようなイメージで。目先の課題に向き過ぎると人口減少とか、そういった話になってくるので、まずは何を指したいかが定まって、同じ目標の人たちと連携していけたら良いなっていう感じですね。

野田 | ちょっと脈絡のない話になっちゃうんですけど、取り組みの持続性についても触れておきたいと思います。楠さんから今日お話があったようにプロジェクトを持続させなきゃいけないっていう一方で、どう持続させるのか、何をもって持続とみなすのかということですね。個人的には、ちゃんと腐るものや朽ちるものを作ることも大事だなと思っています。

竹原では山林道のメンテナンスみたいなことをさせてもらっているんですが、雨で道が崩れちゃったりするんですね。その度にやっぱり壊れないように作らないとな、長持ちさせないとな、とか思っていたんですが、例えば毎年台風の時期に壊れて、年に一度きちんと皆で手を入れていくみたいなことも健全なのではないかと最近は思うようになりました。情緒的な物言いですけど「確固たるものじゃないこと」としてちゃんと作る重要性みたいなことを考えたりします。有限性とか時限性とか、断続性みたいなものをポジティブに捉えるみたいな、5年経ったら一旦止めましょうみたいな部分もこれからは必要かなと思ったりもしました。

宮木 | 持続性を考えた時に、姿形を変えずに同じ活動をやり続けるとかではなく、変化し続ける中でプロアクティブな活動が残るみたいな、動的平衡の概念に近いなという風に思いました。瞬間瞬間で見ると活動がなくなってしまうかもしれないけど次の何かで繋がっていけば良いとか、表面的には違っていても同じものを共有しているというか、哲学だったり筋が通ってますみたいなことですよ。ただそれを地域で作ろうと思うと結構難しいですね。

野田 | 昔の地域社会って自然とそうなるようにできてたと思うんですよ。実は当たり前地域が担保していたと。これもよく言う例えですが、建築ひとつをとっても、100

年メンテナンスフリーで保つものを建てるのか、10年に1回手を入れて、それを繰り返して100年維持するのかで意味が変わってきますよね。

宮木 | 日本人的に言うと、何かこう手を入れ続けるみたいな。「道」の価値観みたいな。

野田 | このワーキンググループもそういうことだと思っていて、伊勢神宮が20年で遷宮するみたいに域学連携が10年経ったので皆でざくばらんに話しましょうという、こういう機会もその一部ですね。

辻 | そういう意味で言うと、野田先生が言って下さったように地域の女性って全然出てこなくて…それは何十年前から変わらないんですが、実は女性が色んな意思決定に大きく関わっているじゃないですか。学生の宿泊にしても女性陣が腰を上げて、うんと言わないと域学連携は始まらなかった。域学連携に関わる女子たち、学生さんだったり企業さんの中にもおられると思うんですけど、女性の方が入ることによって地域の女性の代弁もできると良いのかなと思います。そこは全然変わってないから。どれだけ域学連携が進化しようが、企業さんの関わりが変わろうが、地域のその部分がかわらないと…変えちゃいけないことなのかもしれないけど。

楠 | 財布の紐を握っていたりとか、家を使うっていう意思決定は結局お母さんが圧倒的にファクターを占めてますよね、家の中心にいるから。そうなった時に、例えば域学連携で生まれた商品を買ってもらったり使ってもらったりするのに女性の意思決定なく回らないと思うんですよ。ただ域学連携のことを知って買うのか、知らずに買うのかでは全く違うなと思っていて、例のオイルも安く買えてその上エコだと伝えと、買いに行けと言った訳じゃないのに、めっちゃ良いやんって言って妻が買ってくれるんですよ。活動の表舞台じゃなくてそうした場面も重要だと思いますね。

野田 | そこも何か、説明責任の話と繋がってくるエピソードですね。

楠 | 家庭を守っている中で情報が来にくいみたいなところが課題としてあるんじゃないかなと思うので、そこを解決したいなと思いますね。

野田 | 辻さんのコメントを聞いて思い出したことがあって、今回のシンポジウムは「冒険（クエスト）し続ける地域と人のつくりかた」というサブタイトルが付いてるんですが…それにちなんで本番登壇した時に喋ろうかなと思っている話があって。このサブタイトルを最初に見せてもらった時に、ああ冒険か、そうかそうかと、特段何を思うでもなかったんですが、ふと気になって、冒険の対義語って何だろうとググってみたんですね。皆さん知ってますか。

楠 | 何だろう。

野田 | ONE PIECE の作者の尾田栄一郎氏が冒険の対義語を「母親」だと言って。母親は冒険と対極の位置にあるから、ONE PIECE の作中ではいわゆるステレオタイプの母親像は出てこない。これが言語的な回答として正しいのか、或いはジェンダー的にいかなものかというのは置いておいて、その時に域学連携でお世話になってきた奥様方のことを思いました。

クエスト＝冒険というニュアンスを礼賛し続けることは、その対義語である母親的な方々…母親かどうか、女性かどうかではなく母性みたいな心持ちで縁の下を支える方たちに対するリスペクトや感謝を、無意識下でというか自覚のないまま欠いてしまうんじゃないかなと思います。前回や今回で発表頂いた色んな活動も、こういったことが実現しているのは、その裏側に母親的な人がいたからなんじゃないかっていう認識をもう一度改めるべきかなという話です。全部話しちゃったんでもうシンポでは言えなくなっちゃいました（笑）。

宮木 | めちゃくちゃ面白いですね。冒険の対義語は日常かって思ったんですけど、でも日常を支えているのは多くの場合母親ですもんね。母親の元から旅に出るのが冒険であり、また成長を遂げて帰ってくるんだとすると、楠さんが言ってたようにプロジェクトで生まれた商品のコンセプトや意義を伝えることは最初のエンジンで、最終的にはそこは全く気にせずに、ただ良いものだから買うっていう人々たちを巻き込んでいくことによって完結するんだろうなって思いました。

野田 | これまでの話も踏まえて、そういった母親的な方々が幸せにならないといけませんよね。次の10年で報われないといけないなって思います。

宮木 | いや面白い。イノベーションのゴールはおかんだったのか（笑）。

野田 | 竹原でも太田さん水田さんというキーパーソンがい
らっしゃる一方で、お二人の奥様が見えないところで支え
て下さっているのを知っているの。

辻 | 手綱を引いていただけますもんね（笑）。

野田 | オチじゃないですけど何となく綺麗にまとまったところで一旦お開きにしましょうか。長時間お付き合い頂き皆様ありがとうございました。次回で最後になりますが、引き続きよろしくお願いします。

2023/10/31 (Tue) 19:00-20:30 @ ONLINE

第三夜

Panelist
京都大学 S³

株式会社ワークアカデミー

流通科学大学《しずく》

株式会社 ODK ソリューションズ

Commentator

前掲 中川悠

前掲 辻郁子

Moderator

前掲 野田満

Introduction

野田 | それでは始めさせていただきます。第3夜ということで今回が最終回となりますが、今一度この座談会の建て付けについてお話をしておきたいと思います。

来月11月19日にですね、「洲本市域学連携事業10周年記念シンポジウム」が行われるということで目下企画準備が進められているところなんです、その中のパネルディスカッション第一部「域学連携10年の批評と、今後10年を見据えた提言」についてはパネリストを中心とした3つのワーキンググループに分かれて、下打ち合わせと申しますか、関係者でのディスカッションを取りまとめて本番に臨むということになっております。野田もパネリストの1人なのですが、このワーキンググループではディスカッションそのものをオープンにしようということで、全3回

のオンライン座談会を企画させて頂いたという次第です。前々回、前回と、閉会以降も話が盛り上がり色々な学びを頂きました。そして今回の内容も踏まえて、シンポジウム当日に持っていきたいという風に思います。改めて本日はよろしくお願いします。

Presentation 3-1 京都大学 S³

樋口 | よろしくお願ひします。樋口と申します。私たちは「of the Students, by the Students, from Sumoto」ということで活動をしています。京都大学と名前が付いていますが色んな大学の学生がいて、私は高知大学地域協働学部在籍しています。2018年の創設以来洲本市を中心に活動していて、協働パートナーの株式会社 Bocs さんにアドバイスを頂きながら、観光事業と教育事業、食べ物事業を進めています。補助金の事業期間である3年間で、昨年度は洲本の城下町における周遊観光を促す魅力発信ということでパンフレットを作って配布させて頂きました。今年度は城下町の新たな魅力創出ということで、伝統料理であるちよぼ汁の発信と歴史を活かしたまち歩き観光の促進、すもとっ子∞塾の実施を行いました。

ちよぼ汁については、小路谷地区の生産者の方を訪れて原材料であるささげ豆を作っている姿を見させて頂いたり、ちよぼ汁の作り方を教えて頂いたり、それをイベントで販売したりしました（Slide3A）。歴史を活かしたまち歩き観光については、洲本高校社会部の方と意見交換しながら一緒にまち歩きをして城下町の歴史について学びました。私

伝統料理「ちよぼ汁」の発信

取り組み概要

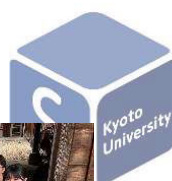
- ・ちよぼ汁についての情報収集、現状把握、販売
- ・ちよぼ汁の作り方教室、紹介パンフレット作製

取り組みの現状

- ・小路谷地区ささげ豆(ちよぼ汁の材料)生産者さん訪問
- ・レトロな街歩きで販売(2回)
- ・地元の人にちよぼ汁についてインタビュー

今後に向けて

- ・パンフレットの作成に取り掛かる
- ・ちよぼ汁教室の対象者、ターゲット設定
- ・給食施設などヘアプローチ、食育に目を向ける



歴史を活かしたまち歩き観光の促進

取り組み概要

- ・城下町洲本周辺地域の歴史に注目したまち歩きパンフレット作成
- ・洲本高校社会部と共同して作成

取り組みの現状

- ・洲本市街地周辺の歴史に関する資料や情報の収集
- ・大学生による現地視察
- ・洲本高校社会部との意見交換、現地視察

今後に向けて

- ・パンフレットに入れる情報の選別
- ・洲本高校社会部との連携方針を定める
- ・パンフレットのデザイン作成



3B

は洲本市出身なんですけど知らないことも沢山あって、もうちょっと勉強してきたいなという風に思っています。これからパンフレットを作っていく予定です (Slide3B)。

取り組みを通しての感想なんですけども、ちよぼ汁事業はインターネットの情報だけでは分からないことも多く、地元の方に聞かなければ分からないことが沢山ありました。そうして聞いたことを記録して発信することの重要性に加えて、洲本の方の温かさを改めて感じました。歴史の方は自分じゃなくて他の学生のコメントになるんですけど、これまで気付かなかった洲本の魅力を発見できたことや、年齢によって着目するところが異なり、それぞれの思いを通してパンフレットを完成させていきたいということです。活動を通して思うこととして…自分の個人的な意見になるんですけど、自分は地元という繋がりがありますが、洲本に関わりがないのに入ってくれた他のメンバーへの尊敬の気持ちや、自分の地元に来てくれる嬉しさがあります。その一方で、補助金を取ってる側が言うのは良くないかもしれないんですけど、申請が大変だったりとか申請内容に沿って活動するのが自分にとって窮屈に感じる部分があって、サークルの会費のみでのびのびと活動してみたいなっていう風に思う部分があったりします。また教育事業の方は毎年教育委員会の方と協働で進めてるんですけど、観光事業の方は初期と比べて停滞しているのが現状です。その中でも地域の担い手の高齢化という解決したい課題はあるので、洲本の中学生や高校生と連携して新しい活動体制を提案していくことが、大学生が地域に入り続ける意味のかなと思っています。

最後に、淡路島に元々縁のある学生は限られていて、サークルを通して淡路と関わりを持っているメンバーが多いです。正直に言うと今のメンバーは初期のメンバーと比べて、地域創生という目的が根底にあるというよりは淡路で活動すること自体が楽しいとか、地域の温かさを知っていうところが活動の目的としてあるんじゃないかなと思っています…それでもやっぱり地域に入るといことは責任を伴うと思うので、今後どこを目指していくのかというのを、このシンポジウムを機にメンバーでも考えていくべきだなと

思っています。以上になります。

Presentation 3-2 株式会社ワークアカデミー

有井 | ワークアカデミーの有井と申します。私からは「夢中になれる経験を。」というサブタイトルを付けさせて頂いて、今までの活動とこれからのことについてお話しさせて頂ければと思います。よろしくお願いします。

はじめに、弊社の概要について簡単にご説明させて頂きま
す。我々は関西・関東圏にて大学授業の運営、学生の資格
取得支援、加えてキャリア支援を3本のビジネス軸とし
ており、昨年創業以来40年を迎えました。直近では大阪
府の「OSAKA 若者リ・スキリング・パートナーズ」に参
画したり、リカレント教育で大学さんと連携したり、キャ
リア支援イベントを開催する等、そのような活動をしてい
る会社になります。洲本市さんとは5年前に接点を頂き、
学生が絡んだ諸々の活動をしてきたという経緯がございま
す。2年間の概算で、160名の学生さんに関わって頂きま
した。

最初の取り組みは大阪経済大学さんとシマトワークスさんと共に、ワーケーションハブという場所で多様な働き方を学ぶというもので、フィールドワークを通してコワーキングでの働き方とかワーケーションとは何ぞやとか、色々な働き方について学ぶということを2年間連続で開催させて頂き、30名近くの学生さんに参加して頂きました。

続いて第2のふるさと作りWSというテーマで、竹原地区の地域おこし協力隊の小林さんの協力も賜りまして、2泊3日のプロジェクトに複数の大学の学生さんに参加頂きました。古民家再生の取り組みを手伝ってもらって、最後にODKソリューションズ様のご協力の下、NFTを発行してパスポートとして使って頂くというもので、8大学10名の学生さんにご参加頂きました。

次に「P-1 グランプリ」ですが、これは LEVIAS 社にご協力を頂き、Web3.0 を使って地方創生に繋がるようなビジネスアイデアのコンテストを開催して、16 大学 88 名の学生さんにご参加頂きました（**Slide3C**）。学生ならではの色

③P-1グランプリ(LEVIAS)

■入賞作品

AIIに最優秀賞を提案させる、洲本市の公式観光検索サイトの設置。観光ルートを通った体験をNFTに変換・AIの深層学習へ還元し、さらに情報を取得しやすいサイトへ成長。

■入賞者の声

私達はアイデアを考える上で、将来洲本市の人口を増やし、経済を活性化することに着目しました。
今回、普段の困りごとを解決する方法と地域創生を結びつけることにし、新たなビジネスが生まれることや、お金と情報の仕組みなど、社会について少し知ることが出来ました。
社会人になってビジネスと地域創生や社会課題などを結びつけ、社会の役に立つようなアイデアを考えていきたいと思っています。

主催者サイト: <https://nagasaki-workacademy.com/en/>
<https://ordina.jp/main.html?shop=0000000039&000044832&000044832>



P-1
 グランプリ
 とは？

地方創生を学んで働く学生たち

九州大学 P-1グランプリ 2023 入賞作品発表会

Web3.0の活用、地産地消、新技術の導入、環境問題への取り組みなど、多岐にわたるアイデアが発表された。

入賞作品は、各分野で最も優れたアイデアとして選ばれた。



★川上大志さん・山崎さん

んなアイデアが出てきて、これを実装できないかということとで何件か動いている案件もございます。

そしてこれは直近なんですけれども、大阪経済大学さんと武庫川女子大学さんで実践プログラムを実施しました。それぞれの異なる授業を兼ね合わせた中身だったんですけれども、洲本市をもっとよく知ろうということで色々なテーマを作りまして、マスキングテープで洲本市の魅力を再現したり、市を盛り上げる為の色々なアイデアを発表頂くというところまで運営させて頂きました。

これまで色々な企業の方と関わらせて頂きながらコンテンツを提供するような活動をしてきましたが、4月から「淡路島クエストカレッジ」が立ち上がったということで、企画で入らせて頂いている状況になります。我々は大阪の会社として、天王寺のあべのハルカスの中にハルカス大学ということで複数のコンソーシアムを運営させて頂いたり、梅田の本社で社団法人を作って学生と企業が関われる機会を作るということで応援してきました。その経緯から洲本市で第3のコミュニティが創出できる場所にならないかということで、関西からの利便性であったり、都心にはない環境であったりとか、域学連携に向けて取り組まれている洲本市さんのスタンスに協働できないかということで関わらせて頂いています。今後の目標としては、引き続き探求、出会い、就業の3つの機会を若者に提供していきたいという風に考えています（Slide3D）。これまでの事業を通して大学のアカデミックな内容と並行して実践的な場を提供していく中で、色々な人と出会って気付いたり、自分のキャリアを思考するきっかけになったり、スキルアップを

通して就業していくような機会を提供していきたいと思っています。

運営していく中で課題でもあるんですけど、2年間こうしたプログラムをやってみて感じていたところは、やはり単体の事業では継続性が難しいというところなんです。運営するには色々なリソースが必要で、大阪のいち企業だけでは難しいところがあります。なので学生さんに声を掛けて、安定的に洲本に訪れてもらう為には複数の企業や大学さんと協力していく必要があると思います。そして前回の発表でもあったかと思うんですが、学生が長期滞在できる場所の確保が大事だと考えておりまして、地元の企業さんと話し合いながらそうした場所の開発を進めていきたいという風に考えております。私の方からは以上になります。ご清聴頂きましてありがとうございました。

Presentation 3-3 流通科学大学《しずく》

榎野 | 流通科学大学商学部経営学科3年生の榎野です。本日は2021年度の洲本市域学連携事業コンテストから始まったマーケットボランティア《しずく》の活動について説明させて頂きます。まずはじめに皆様、このワーキンググループがスタートする際にモデレーターの野田先生が「人が大事だ、みたいなポエティックな着地にはしない」と仰ったことを覚えていますでしょうか。私が2年間を通して感じた、洲本市がヨソモノに虜になってもらう為に必要なキーは「人」です…是非ツツコミを入れてほしいのですが（笑）、それでもなぜ人という言葉にしたのか、起承

3. 今後の目標



○機会の提供

①探求

アカデミックな内容と並行し、社会情勢に直接関わるより実践的な探求カリキュラムを創出する

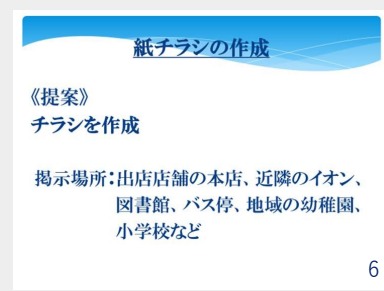
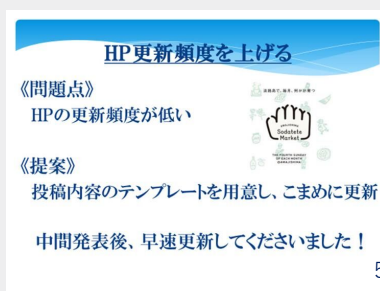
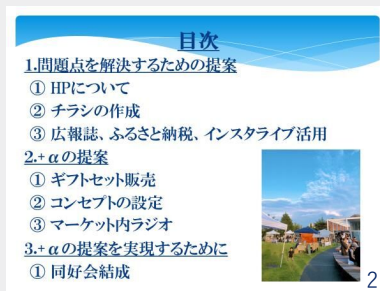
②出会い

出会いを通し「自ら考え行動できる」「チーム創出を主体的に実施できる」「デジタルツールを活用できる」人材を輩出する

③就業

様々な企業がプログラムを通して、自ら学ぼうとする若者と出会い、就業機会を提供する

知識の習得だけではなく、学内外を問わず、様々な人と場所での“出会いと学びの機会”を創出し、社会人としての知見を広げ、継続的に活躍する人材を輩出するプログラムを構築する。
洲本市の淡路島クエストカレッジをその一つの拠点として、発展させていく。



3E

転結を繰り返してきた私たちの活動を時系列に沿って説明しながらお話させていただきます。

私の通う流通科学大学では 2020 年度から洲本市との域学連携事業コンテストを実施しています。私が参加した 2021 年度は 2 つのテーマで実施されました。ひとつは鮎屋地区の活性化提案、もうひとつは私たちが提案した「AWAJISHIMA Sodatete Market」のプロモーションです。他のチームは全て 3 回生がゼミ単位で参加する状況で、私たちは入学して 1 ヶ月の 1 回生 3 人で、マーケティングの知識も全くない中で参加しました。AWAJISHIMA Sodatete Market はバスセンターからすぐ近くの市民広場で月に一度開催されている屋外マーケットです。ものづくりへの思いを大切に、島内の飲食店をはじめ色んな人が集い、色んなことを一緒に育てていく温かい場です。

私たちが中間発表で提案した内容は、SNS に関する提案とマーケット実施内容に関する…具体的にはチラシの発行や SNS 拡散による割引キャンペーン、マーケットを縁日のようにするコンセプト等、ヨソモノ目線かつ他のイベントとの差別化になるような内容です。この提案に対して運営者の淡路島マルシェ実行委員会からは内容に具体性がないこと、なぜこうした内容が今まで取り組まれてこなかったかについての理解が不足しているというご指摘を頂戴しました。実際に私たちは現状把握ができておらず、マーケットが集客したい層についても理解できていませんでした。ですがその後の現地視察を通して、学内説明会やネットの情報だけでは知り得なかった温かさや盛り上がりを知り、また実行委員会の皆様や出店者、来場者へのヒアリングを通

して現場との温度差を整理することができました。それ以降ミーティングに実行委員会の皆様が入って下さり、課題の解像度と実現可能性の向上の為に議論を続けました。

そして迎えた最終発表会では、マーケットの既存課題を解決する為の案、更に発展に繋げる為のプラスαの提案、そしてこれらの提案の実現にはマーケットの人員不足の解消が必要不可欠であること、継続的なボランティア派遣を目標とした同好会の設立を合わせて発表しました (Slide3E)。結果的に満場一致で最優秀賞を受賞することができ、これをきっかけに《しずく》を立ち上げて、洲本市からの交通費援助を受けながら活動が始まりました。

しかしいざ現地で活動しようとしたところ、コロナ禍により学外での活動制限やマーケットの開催中止が相次ぎ、スタートを切れない状況が続きました。リモートでもできることはないかと実行委員会の皆様と話し合い、インスタライブで店舗紹介を実施することになりました。自分たちが企画から実現まで動いた経験がなかった私たちですが、ご協力下さった出店者さんへの事前ヒアリングや実行委員会の方との打ち合わせで皆様が何度も親身に相談に乗って下さったり、的確なアドバイスや経験知見をご共有下さったことで総視聴者数が 100 人を超える配信になりました。そしてこれらの活動が認められサークルへと昇格することができました。

そして待ちに待った現地でのボランティアでは、テント設営をはじめとする搬入搬出や本部での手指消毒と検温の呼び掛け、買い物袋を指定ゴミ袋としてリユースできる護海袋 (ごみぶくろ) の啓蒙活動、マーケットを中継するイン

マーケット初のオリジナルプロダクト『淡路島たまねぎランタン』が誕生

『主催者運営ブースにて、マーケットオリジナルグッズを販売する』という最終発表会での提案を受け、制作していただいた。

現在は、私たちサークルで、『たまねぎランタンワークショップ』としてマーケットに出店。

3F



スタライブのお手伝いや委託販売等、様々な活動をさせて頂きました。メンバーは洲本の方々に温かく迎え入れられ、美味しいご飯を食べたりお気に入りの小物を購入したりしながらマーケットを存分に楽しみました。このように楽しみながら活動を続けていく中で、最終発表会の内容として挙げていたマーケット初のオリジナルプロダクト「淡路島たまねぎランタン」の制作販売が実現し、自分たちの提案が形になるという貴重な経験ができました（Slide3F）。

更にコロナ収束を受け、先程のリモートでのインスタライブを現地での実店舗で実施することや、またマーケットを通じてできたご縁から淡路島の木材を活用したボールペンのワークショップをお手伝いさせて頂く等の活動も毎月行っています。そんな中で今年の4月には初めての新入生が入部し、毎月10人以上のボランティア派遣ができるようになりました。これにより更に活動の幅が広がり、サークルからクラブへの昇格も控えています。今後もこの体制を続けていけるよう、思いの継承も意識して取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、今日の皆様には「活動の継続・継承の方法」「関係者間の責任の比重」「プライベートでの洲本市との関わり」についてディスカッションでお伺いしたいと思います。そして私たちの活動に関わって頂いた全ての皆様、素敵な発表の機会を下さったワーキンググループの皆様、ご視聴下さった皆様の温かさ大きなご縁で多くの経験をさせて頂いております。だからこそ人から頂いたものを人に伝えていけるような活動を続けていきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

Presentation 3-4 株式会社ODKソリューションズ

守沢 | 皆様こんばんは。株式会社ODKソリューションズの守沢と申します。本日はこのような発表の機会を設けて頂きありがとうございます。よろしくお願い致します。我々は大阪で本社を構えるIT企業で、大きく4つの事業を展開しております。その中でも教育分野が一番シェアの大きな形になっておりまして、1964年から大学入試に関

わる業務委託を開始して現在109校の大学様、そして受験生の2人に1人が弊社の「UCARO」というサービスを使って大学に入学されています。

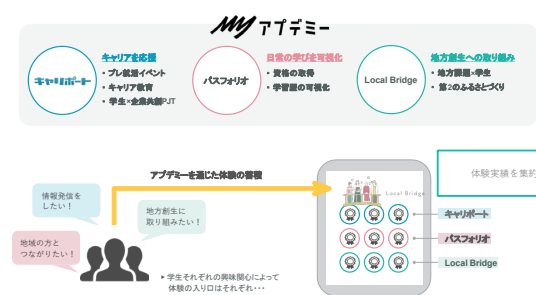
3年前から社会問題を解決するような事業サービスを開発しようということで、UCAROを通して大学に入られた学生一人ひとりの人生のサポートをデジタルを繋いでしていく、次の成長基盤となるような新規事業を目指しております。その中で今実行しようとしているサービスが本日紹介する「Local Bridge」です。具体的には学生の体験を実績としてNFTを発行し、それを今後の色々な人生に活用して頂くようなサービスになります。

3つの形でNFTバッジを貯めていく仕組みで、ひとつは就活支援やキャリア教育への参加を示すキャリアポート、もうひとつは資格取得や学習歴を示すパスポート、そして今開発しているLocal Bridgeは地方の課題を解決したいと思っていらっしゃる学生さんの第2のふるさと作り、自治体さんから見た関係人口作りってところに寄与できるようなサービスを目指しています（Slide3G）。学生さんがLocal Bridgeイベントを通じて地方創生活動に参加されると「ふるさとパスポート」が発行されて、貢献の形として残ります。併せて交流人口や関係人口の定量的な可視化を図りたいと思っています。パスポートを取得した学生の方がオンラインでのコミュニティに参加できたり、活動の経験をLocal Bridgeを通してメディアで発信して頂くことで、地域貢献活動に参加したいという学生さんの仲間を募ったり、循環が生まれるようなものを作っていこうと思っています。このLocal Bridgeを立ち上げるにあたりまして、まず学生の体験の場を作りたいということと、NFT技術の活用を実践できる場所を探している中で、先程発表されたワークアカデミー様とのご縁を頂き、今年の2月に洲本市で実証実験をやらせて頂けるということになりました。

ヨップでは洲本市さん、ゼロイチコンソーシアム、シマトワークスさんと地域おこし協力隊の小林様、ワークアカデ

企業概要

「データに物語を」をコーポレートメッセージに掲げ、学生一人一人の体験を価値に変える新規事業の創出に取り組んでいます。



ミー様のご協力を頂いて実施しました。1 週間の応募期間で 12 大学 38 名様からご応募頂きまして、最終的には 10 名の参加になったんですけれども大学も学年も学部も多様で、我々の UCARO を通して色んな学生さんが集まる機会の創出をひとつ実証できたのかなと思います。

応募頂く方には応募動機であったり事前ワークショップに参加して頂いて、洲本市のことを知った上で現地に来て頂いたんですけども、自身の学びの延長上だったり将来公務員になる為の体験だったり色々な応募動機がありました。参加後の感想についても視野が広がったであったり積極的に知らない人同士の場で関わる経験になったということであったり、様々なものを持ち帰って頂ける場になりました (Slide3H)。

今後も洲本市様と様々な学生様が体験を得られて、その価値をデジタルバッジとして…パスポートの発行を沢山行っていきたいということと、学生さん一人ひとりの先の将来に活かして頂くということを考えていて、コミュニティ作りにも注力していきたいという風に思っています。そうした中で学生さんの取り組みたい地方創生の形を実現していきたいと考えております。このワーキンググループの様々な企業様であったり学生様のご説明を聞きながら一緒に取り組むことができればと思います。以上になります。ありがとうございました。

Discussion

野田 | 皆様お疲れ様でした。僕の方から一つひとつのご発表に対して気になった部分に触れていきたいなと思います。初めに S3 ですが…こちらについては聴講者の方からチャットで頂いてる質問をまずはそのまま投げさせて頂きたいなと思います。【各取り組みのゴールや KPI があればご紹介お願いしますということと、それに対する結果や効果についてお聞かせ下さい】ということですが、樋口さんいかがですか。

樋口 | はい。ゴールや KPI なんですけど、ちょぼ汁の方に関しては自分の興味本位から始まったことで、事業のゴールを定めたりとかそういうのがあまりできていなくて…教育事業の方は別の子が担当しているんですけど、やっぱり大学生と関わる機会のない洲本の子どもたちにとっては将来の選択肢がすごい広がる活動だなと思うので、そういう可能性が広がっていくことがゴールかなという風に思っています。答えになっていなかったらすみません。

野田 | ありがとうございます。続けて別の方からもチャットで質問を頂いています。【補助金の話もありましたが、それに頼らない形で進めていく方法とか、社会貢献性の高い活動に関しては具体的なイメージはありますか】というコメントですが、いかがでしょうか。

樋口 | そうですね、しずくさんの発表にもあったと思うん

洲本市でのお取り組み

参加した大学生からの声

今回の体験を今後どのように活かしたいか

全員初対面でのプログラムだったのですが、全ての人と話すことができ、良い雰囲気となれたことから、今後多くの人と会話する時の自信につながった。周りの人と協力しなければ出来ないことが多かったので、自分ひとりでやろうとせず、周りに頼ることの大切さを改めて実感した。周りの人達の意識を自分に吸収していきたい。

はじめての人と話す時がこれから就職しても必ずあります。その時に今回挑戦したことを思い出して、自分から人との関係をつくりにいきます。地方創生をするやり方はそれぞれあると思うのですが、古民家再生をする時に大学生を呼び込むことに意味があると思いました。今後、就職する時も、地域の人のために何かする企業に入りたいですし、公務員になった時も何かに挑戦して地域を盛り上げることを出来る人になりたいと思っています。



ですけど、初期の方との活動の継続や継承っていうのができていない状況になって思っていて、私としては補助金に頼らずのびのび活動していきたいなって思ってるのと、難しいのを考えるのって大変だなというのがあって…でも活動に対するモチベーションがないとか、どうでもいいって思ってる訳ではなくて、洲本の出身者として自分が面白いなって思ったことや残していきたい郷土料理とかはすごい思い入れはあるんですけど、それらを良い感じに実現するのは難しいなというのが現状です。

野田 | 補助金を探しながらそれに合致するような取り組みを当てはめていくみたいな感じなんですか、最近の活動は。

樋口 | そういう形になってた部分もあったと思います。

野田 | 僕も補助金の申請とか執行のお手伝いをするのは多いんですが、そういう縛りはやっぱりありますよね、あれが買えたら良いのに、こう使えたら良いのに、みたいな。域学連携を更に実効性あるものにしていくには、知恵次第ではありますが、そもそもの補助金メニューの窓口や用途を広げたりするのも大事だなと思いながら聞かせて頂きました。ありがとうございます。

続いてワークアカデミーさんと ODK ソリューションズさんにもお聞きしたいなと思います。研修や体験みたいな枠組みで中身をしっかりと決めて、それに手を挙げて参加して頂くという形で学生と地域の関係を作っていくということですが、プログラムの内容を定める際の制約も結構沢山ありそうだなと思って聞いていて…つまり大学生に来てもらえそうなものを設定しなきゃいけない一方、地域のニーズにも合ったものじゃないといけないうって、両者の間に入って複雑なパズルを解かないといけないうのかと思っていたりもするんですが、実際はどういう協議や提案をしながら決めていったのでしょうか。

有井 | 私から先にお答えさせていただきます。確かにテーマを決めるのは非常に難しいところなんですけれど、洲本市の職員の方であったり、地元の企業さんとお話しさせてもらった上で、ご紹介させていただいた4つのプログラムにおいて、テーマ自体を広めに設定させていただきました。

古民家の再生では人がいなくなった過疎地域をどうやって活性化するかというのがテーマで、その前のものはコロナ禍で働き方の多様性が進む中、ネット環境があれば色々な仕事ができるよねっていう、あまり制約を設けず現地で結構フリーな時間を設けさせて頂き、まずは洲本に来てもらうということをテーマにしていたっていうがあります。ハードルはそこまでなかったかなというのが私の感想になります。

野田 | 守沢さんからはいかがでしょうか。

守沢 | そうですね、我々は今までこうしたプログラム作り

は事業の中で一切やってこなかったもので、今後も皆様にご協力頂きながら進めていこうかなという風に思っています。洲本市様での活動に関しても、ワークアカデミー様、シマトワークス様にご協力頂いてプログラムを作らせて頂いたというのが正直なところですよ。我々が提供したいこととしては、学生さんが授業で体験できないことに価値を作っていく機会の創出と、体験したことを貯めていける仕組みづくりを担わせて頂きたいと思っています。

野田 | ありがとうございます。守沢さんの発表で触れていらっしゃった関係人口の定量化、可視化っていうのは学術研究としても結構ホットな話題で、是非また詳しく伺いたいなと思っています。NFTのお話もありましたね。NFTって最近のニュースとかではNFTアートみたいなものが先行して社会的関心を集めているような感じですが、その真髄は今日ご紹介頂いたような実績とか経歴のアーカイブにあると思っていて、Local BridgeでのNFT活用は実は一番本質的じゃないかなと思っています。

続いて榎野さんですが…発表の冒頭にもあった通り、僕は以前この座談会の企画の時に「人が大事という結論は何も言っていないに等しい」みたいなことを口走ったのですが、一応誤解のないように言うと、人の存在が重要だということとは重々分かっていて、そこに全く異論はないんですが、具体的にどんな人が大事なのか、どんな役割や能力が大事なのかという風に構造化しないと次の10年にバトンを渡せないんじゃないかなと思ってのコメントだった訳ですが、その辺りを榎野さんにはお聞きしたいなと。何でも良いんですが、少し要素分解した形でご見解を伺いたいなと思います。

榎野 | はい、まだちょっと抽象的かもしれないんですけど、私の中では大きく分けて2つ、こういう部分が重要だったかなっていうのがあります。ひとつは人と人を繋ぐハブになる人がすごく重要だったかなっていう風に考えていて、それこそ高橋さんであったりとか、淡路島マルシェ実行委員会の方とか、シマトワークスさんとかも何度もお話に出ていると思うんですけど、背景の違う人たちを繋いで頂く中で、新しい視点とか、洲本の沼にはまっていくような感覚を覚えたので、そういった方がキーになっているのかなって感じました。

もうひとつは、提案までは行かない思い付きのような発言も一蹴せずに、面白いねって拾って下さる方が重要だったかなって思っていて…それが私にとって淡路島マルシェ実行委員会の皆様だったんですが、ラフな意見でも拾って下さったり、そこからじゃあどうすることが必要で、どういう人が必要で、っていうところで皆様の経験であったり知見を教えて下さったり、そういう方がいらっしゃったこ

とが活動を続けられた理由でもあります。後輩もその場に連れて行った時に、人との縁が広がったタイミングで面白さを感じたっていう意見が多かったので、そういう方の存在が、他の活動の中でもキーになっているのかなっていう風に感じています。

野田 | ありがとうございます。まさにそういうコメントを求めている…要は人という一言で終わらせるのではなく、具体的にどういう人なのかを考えることが重要だと思っています。洲本市役所の高橋さんなんかは度々キーパーソンとしてお名前が出てきますが、高橋さんのどういう部分が域学で活きたのか、先程はハブという部分が挙がっていましたが、そういう風に具体化することが次のキーパーソンを本気で発掘する為には必要なのかなと思います。

2 点目について、僕もよく学生には何事も最初は妄想から始まるんだとか、もっと妄想しなさいとか言っているんですが、それを面白がってくれて選択肢を狭めない支え方ができる方、できない論理ではなくできる論理を積み重ねられる方は学生にとってとても心強い存在ですね。自分の学生時代を思い返しても、洲本は確かにそういう方が多かったなと感じます。

次に、樫野さんがプレゼンの中で皆様にお聞きしたいことについて挙げていましたが、これを取っ掛かりに引き続き皆さんにコメントを頂ければと思います。樋口さんにボールを投げてみたいと思うんですが、立ち上げメンバーからの思いの継承について、同じ学生団体である樋口さんが心掛けていることや思うこと、何かエピソードについてお伺いしたいと思います。

谷間 | すみません、今ちょっと樋口さんが席を外してるようで別のメンバーが回答してもよろしいでしょうか。

野田 | 大丈夫です。谷間さんは S3 の先輩ということで、是非コメント頂きたいと思います。

谷間 | 私は S3 の 2 代目の代表で、今は東京のアンテナショップで働いています。団体設立当初の思いの継承のお話があったので…今チャットでも送らせて頂きましたが、樋口さんが 4 代目の S3 代表で、勿論私が代表だった時とは変わっているんですが、大事なのは地域の人たちとの関わりの中で、1 代目 2 代目の時はこうだったけど今の代は違うよっていう風に、違いを擦り合わせていくっていうのが大事になって思います。樋口さんは淡路の郷土料理の継承を目的としていますが、それぞれ一人ひとりが課題を抱えてるのかなって、お話を聞いていてそう思いました。

野田 | ありがとうございます。この辺りの話は後でもう少し深掘りできたらと思います。

もうひとつ、プライベートでも洲本を訪れるようになったきっかけという質問がありました。余談に近いコメントな

んですが、僕は関係人口研究の一環で、域学連携のような大学生が地域に関わる取り組みについてもずっと研究しているんですが、興味深い結果がひとつあって。現役の学生時代にこの手の活動で明確な成果を残せたかどうかという度合いは、比例して継続的に関わる要因になるとは限らないということなんですね。逆に現場で失敗したとか、悔しい思いをした学生がリベンジをしたい、恩返しをしたいということで OBOG になってもプライベートで関わり続ける例なんかもありあって…その辺りは関係人口としての大学生の特性なのかなと思います。

さて今回は、早めにコメントーターの方のご発言を頂きたいなと思います。辻さんと中川さん、コメントや質問どちらでも結構ですのでよろしくお願いします。

辻 | よろしくお願ひします。今日もまたまた素敵な発表を聞かせて頂きありがとうございました。

団体が代替わりをしていく、2 代目 3 代目になって熱い思いが伝わらないというようなことが、今までの話の雰囲気だとマイナスに捉えられているのかなと思うんですが、それはひょっとしたら活動がもっと広がる為に形が変わっていったとも考えられないかなって。熱い思いを持った人だけが関わるというところから、もっとハードルを下げて色んな人が関われるようになっていく、そういう変化の途中だっという捉え方もできるのかなって考えながら聞いていました。

もうひとつ思ったことというか、皆様にご質問したいことなんですが、地域の課題を解決する為に集まるというような企業さんのプログラムだと感じたんですけど、高齢化にしても地域によって少しずつ違う課題があるのかなって思っていて…関わる学生はそれを共有して地域に入っているのか、それはそれで、学生さんは楽しみも含めて入っておられるのかなってところで、プログラムを作られる側もそれをどう意識されているのかなっていうのをお聞きしたいところでした。

野田 | 変化の過程の話は学生の皆さんも背中を押して頂いたコメントでしたね。全てのことは正解までのプロセスだというマインドを持つことは非常に大事なかなと思います。プログラムの内容についてのご質問がありました。この辺り有井さんに答えて頂くのが良いのかなと思うんですが、いかがでしょうか。

有井 | そうですね、課題認識っていうところでは現状を認識して頂く為に洲本市の総合戦略を読んで頂いたり、高橋さんからお話をして頂いたりっていう必要はあると思うんですけれども、一方で高橋さんともお話ししていたのは、課題ってなかなか解決ができないから課題であり続けるっていうところもあるよねと。少子化だったり高齢化だったり

は今すぐ止められる訳でもないですし、学生さんが来るとで魔法が掛かるということでもないで、どちらかというと学生さんが新しいアイデアや発想、新しい時代をどう地域に提供していくのかを考えることに意味があるんじゃないかなって風に考えています。外から来て限られた時間の中で、どれだけのものを出せるかっていうのはやってみないと分からないことなんですけれども、課題は課題で認識しつつ、それを解決するというに縛られずに、もう少し幅広い提案をしていこうよっていうことで取り組ませて頂いています。

野田 | 結構これもクリティカルな、でも正解のない話ですね。要はこういう域学連携の学生が即戦力なのか、単なるマンパワーなのか、お客さんなのか、観光客みたいなものなのか、ただその辺は明確な択一というか、区切りができないと思っていて、今日のS3やしずくさんの発表にもあったように個人の意識や目的は良くも悪くも結構力オスな状態で、そういうある種の多様性を何というか、交通整理すべきかどうかは難しい問題だなと思います。同時にこれは逆に地域が学生という存在をどう認識しているのかということでもあって、単に場所を提供するだけの話なのか、何らかのクライアントなのか、いちプログラムでは全ての需要を満たせないで、そういった住み分けも必要なのかなとも思います。

課題解決についても座談会の1、2回目からあった話ですね。学生にできることとできないことがある中で、過度な期待をし過ぎてしまう。彼らの専門性も多様な中でどこまでの重荷を背負わせてみるのかっていうところは重要な論点だと思います。仰って頂いた通り、課題っていうのは簡単には解決できないんですよ。プロのプランナーや研究者が寄ってたかって頑張っても難しい。課題っていうよりある種の前提条件という風に…諦めたらダメなんですけど、例えばそういう共通認識がないと「学生が解決してくれるんじゃないかったのか」って話に戻ってきますし、慎重に地域と大学、コーディネートする立場の方で対話を積み重ねていくことが大事なのかなと思います。ありがとうございます。中川さんからはいかがでしょうか。

中川 | 僕も学生さんと地域に関わる取り組みには10年前、15年前から関わっているのですが、色んな企業や学生が集まる為に、大きな母体としてのコンソーシアム的なものがどんどん広がっていったっていうのが、すごく時代の流れとして新たな変化、面白い変化だなって思っていて。辻さんのお話や野田先生が仰った前提条件のように、やっぱり地域で高齢化が進んでるよねとか、課題は多いよねという時に、学生さんががつつり関わってここに住んでくれたら良いのにな、ここで働いてくれたら良いなっていう地

域の過度な期待もあるんですが、俯瞰でものを見ると若者はやっぱり人生通して色んな経験をしていくので、地域であったことは通り過ぎるものとして、大人ってややこしいんだぜとか、おじいちゃんて若い子が好きなんだぜとか、色んな世代の人たちと関わることを人分厚くすることを感じてほしいです。それを支える企業さんもう少し、何かこう出会いの中にも若者たちを人として肉厚にするとか、汗を流していくような機会を増やしてほしいなっていうのがあります。その先にNFTってこういう風に使うんだとか勉強させてもらってるんですが、更にもう1個先には何があるんだろうっていうのをすごく想像しながら聞いていました。

若者たちもこれから色んな人が入ってくると思うし、企業はそれを持続可能にするんですが、やっぱり5年後、10年後に地域はもう一段階元気がダウンしてしまうと思うので、若者たち企業たちがもうちょい先に何を残せるのか、もうちょい先にどう支え続けていけるのかっていうことを、どういう答えを出すのか非常に興味を持ちながら皆様のぶつかり合いを見させて頂いた感じです。

野田 | ありがとうございます。中川さんのお話に重なるか分かんないんですが、域学連携は長期投資なのか短期投資なのかって話を僕はよくしていて。例えば今日発表頂いた学生さんみたいに何か活動をして、地域の為に年度末までに何らかを成果を残したりする場合は、地域にとっては投資の短期回収なんですよ。それはそれで正義である一方で、中川さんのお話は長期の投資の重要性に繋がってくるのかなと思いました。今すぐ何かを作らなくたっていいので細く長く関わり続けてほしいとか、卒業してから社会人として、お金や技術や経験、或いはさっきのハブだったりコネクションを持ってたまに戻ってきてくれたら嬉しいとか、S3のOBの皆さんが今日来てくれたことなんかも含めて短期長期の両方の考え方が必要だなって思うんですよ。その為にも地域はやっぱり10年後20年後のビジョンを持たないといけないですね。

中川 | S3がレトロこみちに関わり続けてることは宝物ですよ。高橋さんもそうだと思うんですが、続けてくれることがどれだけ地域にとってありがたいかっていうのは皆様も仰ってますし…「この子たちよう続けたな」って。皆も長く続けてね。

野田 | 樋口さんの方から継承の話があって、そういう内々の課題のようなものもある中ですが、辻さんも仰っていたようにそれ自体が長く関わるプロセスの中のひとつの出来事で、結果として地域とのご縁が続いていくこと自体が本質的なかもしれないですね。

それに関連してもう少し学生の方に質問を…例えば地域の

役に立ちたいっていうこともそうなのですが、学生さんは地域にとってどういう存在でありたいと思ってるのか、或いはそういった気持ちは関わりの中で変化してきたのかについてお伺いしたいなと思います。例えば最初は淡路島に特段の思い入れはなかったけど、そこから洲本に対する気持ちがどういう風に変わってきたのか、或いは一貫しているのか、活動を通じた自分のマインドの変化みたいなものを教えてくださいませんか。

樫野 | 私はきっかけがビジネスコンテストということもあって…本当に大学に入ってすぐの時期に関わり始めて、大人と関わる経験も少なかったので、クライアントではないですけど適度な距離を持って接しないといけないような印象を最初は持っていました。

ですがサークル活動として始まる辺りで、夜中にオンラインの打ち合わせで何回も親身にアドバイス下さった過程を通して、親近感とはちょっと違うかもしれないんですけど、すごく親密な感じになっていって、そこからは…私は東京出身で神戸育ちなので、今住んでいるところに地元感があんまりなかったりするんですけど、第2の地元という感覚を洲本に覚えるようになってきて。

卒業を控えているので、あと1ヶ月で私はサークルを引退することになってしまうんですけど、やっぱりそこでなかなか洲本に足を運べなくなるのかなってなるとすごく寂しい感覚を感じているのですが…ちょっと抽象的なんですけど地元未満で観光客以上みたいな、常連みたいな感じに学生がなっていくと、OBOGがすぐには足を運べる距離にいらなくてもSNSぐらいの感覚でソフトにタッチし続けられるような形になればと思っていますし、社会人経験を通していつか恩返しできれば、っていう風に思っています。

中川 | 質問してもいいですか。僕なんかも色んな地域で関わっていると、全部好きだったりするんですよね。でもとあるタイミングでもっと関わり続けたいとか、誰かや何かを起点にもっと動きたいみたいな…樫野さんは選択肢が広いじゃないですか、神戸かもしれないし東京かもしれないし。どのきっかけでサークルから部活にまでしちゃうぐらい洲本にもっと関わりたいと思ったのか、地域からすると、そのきっかけさえ作れば学生たちは離れないんじゃないかって思ったりはするところもあって、なぜ洲本なんですか。

樫野 | 今のお話を聞いていてパツと思いついたのが3つあるんですけど、ひとつは、私は他のビジネスコンテストで別の地域とも関わらせて頂く機会があったんですけど、やっぱりその中で洲本の皆様との違いってというのが…ビジネスコンテストではお相手になった企業さんだったり団体の方と関わるのは普通なんですけど、そこからプラスでそ

の方をハブに別の方との縁が広がっていくっていうのが洲本ではあって、それで更に一段階仲が深まると言いますか、うまく表せないんですけどそういう親近感が生まれたっていうのがあるなって思っています。

もうひとつはやっぱり、地元じゃないんですけどいつでも受け入れて下さる感じであったりとか、温かさみたいなものをすごく感じていて、ボランティアとして来ている人ではなく下の名前で「ももちゃん」って呼んで下さって、悩んでいることがあったら聞いてあげるよみたいな感じで接して下さったことが、私にとって実家感というか地元感が生まれていったという風に思います。今話してて3つ目は飛んじゃったんですけど…(笑)。

中川 | 取り組みだけでなく、相手の方々が離れても良いし近づいても良いっていう、旅人を受け入れる許容量みたいなものは洲本の町の特性としてすごく感じますよね。

野田 | さっきビジコンの話がありましたが、この手の学生コンペって企画者側にとっては都合の良い装置みたいなところがあって、ぼーっと待っているだけでアイデアや学生が寄ってくる「The 買い手市場」みたいな感じなんですけど、そうじゃなくて地域がそこに対してきちんと前のめりになって下さっているというのが大事だと思いました。僕も学生時代から今に至るまでに色んな地域に関わらせて頂きましたが、物事を丸投げされちゃうとやっぱり冷めちゃうし、虚しくなりますよね。こんなもんだったんだなって。きちんとお互いが向き合って、地域と学生が二人三脚になっていく中で、ギブアンドテイクみたいなものが発生し得るかどうかってところですね。

あとは大学生を一人の人間として見てくれるという部分ですね。結局こういうのは、最後には固有名詞と固有名詞の付き合いなので、とても実感するところです。名前を覚えてくれるとか悩み相談とか、活動の外の世界をちゃんと設けることを含めて地域づくりだなとか思ったりするんですけど、地域の側もそうした広い範囲で学生を迎えていたんだなと感じます。樫野さんありがとうございます。

そうした出会いをデザインしていくことがワークアカデミーさんやODKソリューションズさんの役割かなという風に思うんですが、今日は学生のレポートなんかも紹介して頂きましたが、実際にこう地域と学生との、ある種の偶然性も伴った出会いとか出来事をどのように設計していくべきか、ノウハウみたいな部分も含めて是非コメント頂きたいと思いますが、どうでしょうか。

有井 | そうですね、僕らが考える地域のイベントやプログラムっていうのは、野田さんが仰られたような偶然性とかはあんまり生まれにくいというか結構パッケージ化されていて、その枠組みの中で限られた時間でやりましようって

う話になっちゃいがちなのですが、先程あった他との繋がりとかにについても最近ニーズとして出てきていて、それに応えていく枠組みも作りたいなという風に考えています。地元でイベントをされている会社さんがいらっちゃって、そこが例えば春夏秋のイベントでその都度学生アルバイト募集をされていたのを、プログラムにして積んでいこう、毎年後任の学生に継承していきたいという話をしています。そこに係る人たちが滞在する場所として古民家を再生させて、という話を検討しています。短期的にやるものと長期的にやるものはそれぞれあるんですけども、僕らの力だけでなく地元の企業さんと連携するっていうのが重要だなと感じています。

野田 | ありがとうございます。地元の志のある企業と繋がることの重要性は前回の座談会でも出ていた重要な論点ですね。そういったことを先程の NFT みたいな、テックでサポートしたリインフラを作るのが守沢さんの取り組みだと思いますが、引き続きご見解をお願いします。

守沢 | 本日のお話にも出ていた、ある人を介してまたその先にいる人と繋がってみたいところを、我々はテクノロジーの力を使ってやっていきたいなとまさに思っていて、地域創生のイベントを色々な場所で実行されている、地域を支えられている方々ってなかなかフォーカスが当たってなくて、受け入れる側としての労力が掛かっていると思うんですけど、そういう受け入れる側の人にもバッジを発行して、地元で面白い人がいるんだよっていうことを地域の魅力としてどんどん発信することで、学生さんが地域に行くきっかけを増やしたり、同じような経験をしている人同士が繋がってコミュニティが形成されたりということに寄与していきたいなという風に思っております。

野田 | NFT を学生だけではなく地元の方にも発行するのはなるほどと思いました。前回の延長ラウンドでは母ちゃんこそが大事だっていう話もありましたが、そういう域学連携を裏で支えている人にもきちんと同じフォーマットというか、地域に貢献したことへの感謝とリスペクトをオフィシャルに示していくことは非常に重要ですね。今や地域づくりにおいて、プレイヤーが地域の内の人なのか外の人なのか、境目がなくなりつつある時代ですが、そうした中で共通の印を設けるっていうのはとても興味深い話でした。ありがとうございます。

有井さんに続けてお話を聞きたいと思いますが、このプログラムって数日間のものから1ヶ月以上とか、色々なボリュームがあると思われますが、その辺について…僕は地域に密に足繁く通うことが大事だと思って一方で、今日の情報化社会においては来れなくてもできることって沢山あるなと、あってほしいなと思うんですが、やっぱり地

域に長く滞在すれば、それだけ参加者の地域に対する思いとか取り組みのクオリティなんかには直結するような感じでしょうか。滞在時間が大事なのか、来訪回数や頻度が多い方が大事なのか、或いはどちらもあんまり関係ないのか、感覚的な回答で結構ですので、お聞きしたいと思います。

有井 | 期間に比例するとは思いますが。当然人間なので、地域との繋がりや周りの人との関係とかは短期間ではできないもので、1年掛けてできるもの、10回繰り返してできるものというのはきっとあると思います。僕らはそのきっかけ、一歩目みたいところを作ってるイメージでして、数多の選択肢があって色々な地域がある中で、最初に始めたのがワークアカデミーのプログラムを通して洲本に触れるということで、色々な探求のきっかけになってくれたら良いなと思っています。それで目的が全て完結するということではありませんが、リテラシーというか、入口として挑戦してもらいたいなプログラムを意識して作っているという感じですね。

野田 | ありがとうございます。そろそろお時間ということで中締めとさせていただきます。コメンテーターから総括というか、コメントを頂いて一旦閉会とした上で、本日も延長戦に移っていききたいと思います。ではお二人から最後に、何か一言ずつお願いできますか。

中川 | 先に行きますね。森下君っていうS3の学生と真夜中に2人でボロボロになりながら一晩で報告書を作った記憶があるんですけど、それで彼との距離感が近づいたような気がしていて…改めて有井さんにお聞きしたいのが、そういう共有の時間とか、樫野さんが仰っていたような距離感を大人たちはどうあざとく設計していけるのかというところです。その上でアルバイトやボランティアをどう位置付けるか、同じ時間を過ごすにしても志のある体験と単なるバイトは違ったりするので、ゴールありきのプログラムだとそういう時間は作りにくいじゃないですか。ワークショップで仲良くなってとかは有り得るかもしれませんが。そういう部分はどう考えていらっしゃるか。

有井 | このプログラムで誰が得するのかみたいな話は、ご質問の中にも資料の中にもあったんですけど、学生側にとって限られた4年間で何を体験するのかという点で見ると、こちらが時間を逆に提供してもらってるという風に捉えています。濃度の高い関係を本当は作りたいんですけど、時間搾取みたいなことにはならないよう、企業が支えるような仕組みを作りたいなって思っています。

例えばそういうボランティアや地域に貢献することが経験という資産に変わって、その価値を生み出す経済圏みたいなものが作れないかなって、そんなことを考えています。単純にボランティアで経験できるんだから全部任せるん

じゃなくて、学生も何かメリットを取りに来るし、企業も考えがあるし皆が対等なんだよという風に、それを大人たちが待っても全然何も始まらないので、学生が動く為の仕組みを作りたいと思っています。その先に仰られたような濃密な関係が生まれて、人生を変えるようなきっかけになれば良いかと、価値のある取り組みになるのかなって考えています。

野田 | ありがとうございます。続いて辻さん、よろしくお願いします。

辻 | 最後は人というところに落ち着いて、ちょっとホッとしたかなっていうのが正直な感想なんですけれども、ワークアカデミーさんのプログラムに集まってこられる学生さんって有償ボランティアではない訳ですよね。

有井 | 大学にうちの職員が在住してですね、キャリアの相談とかに乗っている中で、大体1万人ぐらいの学生さんと接点を持っています。そこでこういう案内をさせてもらったりしてるという流れです。あとは実践授業の一環で洲本のこのプログラムを提案させてもらったりして、これで単位を取れる大学もあります。

辻 | 「おてつたび」に来られた学生さんたちと出会う機会があって、彼ら彼女らは働いて対価も経験も得るというような地域との関わり方を選んでいる若者たちだったんですけど、一方で今日のような関わりもあるということを知れて私には新鮮でもありましたし、やっぱり人に落ち着いて安心したっていうのが今日の正直な感想です。以上です。

中川 | 人っていう言葉がこれだけハレーションを起こすのかっていうね。でもね野田先生が仰ってたように人が要らないっていう訳ではないんだよということですね。

野田 | ありがとうございます。ではこれにて座談会を終了させていただきます。引き続きだたらお喋りできたらと思いますので、ご参加頂ける方はこのままお付き合い下さい。冒頭の繰り返しになっちゃうんですが、シンポジウムの本番に向けて、ここで頂いたお話もそうですし、他のワーキンググループでも色んな議論をしています。これらをきちんと統合して、これまでの洲本市が歩んできた10年間の批評する…批判ではなく批評というところがポイントです。11月19日に洲本市文化体育館文化ホール、事前申込は必要ですが入場無料でございます。よろしくお願いします。という訳で全3回にわたる座談会でしたが、ご聴講頂きありがとうございました。

After Discussion

野田 | いきなりでアレですが樋口さんと榎野さんに…本編でも聞こうかなと思っていたことなんですけど、学生の団体

やユニットで、学生が大勢いると現地に行ける回数や関わりが全く同じではなさそうな中で、あからさまな言い方をするとモチベーションの差って結構あるんですか。

樋口 | 今のところはそんなに差は感じていなくて、むしろ自分は洲本出身なので他の人より思い入れが強いんじゃないかなって思ってたんですけど、他の学生も結構モチベーションを持ってきてると思いますし、逆に初期のS3に私がいたら活動に付いていけなかったんじゃないかなって思っています。

榎野 | 私は最初のビジネスコンテストのメンバー3人と、その後同級生が参加してサークルがスタートしたんですけど、やっぱりその時ビジネスコンテストに関わってたメンバーは色々調べたり、夜中までミーティングしたりみたいな過程があったので、良くも悪くも色んな熱量が重なった状態でスタートしたっていうところもあって、じゃあ新しいことをやってみようという時の温度差みたいのはあったんですが、今はサークルがスタートして2年ぐらい経つんですけど、その時になると同級生との温度差はどんどんなくなって同じような感覚で進んでいるなっていう風に感じていて、それがどういう風に改善されていったのか、ポイントになったのかっていうところを探りつつ、今年入った新入生メンバーにもそういうきっかけになるようなタイミングを作りたいなと焦っているところです。

野田 | きっかけや立場は様々だという話は前回でもありましたが、僕自身もうボを動かして色々思うところもあるので、そういった意味であえて当事者に質問してみたいという主旨でした。ありがとうございます。僕はもうモデレーターを放棄しているので、皆様からフリーに発言して頂ければと思います。

高山 | 僕の学生時代の話をする、結構モチベーションの差はあったと思っていて…古民家改修は数年掛かりのプロジェクトで、一日二日でできないことを毎回やろうとするんで、最低でも一週間、長くて二週間泊まり込んで、残り二週間は大阪や京都に帰るみたいなことをずっとやっていて、そういうことをしていると皆バイトや遊びの時間が取れへんってことでモチベーションの差が出てきたっていう感じでした。なかなかプライベートの時間が取られへんようなペースで一年中通い続けるのは難しいなって。途中の質問であつた、卒業後も淡路島にプライベートで行ったり、関わり続けるのはそういう当時のモチベーションが繋がっているなと思っていて。当時と同じような感じで卒業してからも淡路島に行こうっていう。

うちは鈴木先生がだいぶ自由にさせてくれて、自由時間も自分たちで作れたので、淡路島で遊ぶ時間とか、皆バラバラに過ごしたりもできてたんですけど、そういう時に一緒

にやってきた学生とかは、卒業した後に NPO やるよって声を掛けてもレスポンスが早かったりして…僕の体験ではプロジェクトの時間じゃなくて、地元をふらふらして地元の方と喋って、名前で呼んでくれるようになって、僕からしたら淡路島を無視できない関係になってる状態があって、プロジェクトが上手くいったというところではなくて、自分自身で淡路島と関わり続けるきっかけを見つけに行くというか、そういう時間を自分で作るっていうのが一番大きいんじゃないかなって思っています。

野田 | 今の話なんかを踏まえて言うと、モチベーションというのはある意味ベクトルを持った概念かなって思っていて、高い低いっていうよりは何に対するモチベーションなのか的大事なのかもしれないですね。例えば同じプロジェクトをやっている、プロジェクトを通して地元のおじいちゃんおばあちゃんから何か歴史とか文化を聞きたいんだという子もいれば、技術や技を盗みたいんだっていう人もいますよね。僕もよく学生には「自分だけの下心をちゃんと持っとけ」って言うんですよね。当然プロジェクトとしてやるべき取り組みをきちんとやるのが大前提ですが、自分の中の裏テーマみたいなものはちゃんと設けておく。そうすると万が一活動に対するモチベーション A が低くなった時に自分の野心というモチベーション B で持ち堪えて、活動自体はどうにかこうにか続いているように見える、みたいな。先程のコメントもそうなんです、プロジェクト自体は至上命題であり続けるにしても、それ以外に幾つもの目的を持っておくの良いのかなと思いますね。逆に言うとそういう複数のチャンネルをどう設計するのかということでもあります。

森下さんからコメント頂いてますね。是非マイクオンにしてご発言を頂ければと思います。

森下 | ありがとうございます。野田先生が仰られたベクトルの話について、自分のコメントと近いところを仰って頂いたのかなっていう風に思っていて、学生が代替わりする時はどうしても前の学生の印象もあるんで、その雰囲気の違いを単にモチベーションがないという風に捉えられがちなのかなって思っています。そういう学生の興味とか関わりの在り方みたいなのを、どういう風に団体の在り方とか、地域との接し方とかを柔軟に変えていけるのか、コミュニケーションしていけるのかっていうのは大事な課題になるかなっていう風に捉えております。

野田 | ありがとうございます。今回のシンポジウムの主旨として、いわゆるクエストカレッジを新しい域学連携の形としてどう推進していくかという話が目的としてあって。まあ有り体に言うと、それだけじゃ大学と地域との関係を背負いきれないだろうなって思ってるんですよね。別に悪

い意味じゃなくて、言い換えればクエストカレッジもあくまで域学連携のひとつの選択肢だという考え方です。さっきのモチベーションの話とか、学生がどういう形で関わることかという話にも繋がってくる訳なんです、学生一人ひとりがそれぞれ色々なことを考えていて、色々なビジョンを持っていて、或いはビジョンがあろうがなかろうか、地域との適切な接続方法を学生が自分で選べるっていう状況が一番望ましいんじゃないかなって思うんですよ。クエストカレッジもあればビジネスコンペもあって、或いは委託業務というカードもあって、というような様々な関わり方がきちんと認知されて、平等に位置付けられていくべきですよ。さっき森下さんが仰られたように、一本の物差しだけで評価を下してしまうというのは地域にとっても学生にとっても幸福なことではないですよ。そういうことが重要なかなって思ったりします。

森下 | 物差しをどういう風に、地域側にとっても学生にとっても良いものとして考えていくのが域学連携の目的だと思うので、それを地域側でどう共有していくのか、色々な物差しがあるけどこれはダメだろうみたいなのは地域側にあるかもしれませんが、そういうところも難しいなと思いました。

野田 | 以前、域学連携は立体的に評価すべきだということをよく言っていて。先程の物差しを数直線ではなく三次元座標で考えた時に、X の数値というか評価はダメだけど、Y や Z では優れたスコアを残しているかもしれないみたいな視点が必要だなと思っています。そこに更に、以前触れた短期長期の話も入ってくるので、良くも悪くも一律の評価や比較が難しい取り組みでもあります。

或いは森下さんの京都大学が考案した素数物差しってありますよね、目盛りが足りないように見えて、2 本使えばあらゆる計算ができる。言葉遊びかもしれませんがあいう捉え方もありますよね。

湯河 | すいません、発言いいでしょうか。今 S3 で樋口さんと共同代表をさせて頂いている京都大学の学生なんですけれども、先程からモチベーションという話が上がってると思うんですけど、確かに現在の S3 を見てると、明確に何かやりたいことがあって入ったというメンバーが多いとは思ってなくて、どちらかというと地域で何かができるとか、教育事業とか食べ物事業に何となく興味を持って入ったメンバーがわりと多いのかなって思っていて…でもそれぞれ別に熱がないという訳でもなくて、最近だと洲本の商店街付近に住んでいる中学生の子が S3 と活動してくれたり、愛着を持って活動してくれている地元の方もいて、僕自身洲本が好きっていうこともありますし、学生と洲本を繋ぐ場として S3 は機能してるのかなって思っています。

もっと学生が洲本に愛着を持てる場を作っていきたいというのを個人的なモチベーションとして持っています。

野田 | S3 の現役のお二人は…さっきの話の繰り返しになっちゃうかもしれないんですが、S3 という存在そのものがきっかけとなったのか、或いは S3 がやってる活動に惹かれて加入したのか、多分どっちも混ざってて明確に線引きできない話かもしれないんですが、どういった経緯で加入されたんですか。

樋口 | 私は結構存在がすごい大きくて、さっきも学生と洲本を繋いでくれる存在って話があったんですけど…私も元々は地元を良くしたいっていう思いから高知大学地域協働学部っていう地域と関わる学部に入ったんですけど、地元を良くしたいのに地元に離れて高知で活動していることや、洲本に帰る度に景色が変わることに寂しさを覚えていたりして、自分一人では活動を起こしたりとか、他の大学がやってる活動に参加するってのは難しかったと思うんですけど、S3 があったことで自分が地元で関わり続けるきっかけになって、それはすごい大きい存在ですね。

野田 | ゲートウェイとしての存在が大きかった訳ですね。

湯河 | 僕は元々は S3 の事業ですね、商店街で町おこしに関わるとか教育事業で地元の中学生に授業をするっていうことをやってるのを知ってすごい楽しそうだなと思って、洲本のことを殆ど知らない状態で通わせて頂いてたんですけど、活動していく中で、やってることの面白さもあるんですけど、どっちかっていうとメンバーや先輩方、地元の方との繋がりがあって、人との魅力をかなり大事にされてるサークルだなっていうのを感じて、そこが自分にとっても大事なものになってるかなって思います。

野田 | なるほど。ここでちょっとあえて有井さんに…無茶振りかもしれないですけど、プログラムを組む時に、今みたいなお話もそうだと思うんですけど、学生のニーズを集めたり調べたりというようなことを普段の業務でされてると思うんですが、ここ最近の学生のトレンドっていうのはどのように感じていらっしゃいますか。昔とはまた違ってきてるのかなと思うんですけど。

有井 | 歳がばれちゃうような感じになるんですけど（笑）、僕の就職活動の時って、わりとこう都市一択で大手に就職していくのが当たり前だったんですけど、今ってあんまりそういう話を聞かなくなったというか、SDGs の教育なんかを小さい頃から当たり前に受けて、地域や社会をどう持続させていくかみたいなテーマに興味がある方がすごく多いっていう風に感じていて。

うちでも SDGs アワードといって中高生や大学生に発表してもらいたいなことをやってるんですけど、やっぱり地元志向というか、自分の生まれ育ったところに貢献したい

と考えてらっしゃる方がこの 20 年ぐらいですかね…すごく増えたかなと。それを実現できるテクノロジーが発達してきたというのもあると思うんですけど、選択肢はまだまだ増えていくんだろうなっていう風に感じます。

野田 | ありがとうございます、ちなみに榎野さんは就職で関西を離れるんですか。

榎野 | 東京で就職することになっております。実家は神戸にあるので、帰省するタイミングで洲本にも寄れたらなって思ってるんですけど、やっぱり神戸と比べるとアクセスは悪くなってしまうので…私もそうなんですけど洲本の方々も悲しんで下さって、それも距離が縮まった出来事のひとつかなとも思っています

野田 | OBOG としてどう関わり続けていくのかっていうのは歴代の先輩たちも含めて皆悩むところかと思いますが、全然無理する必要もなく、お互い細く長くっていうのも僕は悪くないと思います。

高山 | ちょっと宣伝みたいになるんですけど…今ちょうど東京からどう関わるのかっていう話があったと思うんですけど、そういう声が実際に僕の周りでもあって、今域学連携のことをメインにした NPO 法人の設立に向けて動いてるんですけど、代表理事には S3 の前の前の代かな、鈴木君に就いてもらって。卒業した後に洲本に関わりたけれど、皆ばらばらに各地にいて足掛かりがない方が、現役学生のサポートをしたり域学連携の研究を深める為の組織を作っています。シンポジウム当日にお会いできれば、詳しいことも説明できると思いますので、是非参加してもらえたらと思います。これから卒業生になっていく人が、野田先生が言ってたように無理のない範囲で洲本に対して関わりを作る窓口みたいなものになればいいなと思ってるので、また宣伝させていただきます。ありがとうございます。

野田 | 今回は 10 周年のシンポジウムですけど、20 周年はもう NPO の皆が企画したら良いんじゃないですか。是非そのくらいの射程を持ってやってみて下さい。

重乃さんからコメントを頂いています。【何かプログラムや活動をする際、ミッション・目的はあれど、その中でも個人の情熱・野心はどこにあるのかを探っていけるような要素や余白を持たせることも大切だなあと感じました】…そうですね、余白や遊びの部分ですよね。実利の中の情緒というか、あまりこうミッションでガチガチにし過ぎることで失われちゃうものとか切り捨てられてしまうものもあるよなと、僕自身も活動していてよく思います。

ばちばちお開きでしょうか。最後に何か話し足りないことがあれば。

榎野 | じゃあ 1 個だけ…さっき洲本に深く関わりたいと思ったきっかけについて 3 つ目が出てこなかったんで

すけど思い出しました。提案が形になったタイミングっていうのが3つ目としてあって、発表でもお話しさせて頂いたんですけど、サークル活動を通してマーケットでオリジナルの何かプロダクトを出したいとかワークショップをしたっていうことであったり、百貨店での出張マーケットをしたっていうお話をしていて、構想自体はマーケットの中でもあったんですけど、それを私たちの発言を通して実現に向けて急ピッチで動いて下さって、それをお手伝いするっていう形ではあるんですけど携わらせて頂いた時に、学生の4年間の中で提案が形になることはなかなかできるものではないので、それを一緒にできたというか、パートナーにして頂けたっていうことが、ひとつ距離が近づいた理由でもあり、やりがいを感じて、恩返しをしていきたいなと思うきっかけだったかなということを思い出しました。

野田 | ありがとうございます。最後に伏線を回収できて良かったです（笑）。さて、ここまでの全3回を僕はまとめなければいけません…全ての意図を拾うのは無理かもしれないんですが頑張ります。次はシンポジウム当日にお会いしましょうということになるんですかね、こういった交流はこれからも是非続けていけたらと思います。引き続きよろしくお願いします。改めて本日はどうもありがとうございました。

編集後記

本書の編集補助を担当させて頂きました近畿大学の大隅愛斗（おおすみ・まなと）と申します。この度、私が所属する研究室の講師である野田満先生のご厚意でこの場を設けて頂きました。ありがとうございます。内容は自由で良いと仰って頂いたので、いち学生の視点として、域学連携に参加して感じたことについて述べさせていただきます。

私が域学連携の活動をしていて一番感じたことは、域学連携で体験できることや活動で得られる経験値は、数年後社会に出ていく学生にとって非常に貴重なものであるということです。これは勿論、進行形で私たち大学生の学生生活を充実させてくれているものでもあると思います。活動中には様々な大人の方と接する為、コミュニケーション能力や、時には社会人のマナーを必要とする場面もありました。これは社会に出る前の良い予行練習になりました。

また、私たちは研究室のメンバーが有志で参加していた為、少数チームで活動していたこともあり、チームワークを取ることの難しさを痛感しましたが、こちらも良い経験になりました。

事前ワーキング（WG2）では、学生のモチベーションの差についても議論がありました。これは研究室という単位（有志で来るのか）か授業（単位取得の為に来るのか）によっても話が変わってくるのではないかと思います。ゼミ単位でも全員参加の場合は話が変わってきますが、仕事として責任感を持って挑むべきなのか、楽しみながら長く続けることが大切なのかは、これも今回のシンポジウムで重要なテーマであった“仕組み化”の話に通ずることであると

思います。といいつつ、どちらも正解ではあるとも思っているのですが、活動の中でこれは大事だと感じたことは、「悪者探しをしていては前に進めない」ということです。活動の途中で学生間でも、学生と地元の間でも何かしら食い違いが起きてしまっても、それをどうすれば解決できるのかを考えていくことで、また新たな経験値を積み重ねていきました。

以前、洲本市役所の高橋さんとお話した際に、「学生には楽しみながらやってもらいたい」というようなお話をさせて頂きました。現在、大学卒業後も域学でお世話になった地域で活動が続けたり、遊びに行ったりしたいと考えているのですが、「中途半端に通うのもご迷惑なのでは」とも考えてしまいます。ですが、高橋さんのお話を思い出して、まずは楽しく続けられる範囲で活動することを優先しようと考えています。同時にこういった仕組みをつくれば、学生と地域が楽しく活動を行えるのかは今後もゆっくり考えていきたいと思っています。

少し時間は掛かってしまいますが、社会に出て積んでいく経験を、洲本市や地元の方への恩返しに繋げていきたいと思っています。

2024年3月

近畿大学総合社会学部総合社会学科

環境・まちづくり系専攻4年

農村計画・地域デザイン研究室

大隅愛斗

スモトノイキガク！

洲本市域学連携事業10周年記念シンポジウム記録集

2024年3月20日 発行

編集 | さんそデザイン（協力：大隅愛斗 | 近畿大学）

装丁／デザイン | さんそデザイン
発行

本書は2023年11月19日に行われた「洲本市域学連携事業10周年シンポジウム」及びそのプレイベントとして同年10月18日・23日・31日に行われた「関係人口としての大学・企業の座談会」における登壇者の発表及びディスカッションでの発言内容をテキスト起こしした上で、その主旨を変えない範囲で編集を行い、発表資料の抜粋と併せて取りまとめた記録集です。また本書は令和5年度洲本市未来投資推進事業（申請者：さんそデザイン）の補助を受けて発行するものです。許可無く複製・複写することを禁じます。また引用を行う際は必ず出典を明記願います。

